

42-327



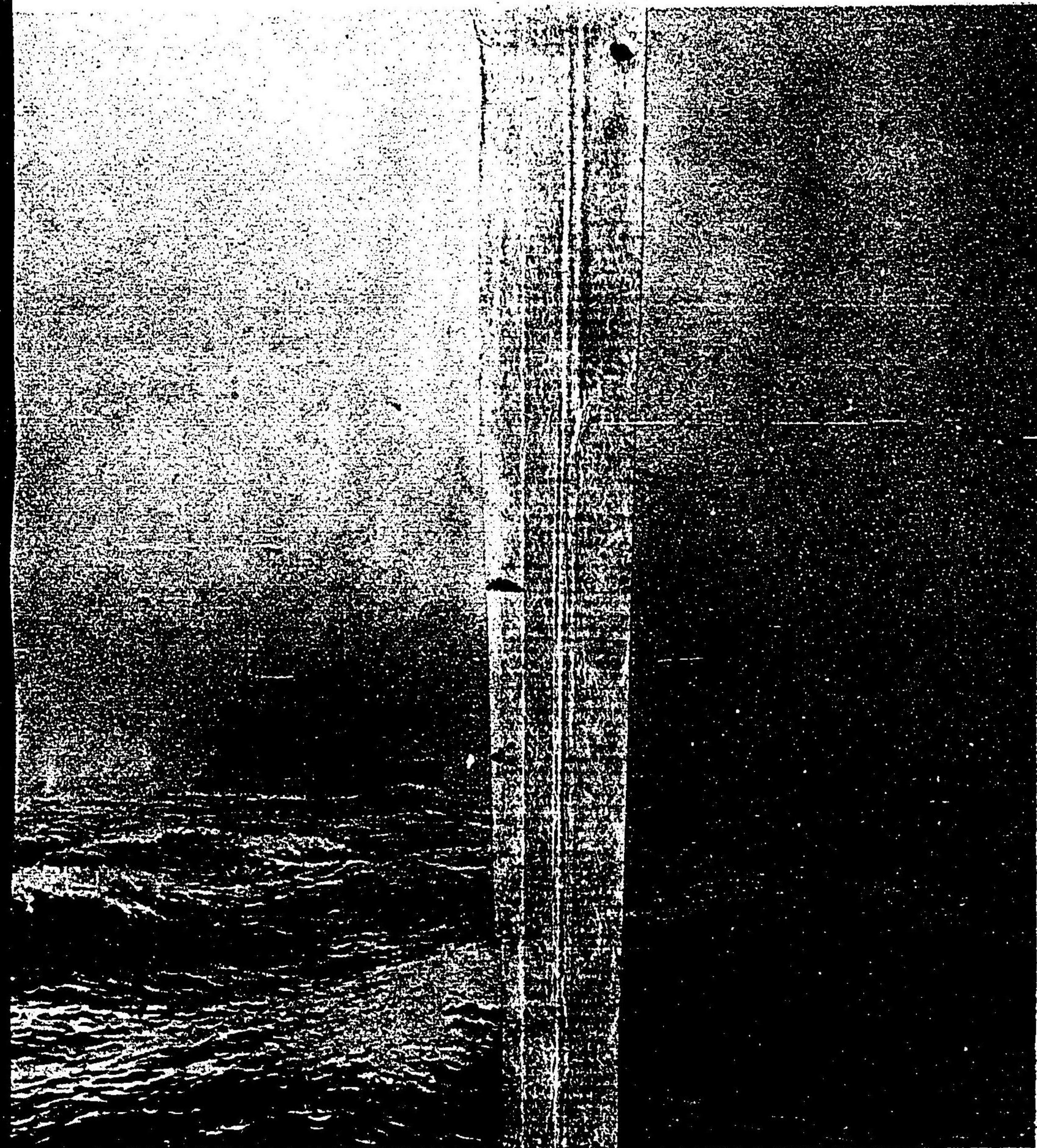
嗚呼此一戰

露國海軍中佐 ウラジミール セメヨーフ 著
前陸軍通譯 山口 虎雄 譯

東京博文館

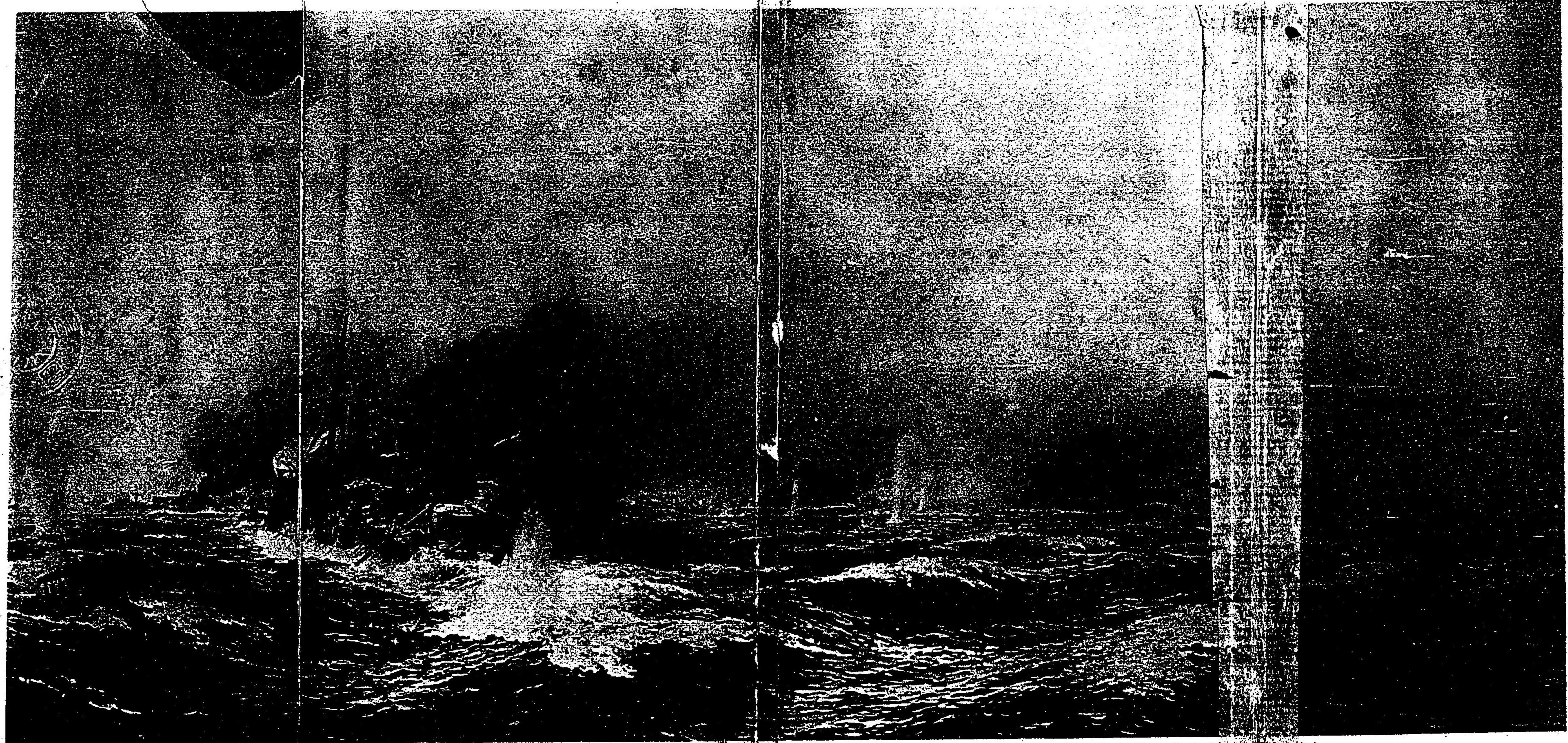
明治
45. 6. 17
内交

日 本 海 大 海



を景光るとんせ没沈や今り罹に災火六
るめし苦に災火てりあに方後

日 本 海 大 海 戦 午 後 三 時 半 光 景



るし行通りよ編左め爲んは救を之は[イヌイブ艦連驅り]トヤセオはるせ昂を登光るすとんせ夜沈や今リ雅に災火火[左
りな艦三の[ノチロギ]世三ルトンサク]ア[フローオス]はるめし苦に災火てりあに方後



東郷五八郎



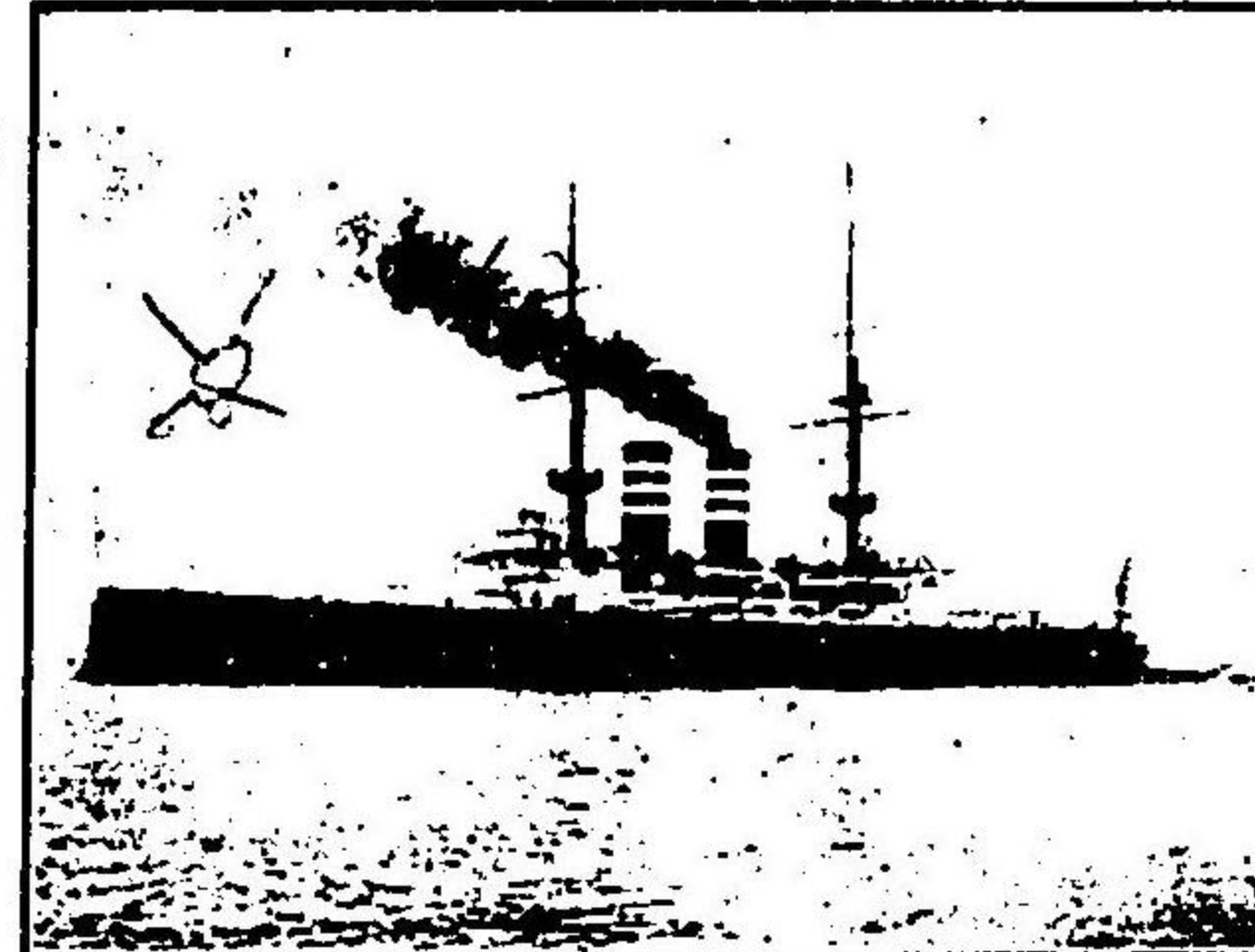


隊戰一第本日

隊戰一第國露

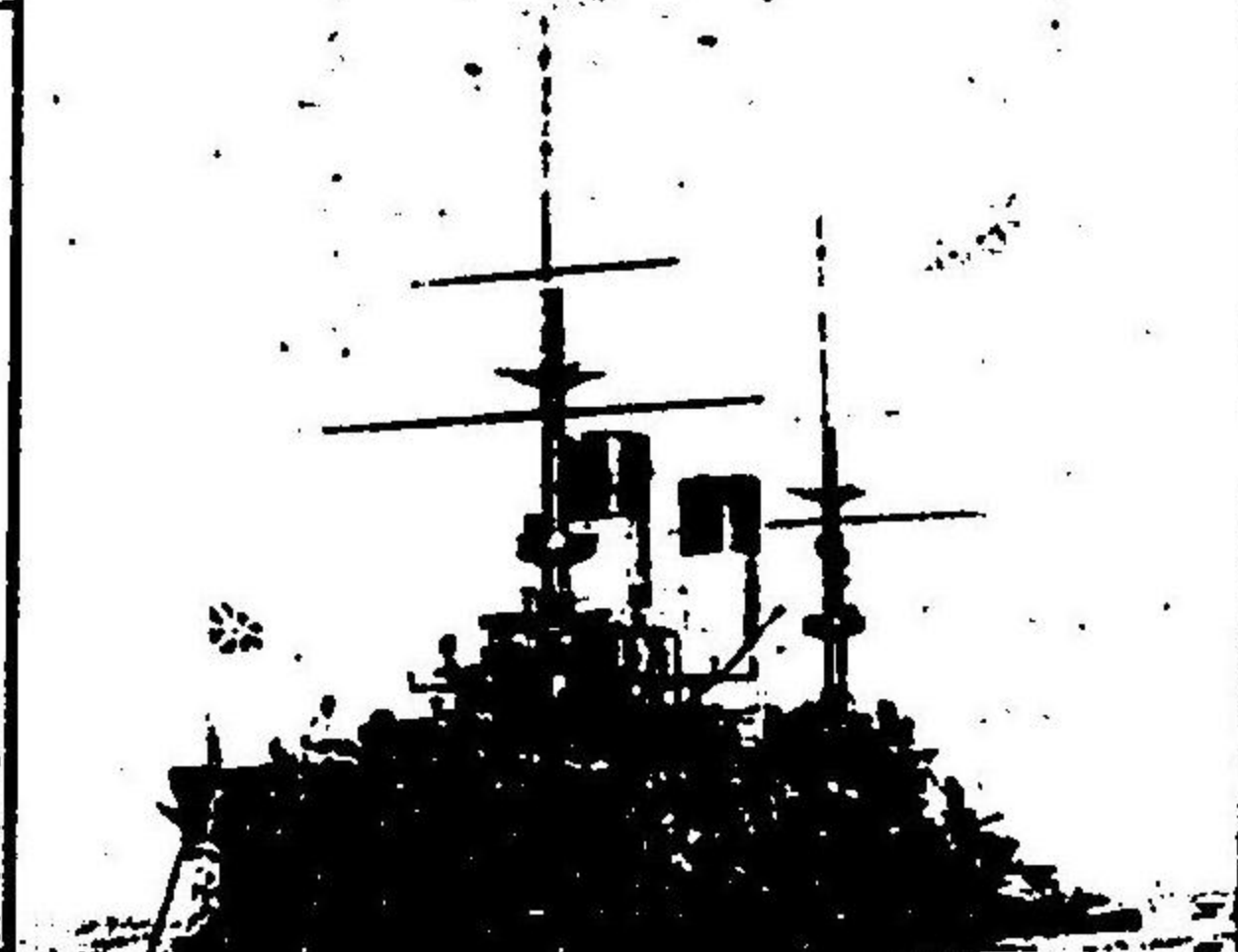
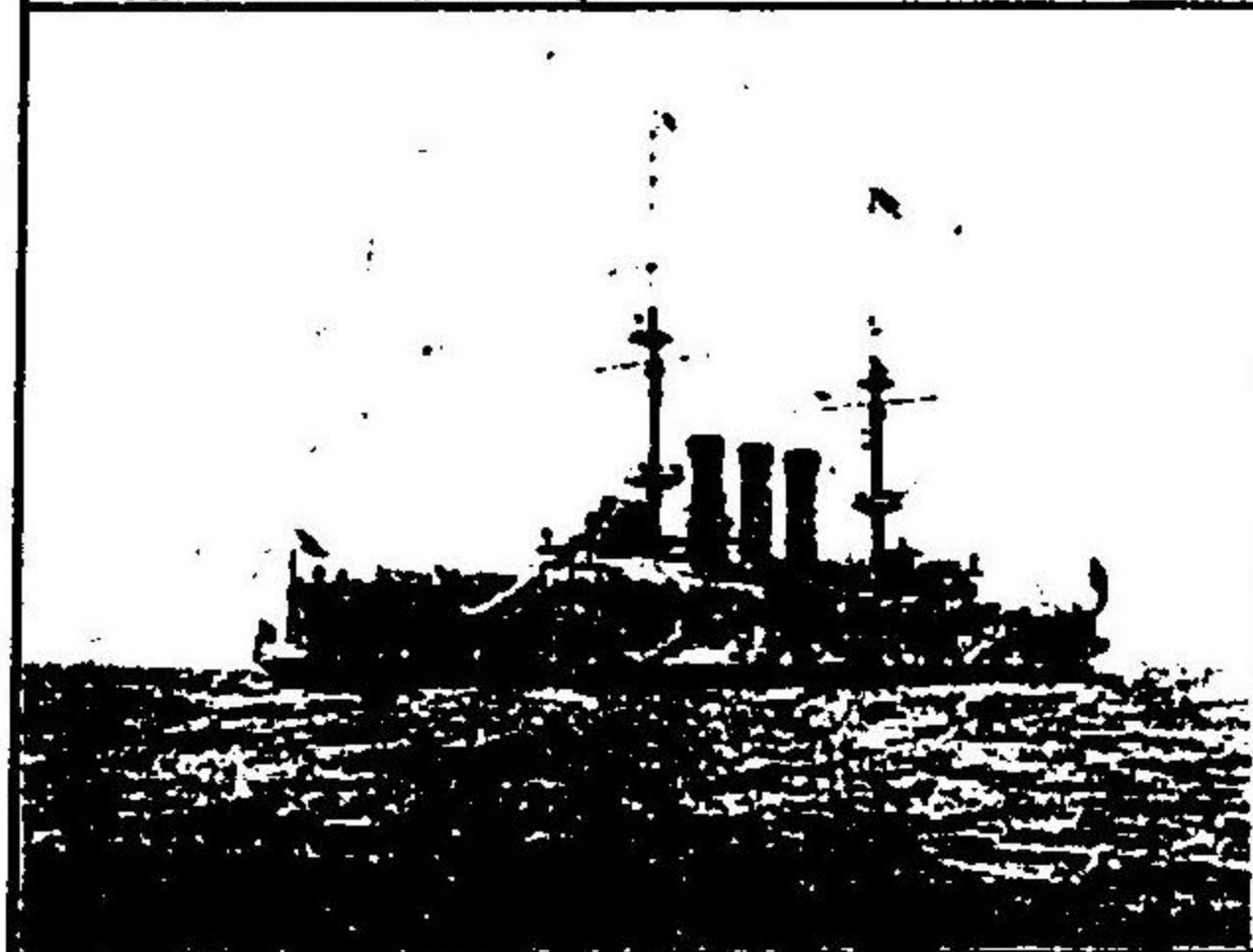
三

笠



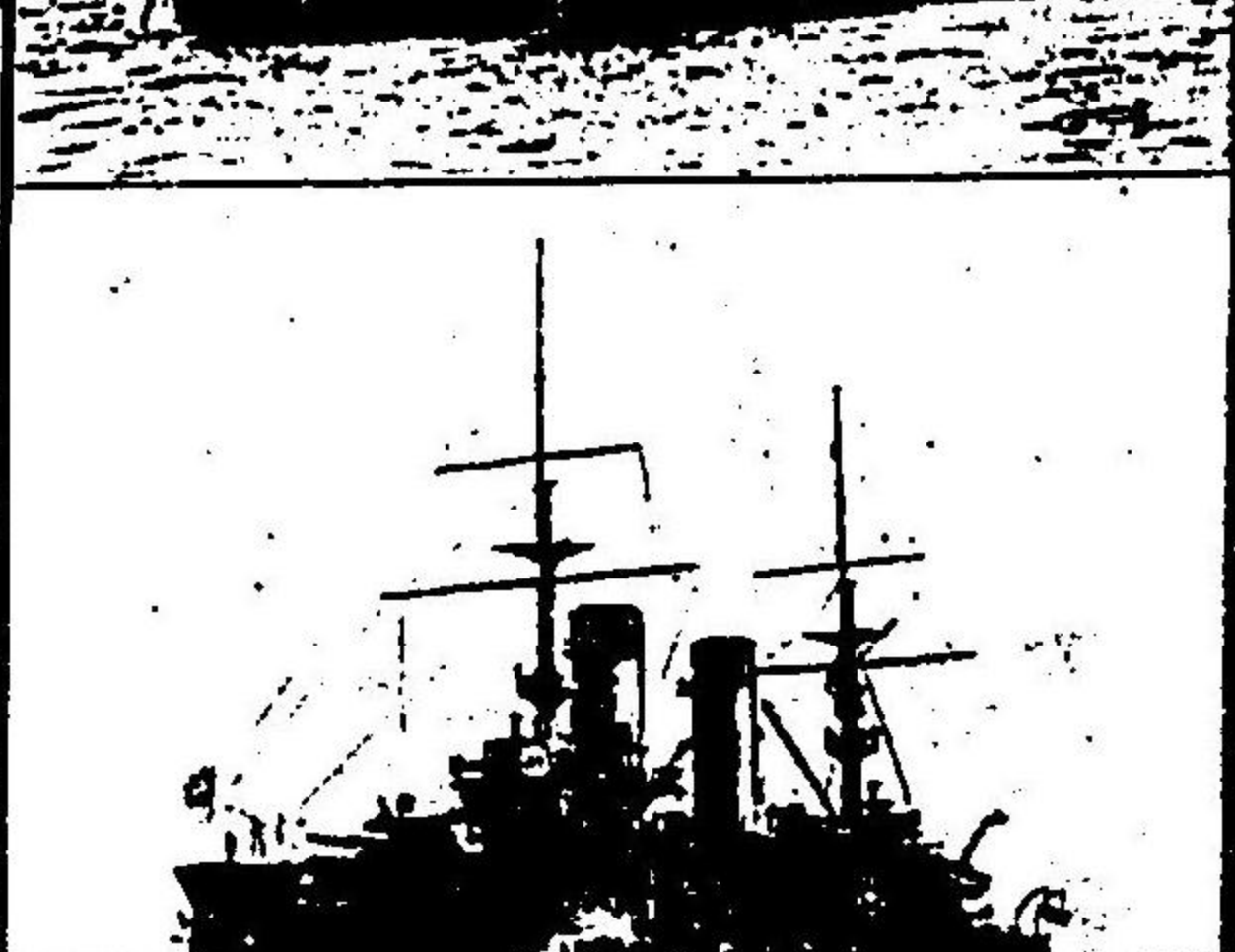
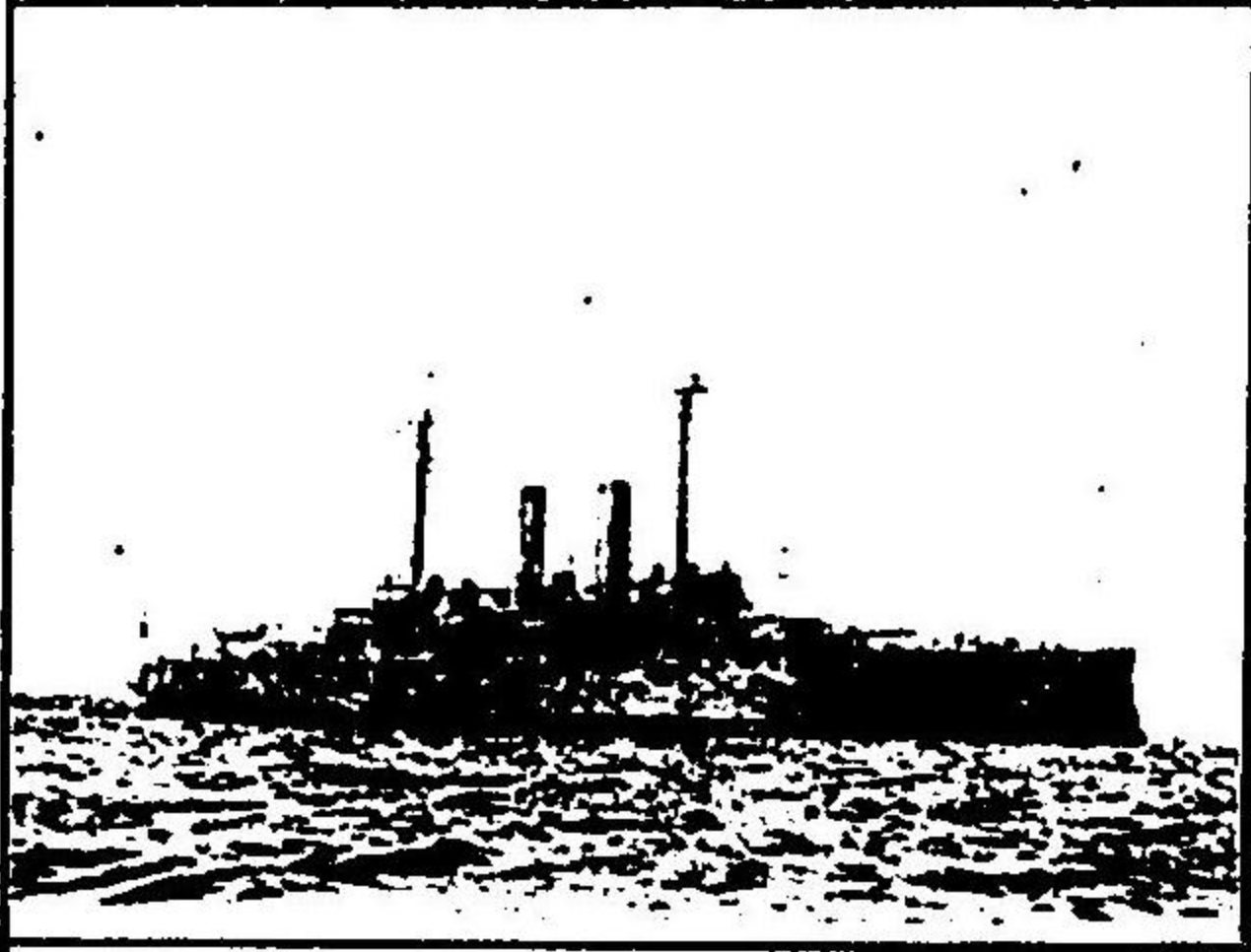
敷

島



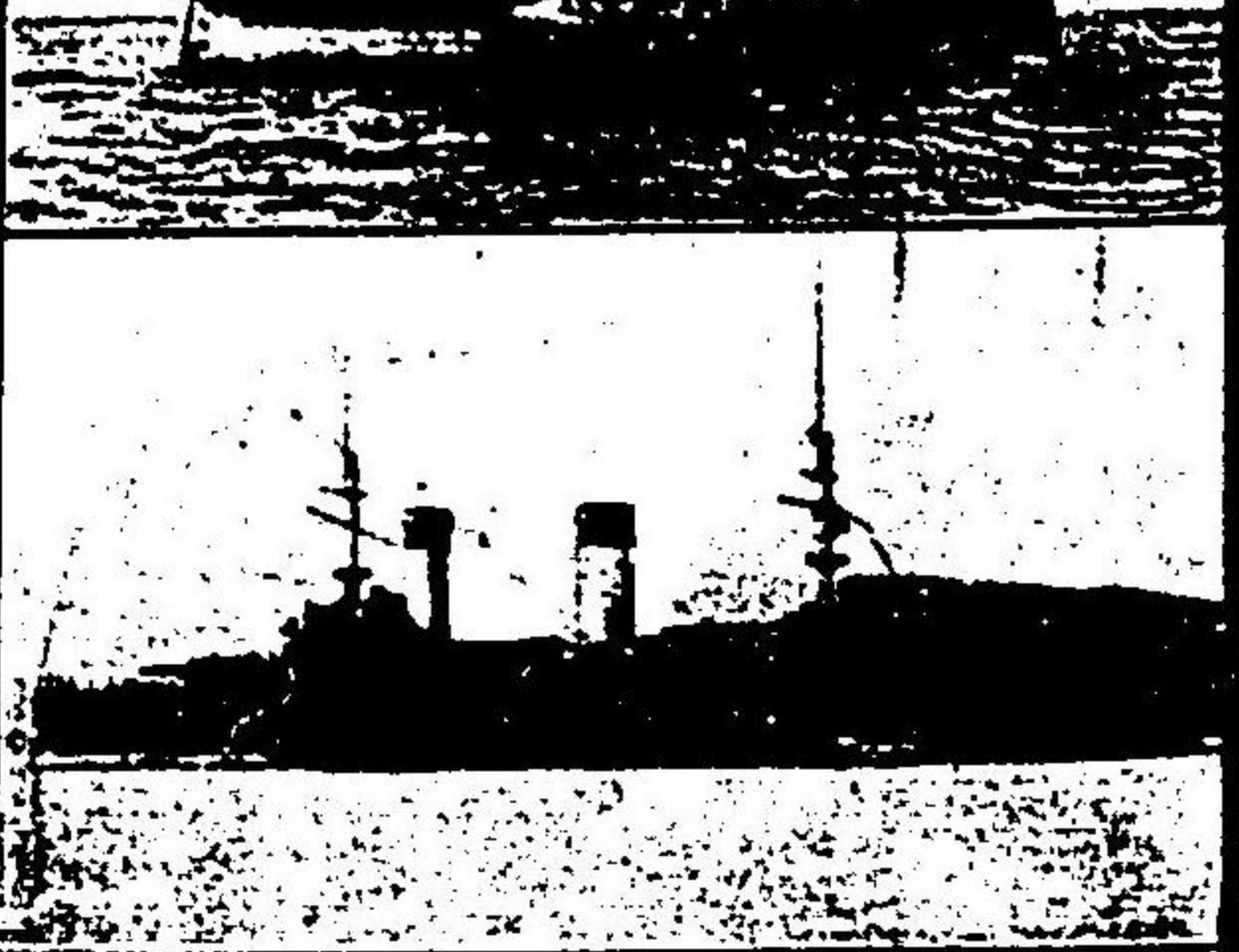
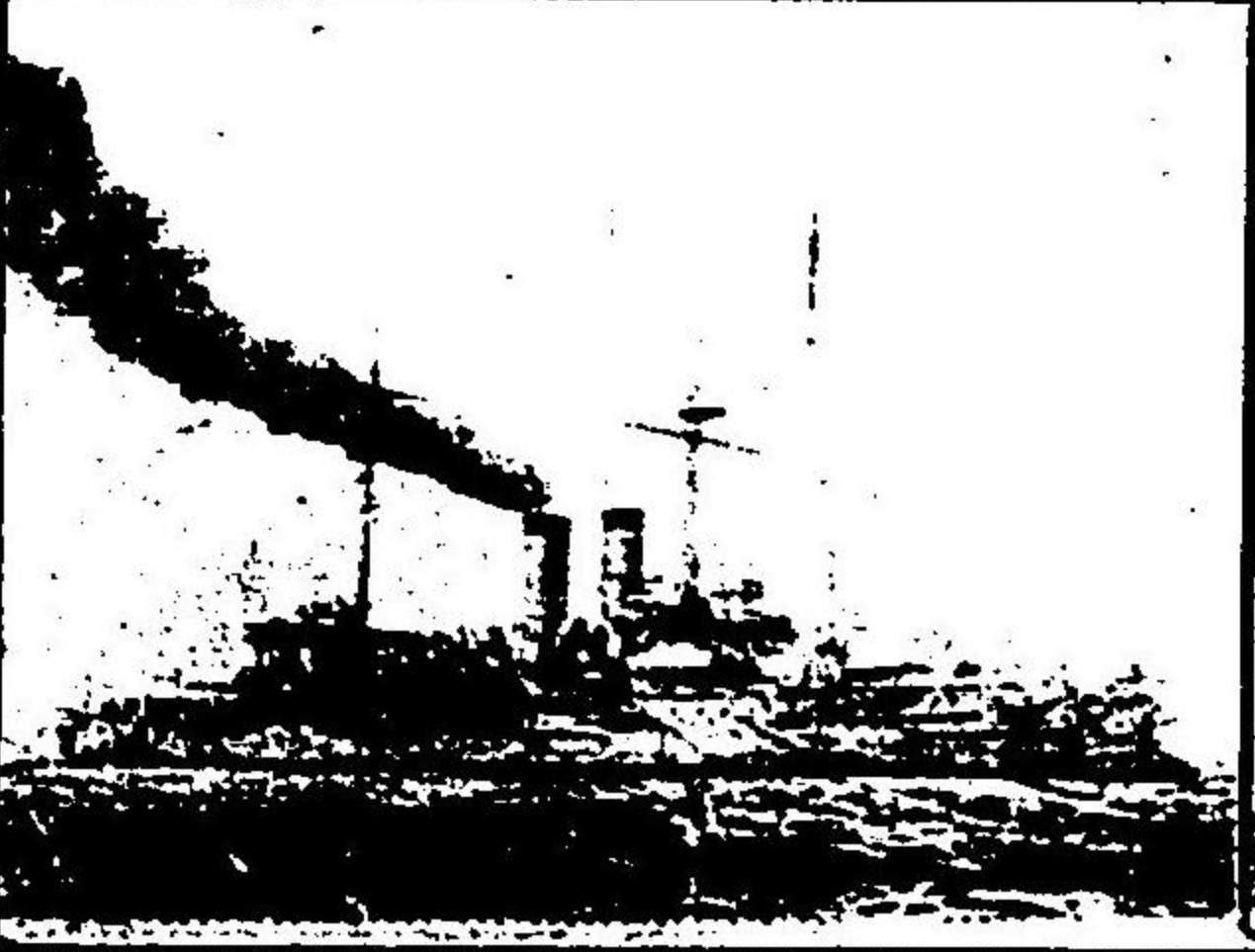
富

士



朝

日



隊戰二第本日

隊戰二第國露

出

雲

音

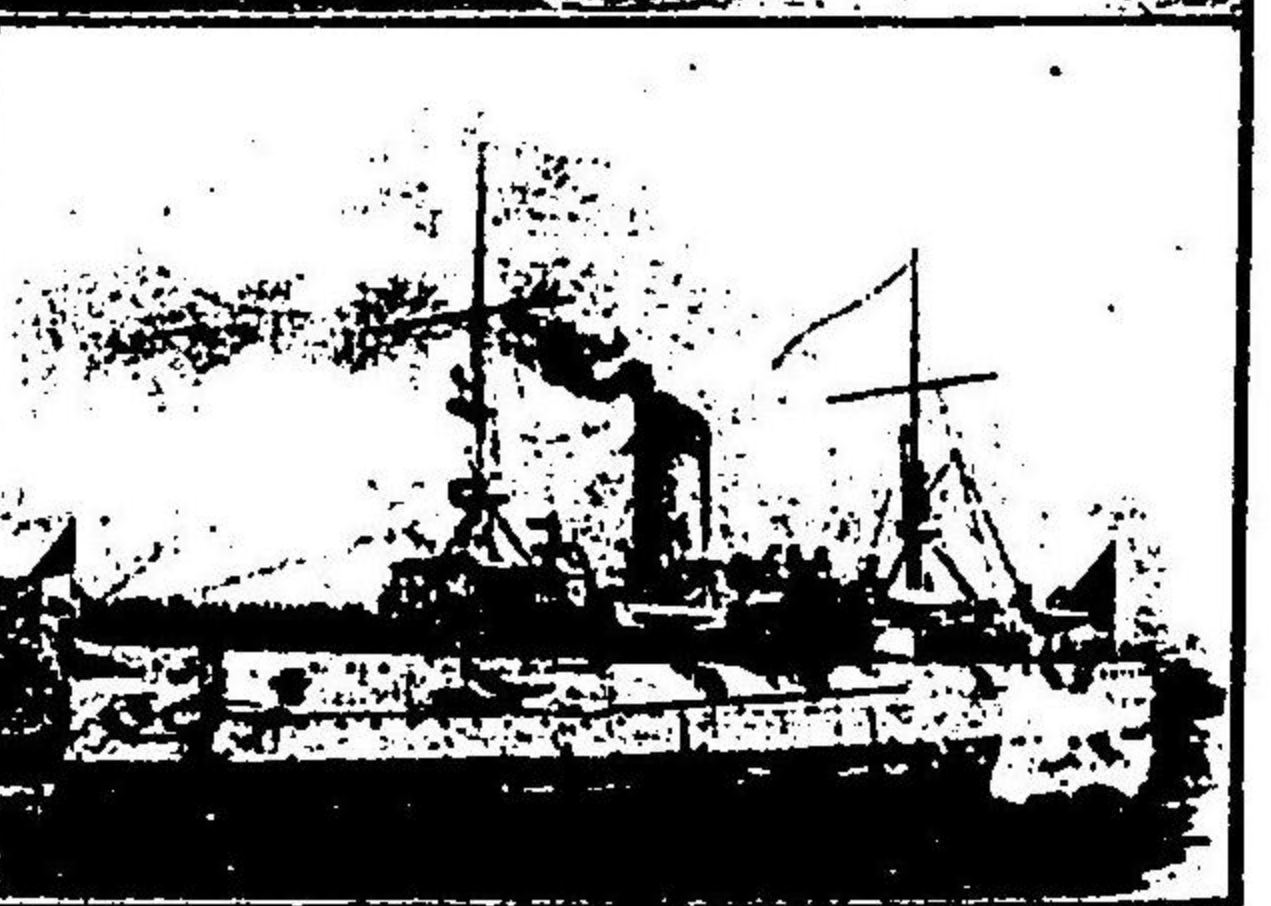
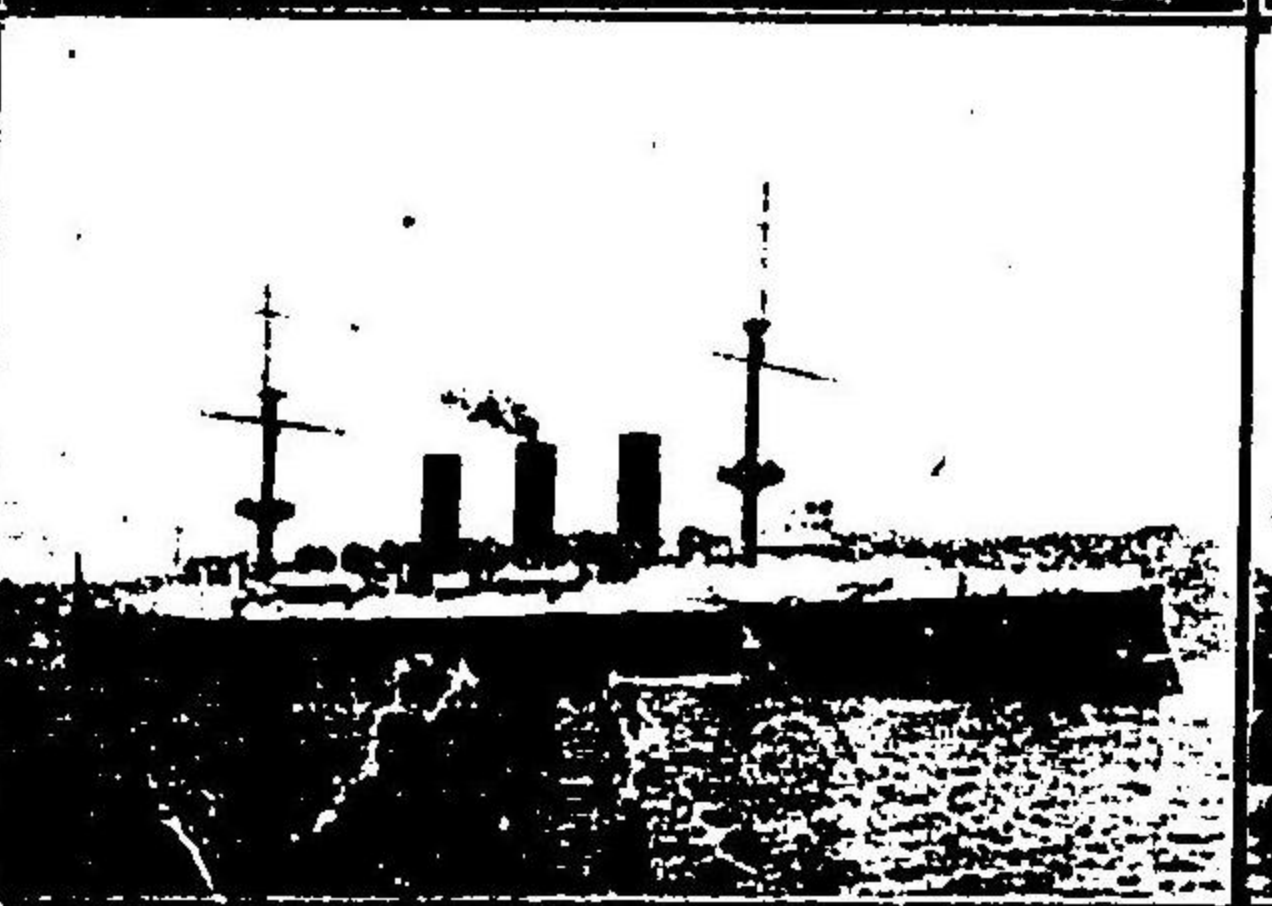
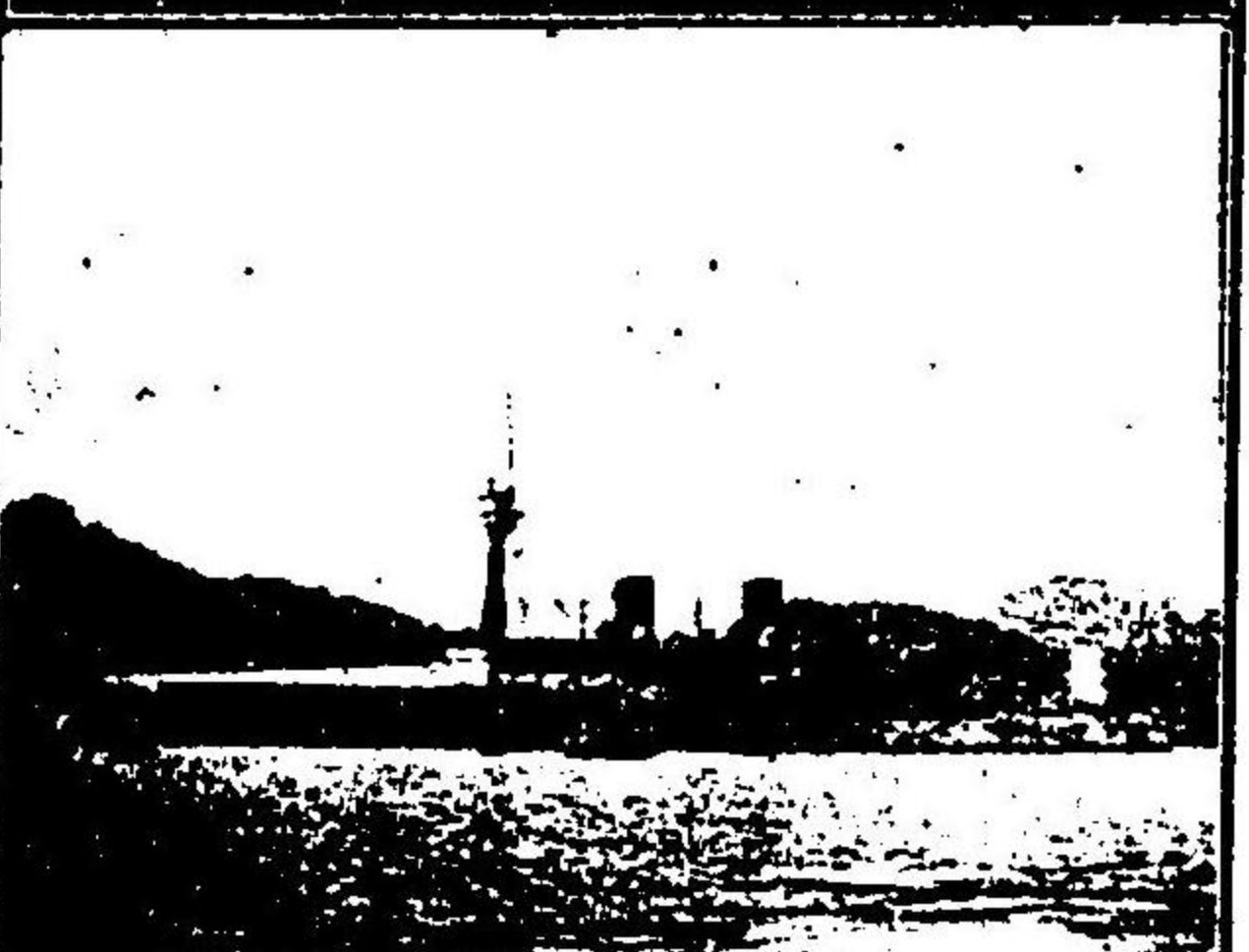
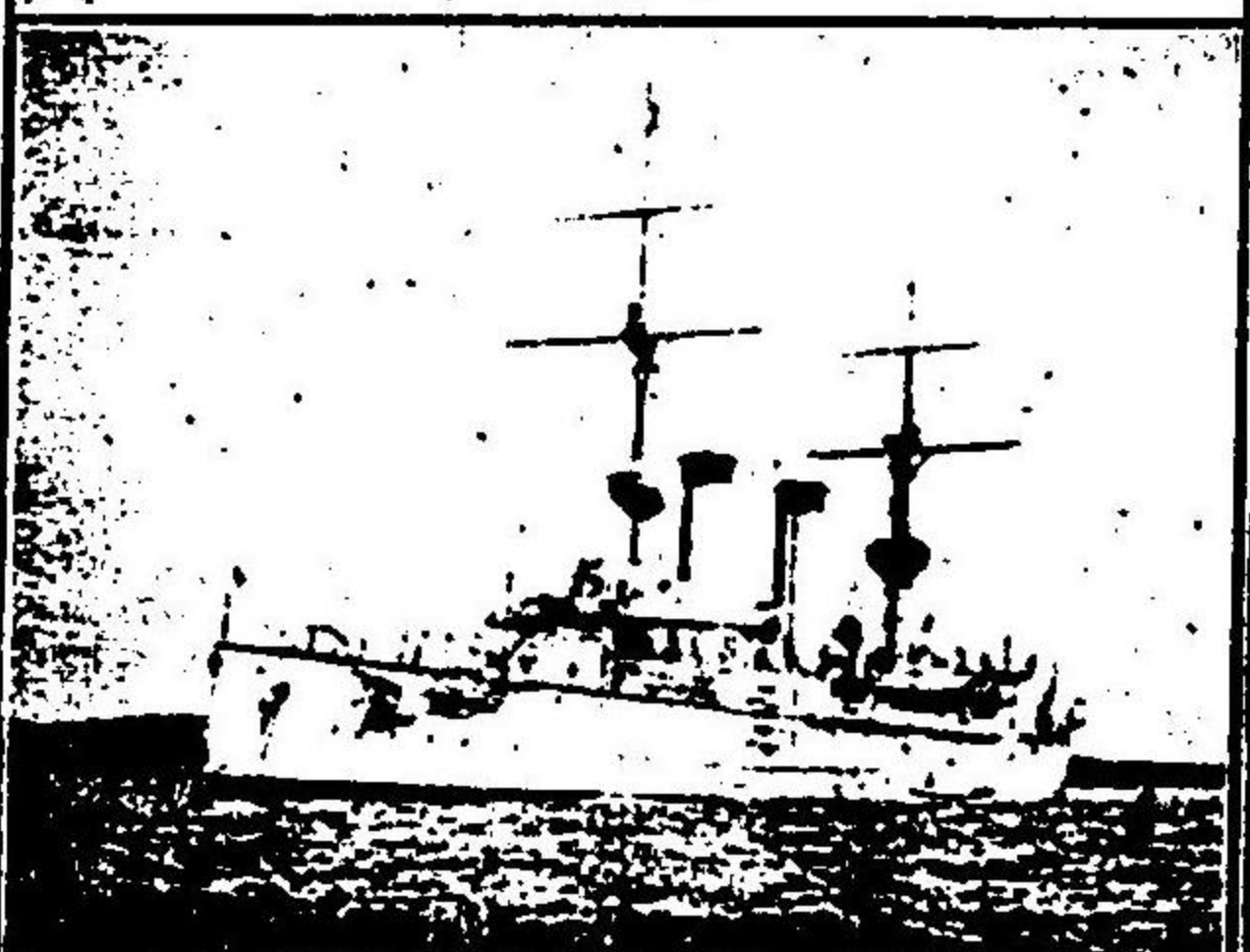
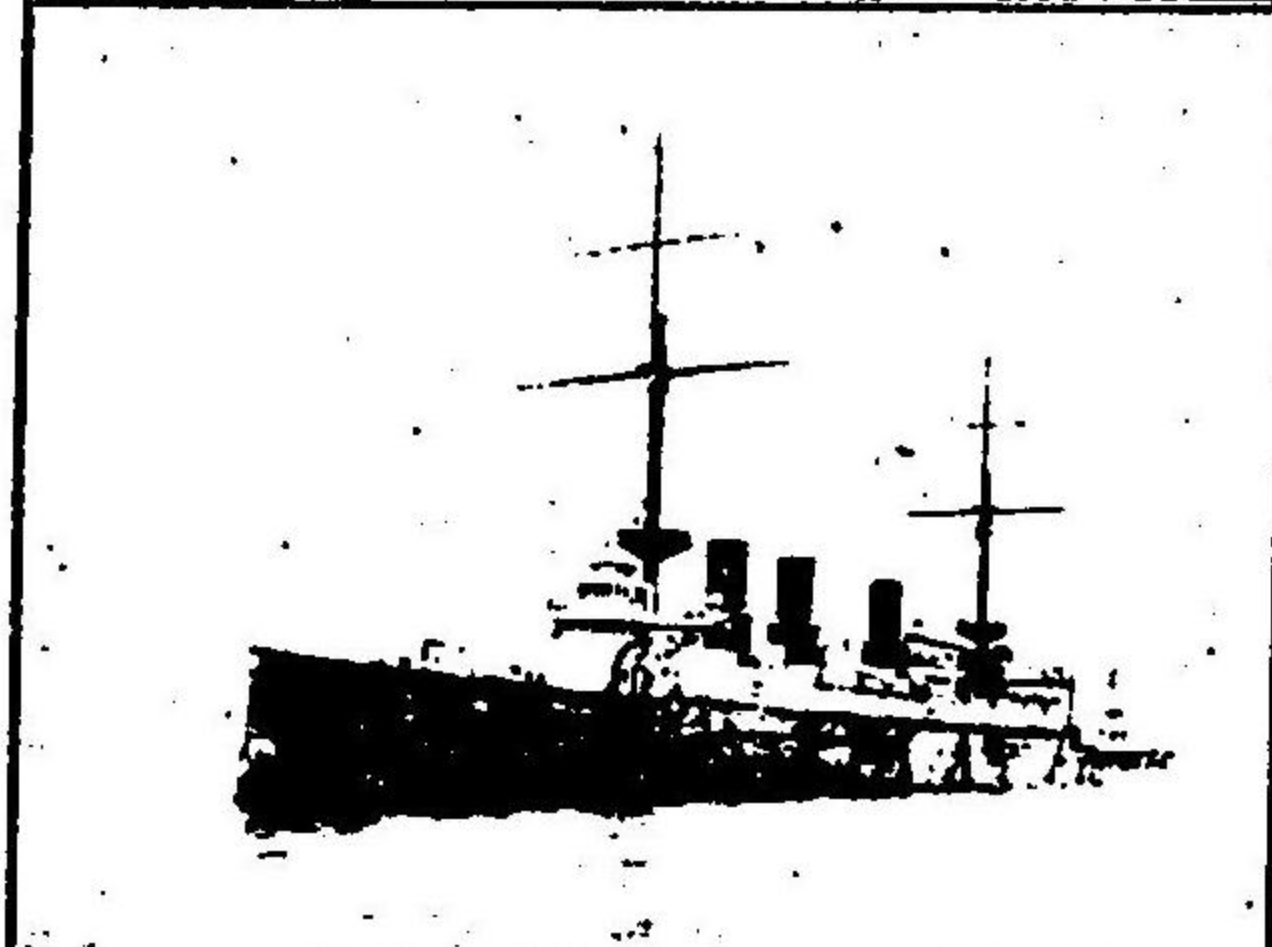
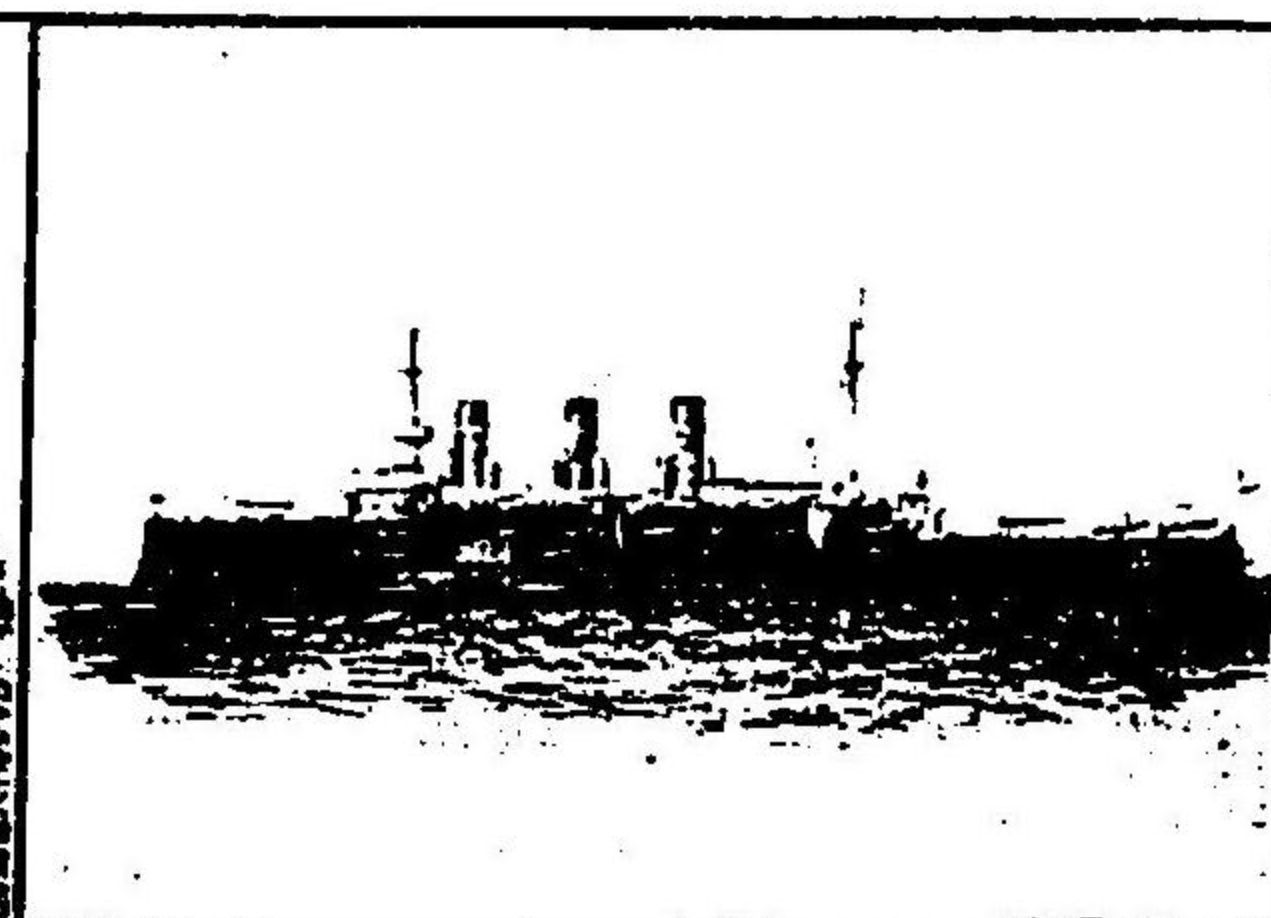
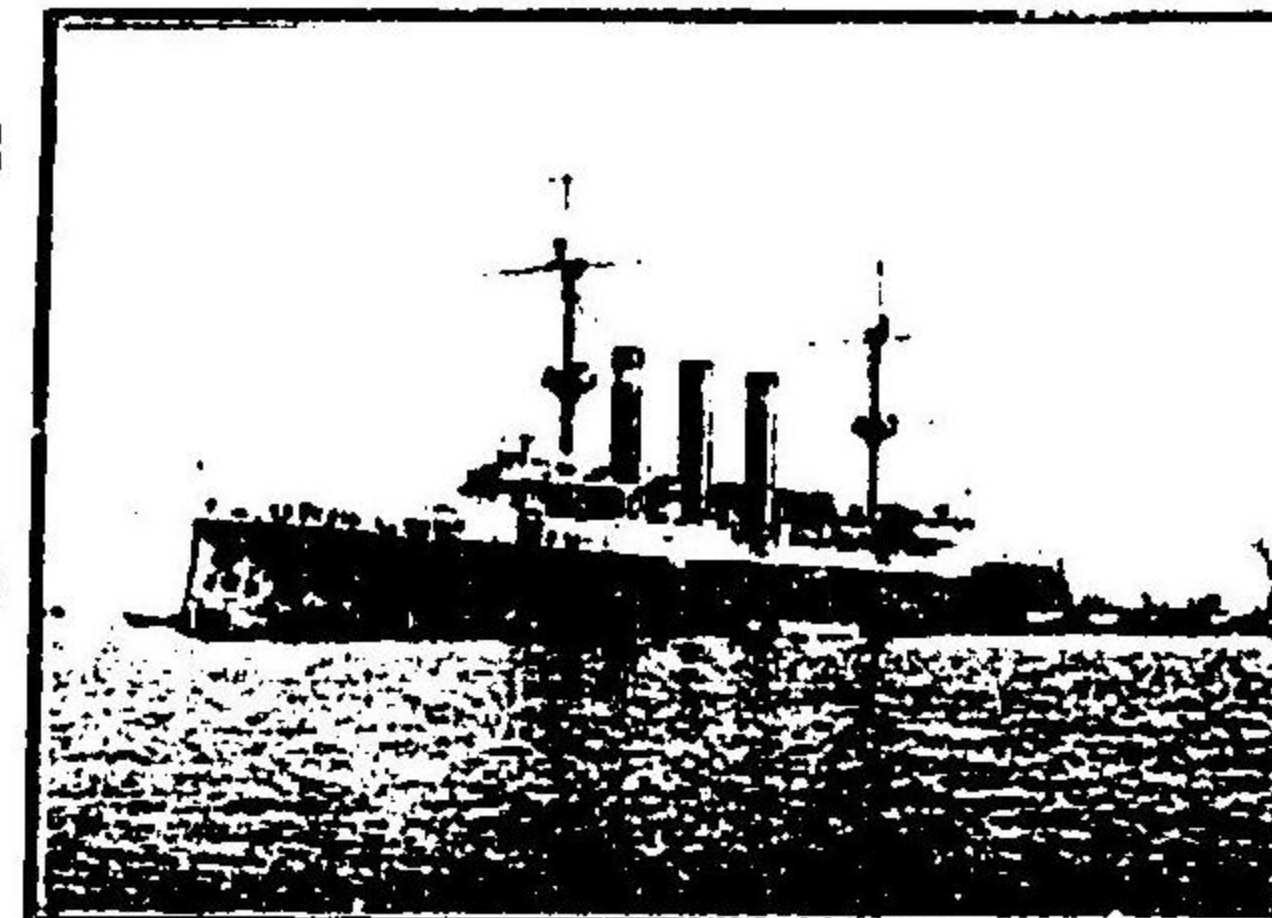
妻

港

間

八

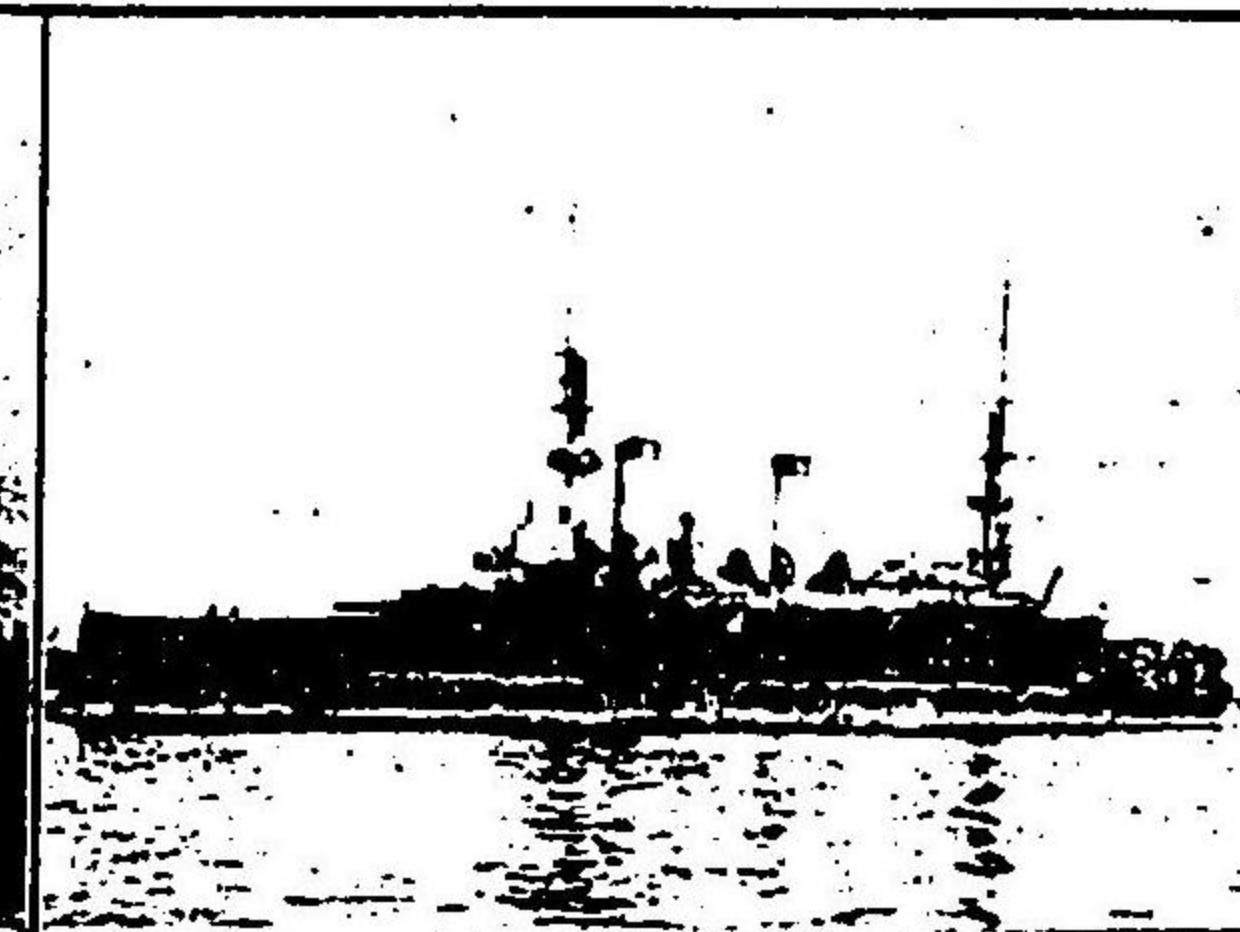
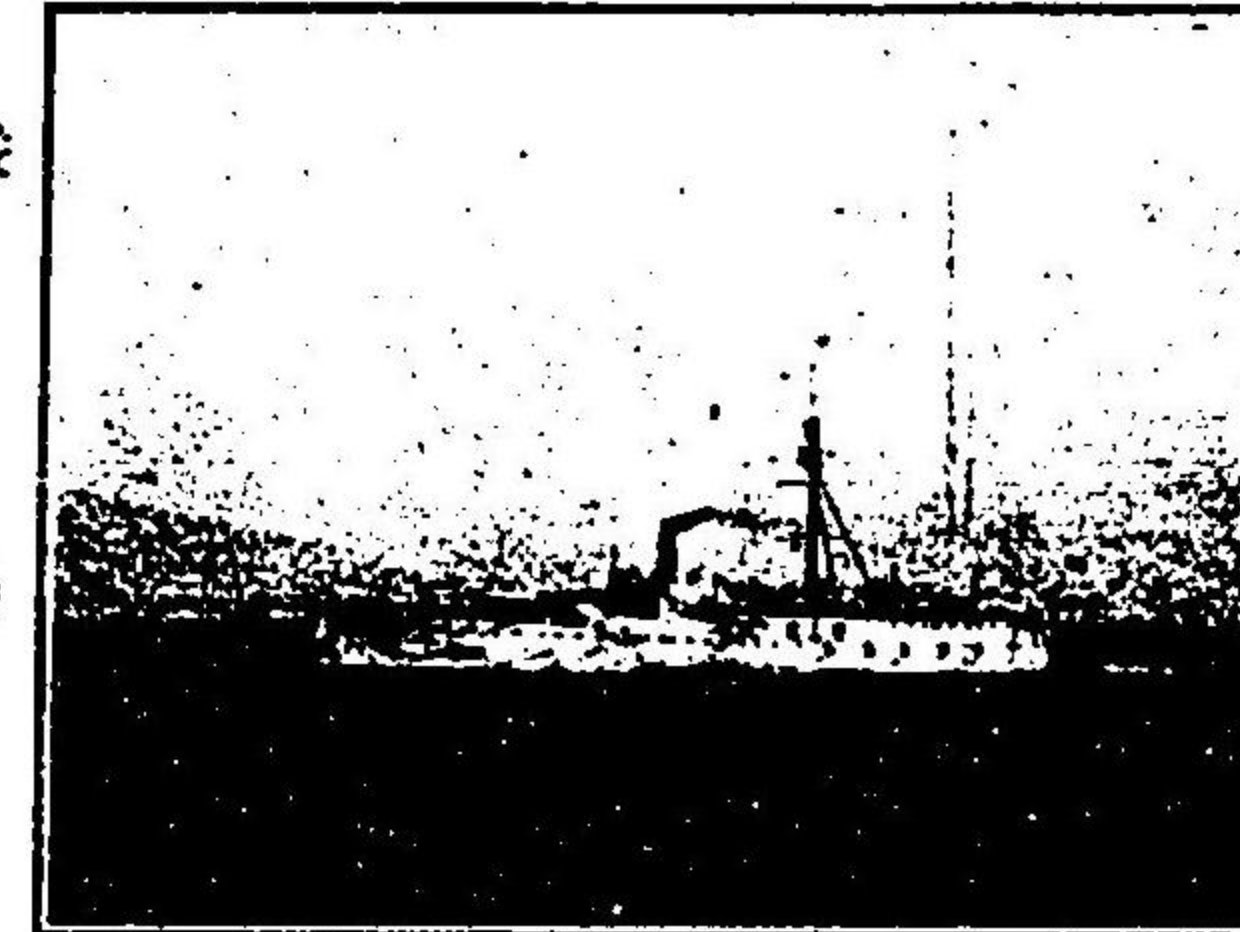
雲



隊戰三第本日

隊戰三第國露

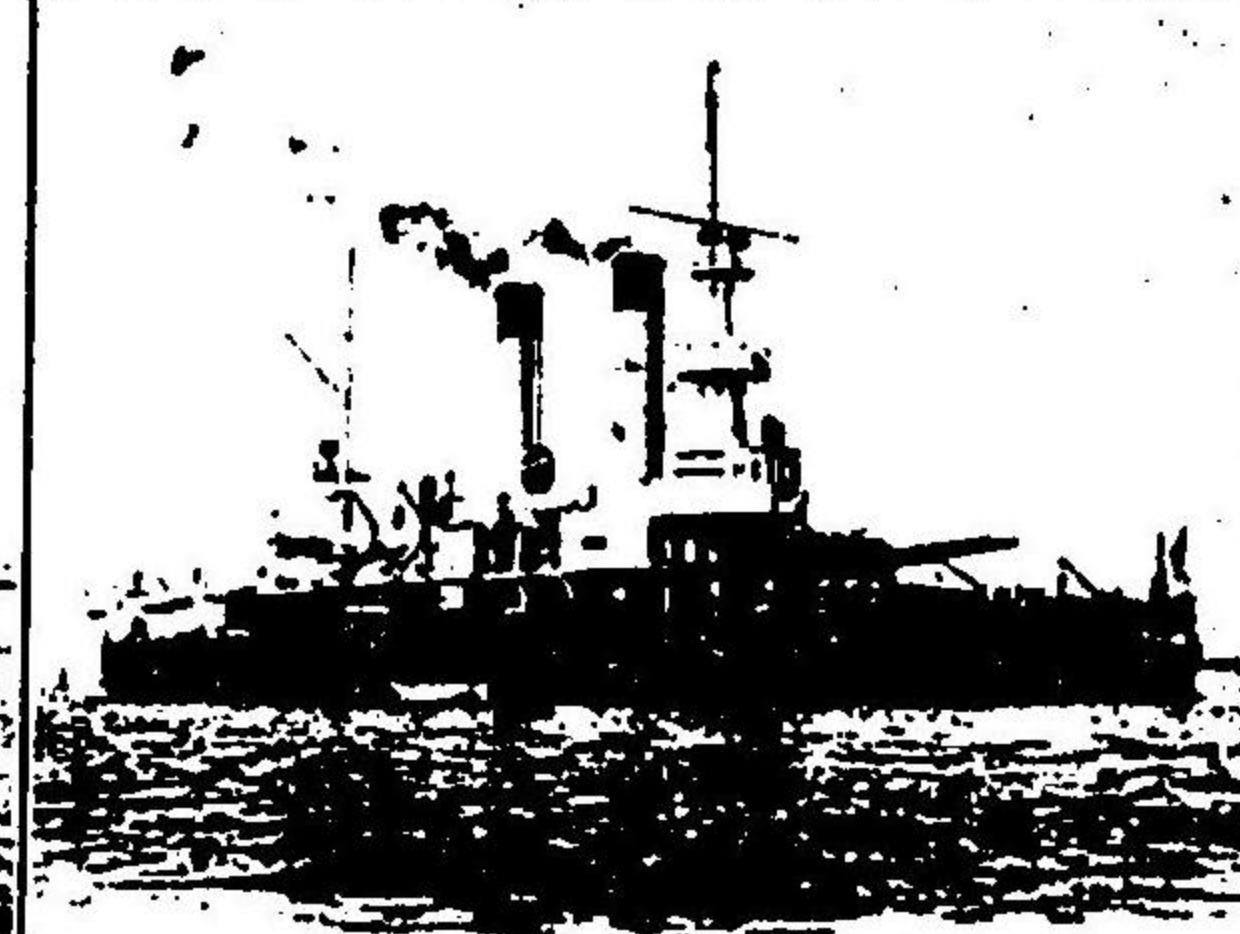
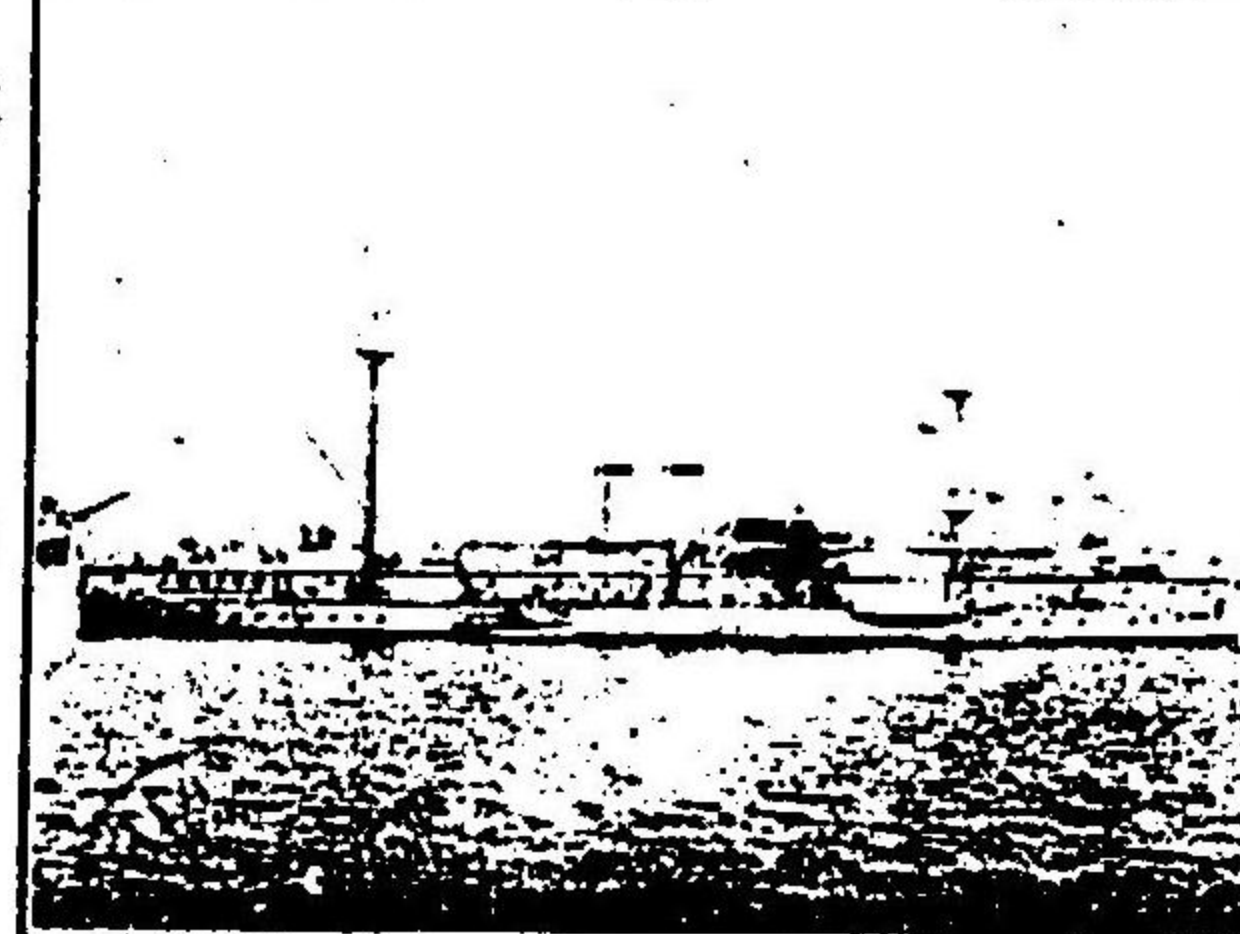
嚴



島

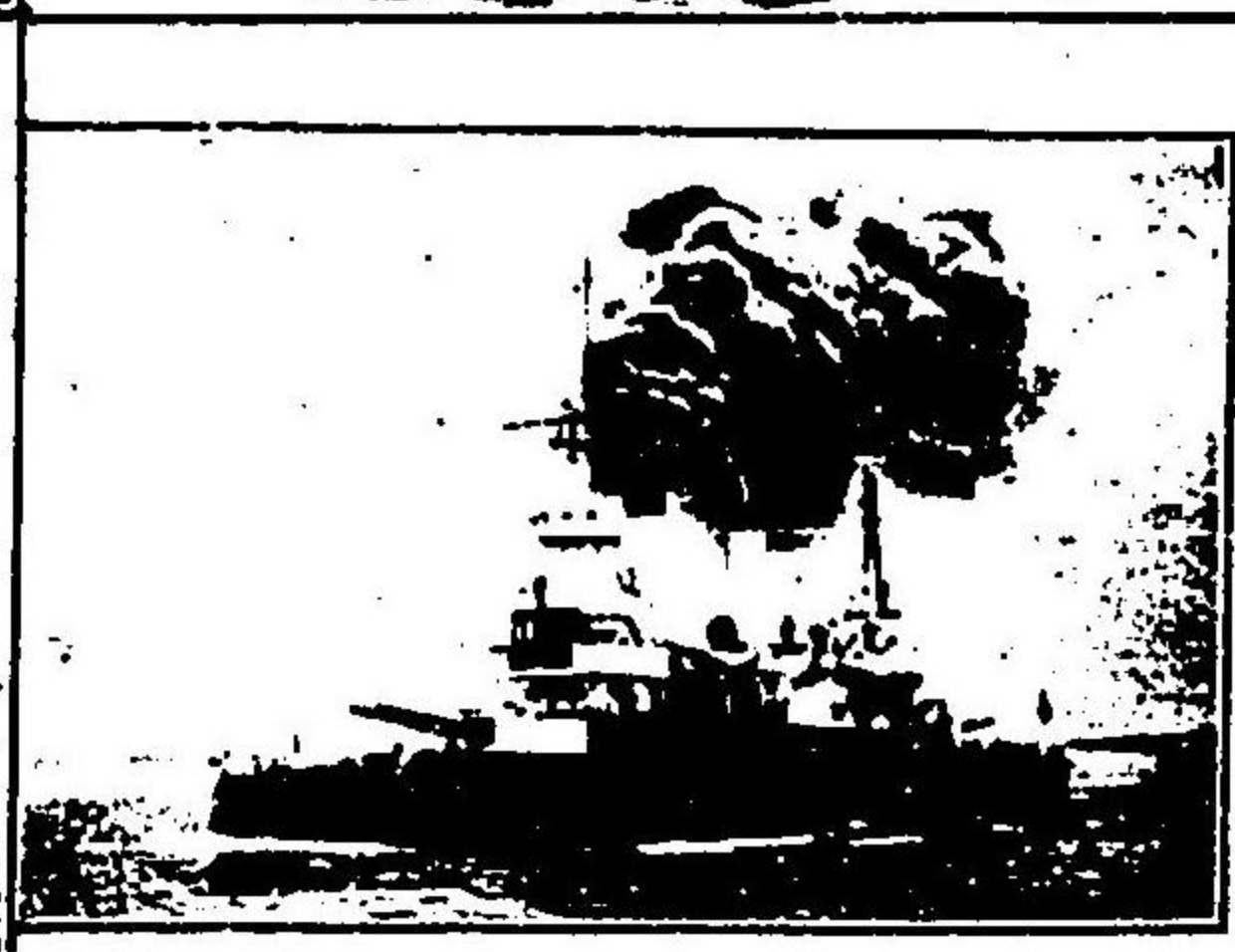
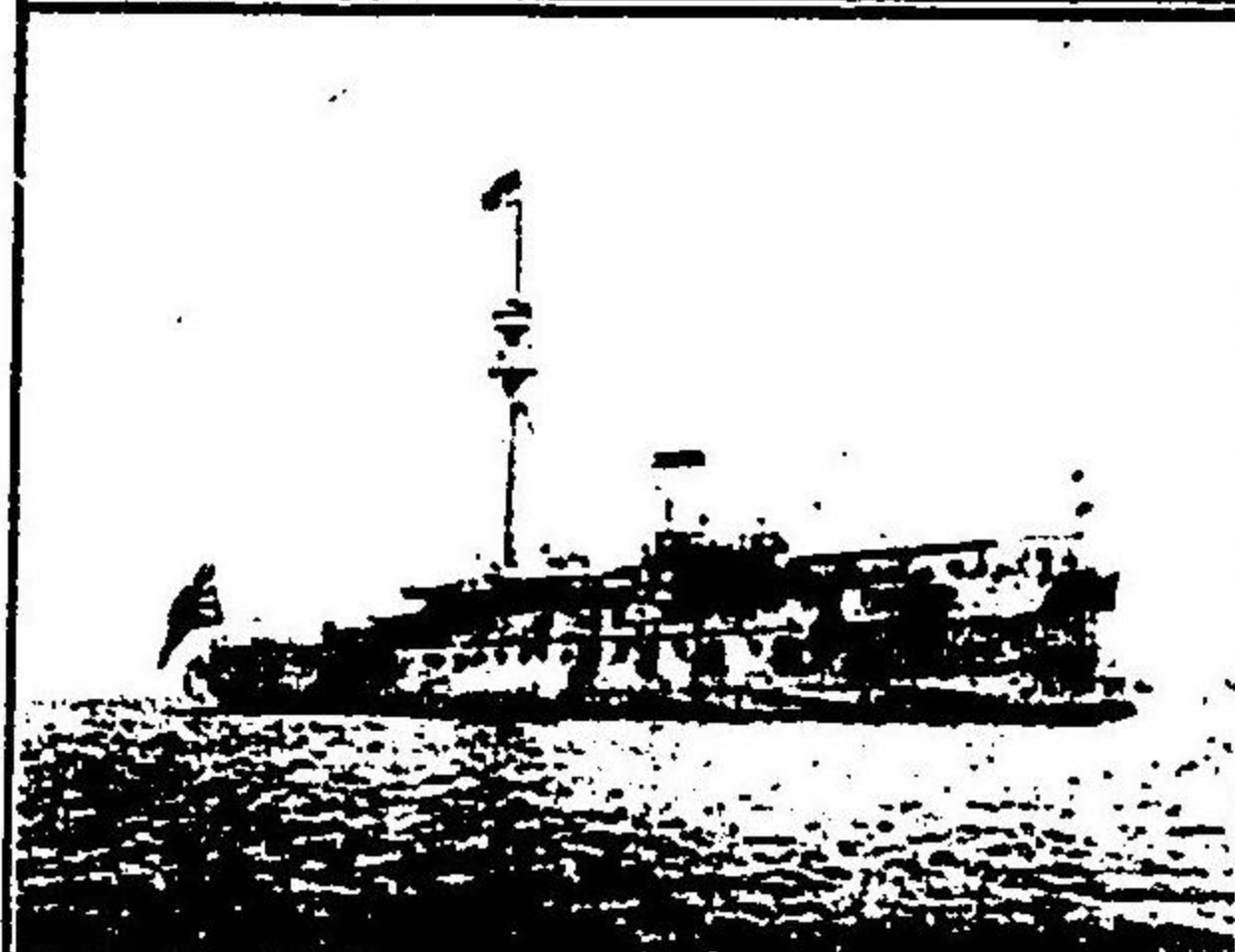
鎮

道



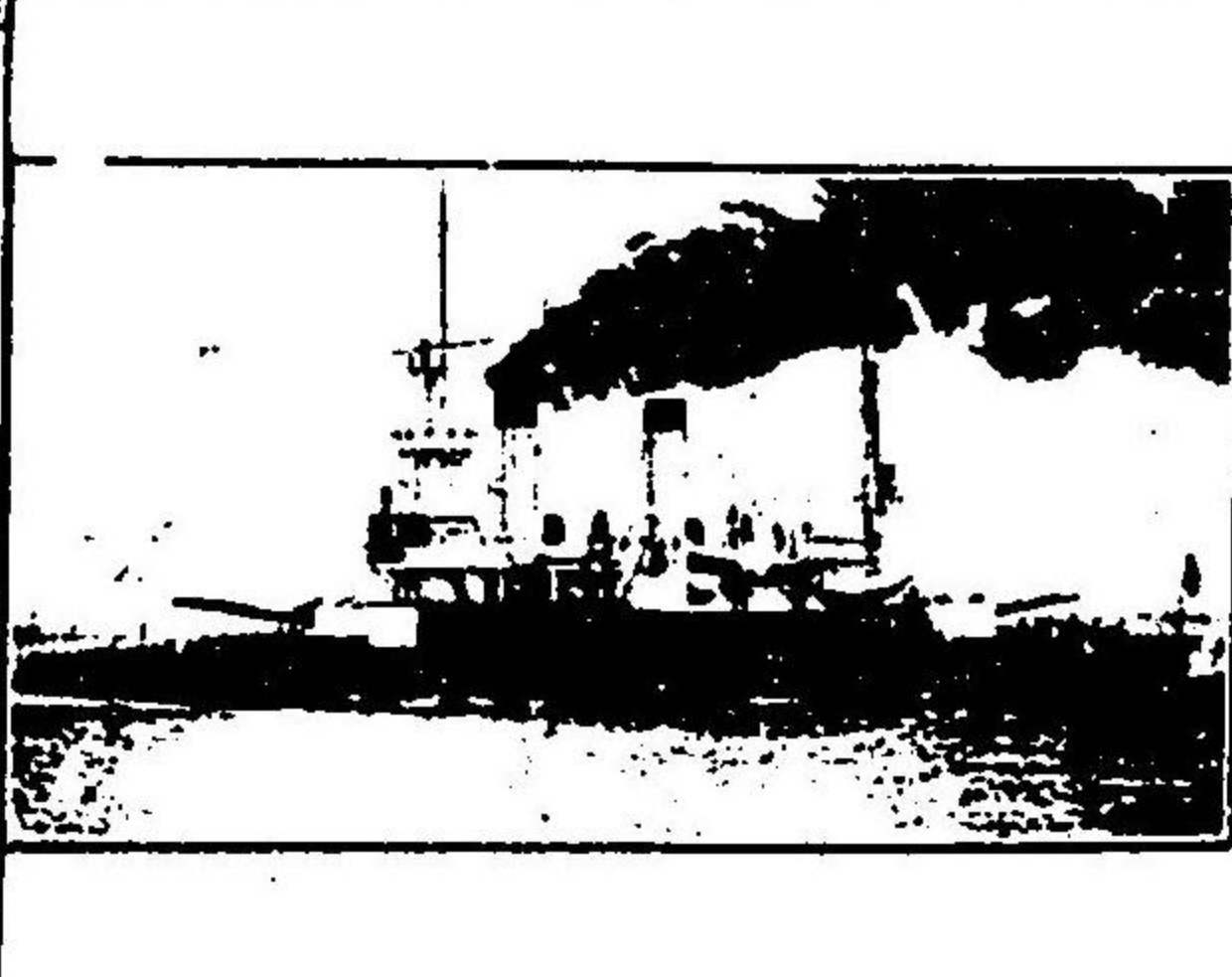
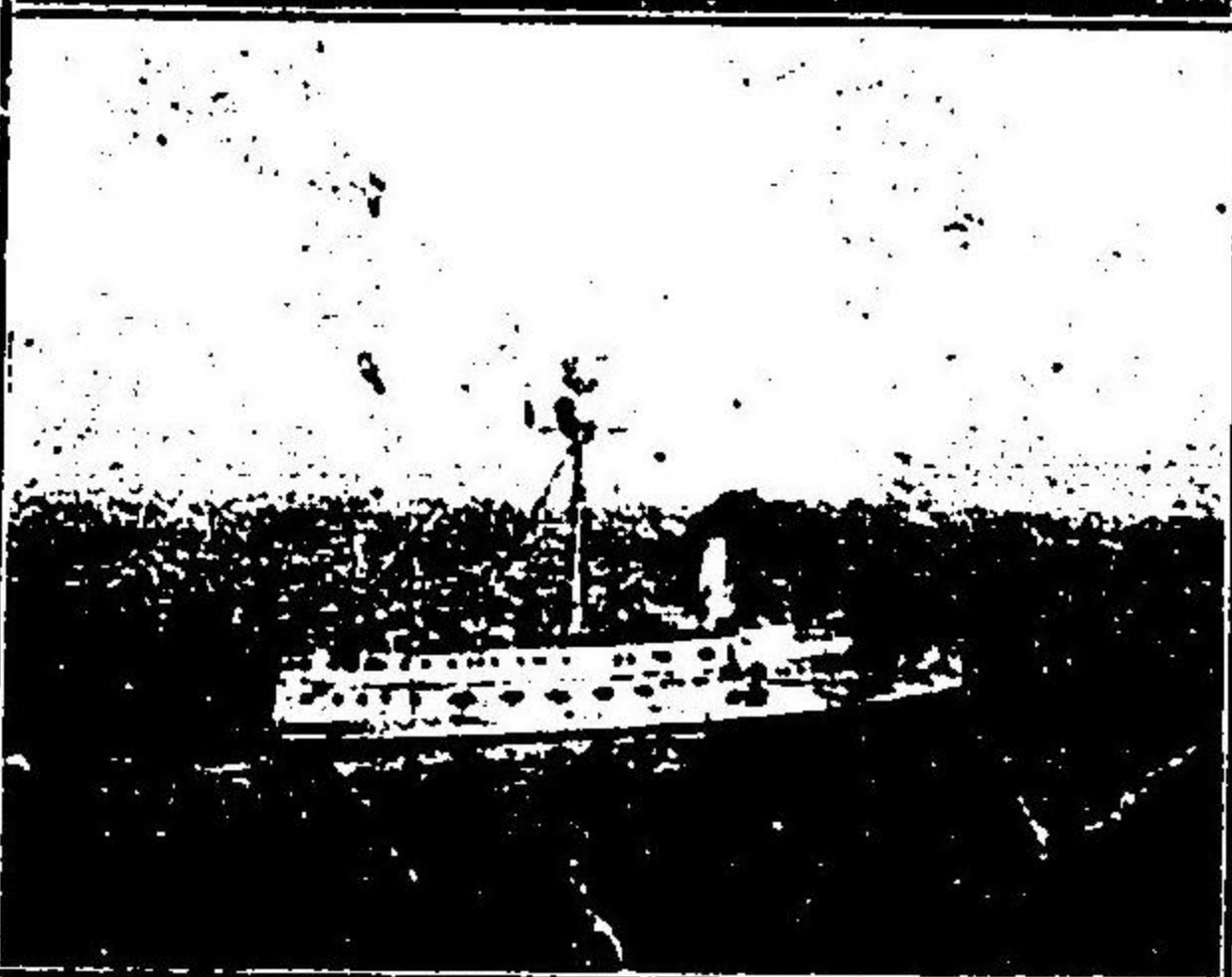
松

島



橋

立





狀慘の期最艦海

序言

此の書は、露國遠征艦隊の記録係として旗艦スワロフに乗り組み、終始戦闘に参加し、其の参加せる間、親しくペンを執りて手記せし海軍中佐ウラジミル、セメヨーフ君の著にして、露國に刊行されたる日本海海戦記の、最も詳密にして、最も公平にして、且つ最も確實なるものなり。此の書が、東洋艦隊司令長官海軍少將ポイスツ、ブラツク氏及び陸軍中佐ベインツァーン氏によりて佛文に、海軍少佐ゲルクケ氏により獨文に、陸軍中佐ダブリユト、イ、ゴトツン氏、及び陸軍大尉ニ、ピ、リンドセーイ氏によりて英文に、陸軍大尉ビエルクマン氏によりて瑞西語に、海軍大尉ア、レウイ、ウイアンチニ、氏により伊太利語に、早く既に翻譯せられ、各非常に歓迎せられて、數版を重ね居れるを見るも如何に其の記述せる内容の尊重すべきかを知るに足るべし。

左に著者の自序の一節を抄譯して、著者をして自ら其の眞價を語らしめん。

當日の午後三時頃、余は右足に重傷を得しが、其の後やがて又も左足に痛手を負ひ、尙ほ若干の輕傷、打撲傷、挫傷等を受けしも、余は毫も自己の状態を評價することをしなかつた。随つて又、醫藥の厄介を蒙る必要をも認めざりしのみならず、繃帶所へ行くべく周圍より勸告を受けしに對しては、反つて立腹した程であつた。且つ勇氣の張りつめたると、身體の強健なりしとの爲め、尙ほも毎瞬間の出來事を記録し、又は顯著なる事蹟を摘要し、艦の火災消防作業にも參加し、進んでは之れを指揮嚮導し、及び命令を發する等、職務の遂行を繼續しつゝあつたのである。驅逐艇ブライヌイが、スワロフの傍へ接近せし時は、余は既に已に傍人の扶掖を得ざれば、一歩も移動することが出來なかつた。其のブライヌイ艇上へ轉乗後に至

かては、全く足部の自由を失した。而して、余が最後の記録は、實に艇の甲板上に横臥して之をなしたるものに係り、午後七時四十分を最後とし、其の以後の分は唯單に余が記憶に存するものゝみである。但し、其の所謂記憶なるものも、戦闘の状況に關するものに至りては、余は自ら之れに餘り信を措き難しとなすのである。是れ負傷者の記憶なるものは、多くの場合、殆ど事件の真相と遠ざかるものが多いからである。此の點につき、特に著しく余の感ぜしは、余自身の経験であつて、自身には、寸分違はず精細に記憶し居ると思ひ居ることの、案外甚しく相違して居ることがある。余は斯くと思ひ今に至るも、猶自身には歴然と斯く思はれ居るのであることの甚しく事實ならざりし實例がある。余は最後の記録をなして、負傷の爲め衰弱、頭痛、嘔吐及び激しき渴を催す等の不良なる症狀を呈したれば、直に即ち午後八時頃下方へ降り、自身看護手を搜めて

彼れに負傷の個所、模様等を尋ねたる上、繙帯をなし、飲料を請ひて、清涼を覺ゆる何物かを飲むたのである……と今にも固く信じ居る。然るに、其の看護手、當時一の負傷だになく、健全なる意識と完全なる記憶とを有したる彼れが、誓をなして證言する所によれば、漸く當夜夜半に至り、艇の士官室に立寄りし際、彼は余の倒れたるを發見して、初めて余に醫療を施し、看護をなしたりとのことである。尙ほ彼れの言によれば、此際余は机に向ひ俯伏して座し其の座席の下は、血液の溜池をなし居たりしか。如何にして此の間の消息を説明し得べき。思ふに余の幻想か又は謔語かが、爾他のものを完成して一の實在事かの如くなしたるものなりしならんか。病院にては、余が熱度は四十度にも達し居たりければ、余が日記の記入は漸く六月八日に至り之を復興した。是れ此時、初めて床上に横臥しつつ、筆とりて數行の記録に堪へ得る様覺えたりし時であつ

た。斯かればこそ、余は自己の著述に於いて、此の戦闘に参加せし各人の實姓名、又は關係の官職を、事實其のまゝに、正確なる文書によりて掲記せしものにて、余は何としても、若し其の事件の經過せし瞬間に於て、假令極めて單簡なる片言隻句なりとも、文字を以て確認し能はざる爾他の「記憶」なるものは、一切之れを信ずることを敢てしなかつたのである。然らば何をか記録されしか。其れは實に存在した事蹟である。此の點に關し、余は敢て全幅の保證を辭せざるものである。

ワラジミール、セメモートノフ

譯者曰く、此の書原名は對馬沖の海戦と稱するものなるも、書肆の乞により表題の如くせり。

嗚呼此一戰

目次

- 一 死地に近き蹠踉艦隊……………
- 倭船との悲しき訣別—海上生活者の至情—空々たる艦列—艦船配置と戦闘準備—特殊規定の省略—不一致なる艦隊—悲哀史と殉職録—日本沿岸通過の用意—烏合の艦隊たる實例—厄介なるネオカトフ艦隊—日本艦隊の精神的結合—口提督の想定
- 二 悲痛なる大演説……………
- 戦前の士氣—旅立の用意—讓占はありませぬか—對島沖に合戦すべき日本海軍力の想像—東海岸周航の不可能—艦隊通航の最良水道—東郷は今何れに在る—第一の健将と冒險の絶頂—戦勝は思ひも寄らぬたゞ逸走するのみである—最も恐るべき水雷の夜襲—只一片の空響み
- 三 静寂なる戦前の一夜……………
- 運命は尙ほ有す—無線電信の感受—通信漸く繁し—水雷攻撃の防備—萬

鎮寂たる甲板上の光景——凄まじき機關室の光景——一様なる戦前の活動——

恐ろしき船の精靈——機關部員の激昂——平生に異る寂しき士官室——獨逸納
めの下等石炭——心細き石炭の積載量——前艦橋に於ける深夜の提督と艦長
——もう首尾よく通過し得るに違ひない——艦長の樂天觀——悲壯なる決心
四 戦機刻々迫り来る………
遂に日本艦隊に見えざる——和泉艦現はる——巨砲は口を仰ぐ——快速巡洋艦
の缺乏——努力の集中——敵艦續々出動し来る——戦闘準備の隊列——不統一な
る不慮の發砲——對島水道の中央に入る——此日は露帝の戴冠式紀念日——日
本巡洋艦隊再び現はる——見苦しき隊列變換の不結果——日本主戦艦隊の出
動——忘れ難なる敵の戦艦——余の不確定なる地位——旅順在陣の老練家——戦
闘記録としての任務

五 砲火始めて相接はる………

今に悲愴のせまゝ事——日本艦隊眞意の不明——益々奇怪なる日本艦隊の運
動——大膽なる冒險の意義——只管に神の冥助——紫電一閃第一發——無効なる
露艦の砲弾——日本艦隊始めて砲門を開く——猛烈なる敵砲の爆發——艦長室
に命中——初戦者の喪神及び其の變化——我艦最初の發火と余が最初の負傷

六 噫壯烈吁慘烈………

——執部デックケビンの惨狀——八月十日の海戦との比較——記録し能はざる
程の猛射——砲弾は悉く是れ水雷の如し——鋼鐵も亦然ゆ——前代未聞の新火
薬——司令塔内の提督と艦長——靜肅なる司令塔内の動作——余が心中の祈念
——正々堂々たる敵狀——虐殺である屠殺である

七 火の海と鐵の風………

彼我艦隊の接近——無算定の戦法——傷ける艦長の墜落——船尾砲臺の破壊と
前部烟突の倒潰——舵が利かなくなつた——隊列の大だしき混亂——心細き萬
一の揚合——火と鐵との旋風——日本艦隊の記録——天晴なるスワロフの殉戦
——鎮海湖池の窮蹙——守護神室の平靜——戦敗兵員の心理狀態——尊き信念の
まゝに逝かしめよ——薄鐵一枚を隔てゝ焦熱地獄

八 艦隊幹部潰滅………

司令塔は如何に！——艦橋右翼部の全部破壊——残存せる砲門の破壊——司令塔には誰れも居ませんよ——提督は何處だらう——余の大負傷——戦争と感覺の心理——酸鼻すべき負傷者の充滿——提督以下の艦隊幹部負傷——三席大尉の艦長代理——司令部の轉徙——負傷せる提督の態度——又もや提督の痛傷——傳令機關の皆無——到底眞情を傳へ難し——已むを得ざる彈丸の投棄

九 艦隊の四分五裂……

二六

德軍艦の轉徙——愚なる明白の疑問——スワロフに代はるアレクサンドル——オストラビヤの滅亡——東郷麾下の一斉回頭——日本艦隊の一時混亂——慘狀歴々たる我等の僚艦——艦隊の四分五裂——慘酷なる記念——精力足らざる也——猶ほ自ら絶望を言ふ能はざるか——敵は最早や運動のみ戦闘にあらず——最後の砲塔破壊——潮水侵入し来る——残存兵員の交神——突然起るワラーの砲聲——憐れむべき一時の空元氣

十 萬事休す矣……

二七

出羽艦隊の來襲——肉片をも止めぬ艦長の慘死——鐵製の經帷子——士氣の旺盛——此方に中れば彼方にも——敵水雷艦の襲來——水雷攻撃に對する防禦力——敵彈爆發力の猛烈なる明證——非尋常の心理狀態——飄忽なる一少尉補——

士官室の消滅——尙ほも火災との奮闘——艦内硝薬の炸裂

十一 棄てられたる殘骸……

二八

又もや例の大皮靴——運命は一たび幸せんとす——上村提督の殊功——片岡艦隊との接觸——僚艦との再會——機關部不能となる——驅逐艦の救投——負傷後の提督——余の負傷は漸く疼痛を加ふ——カムチャツカの最後——編艇なきを如何にせん——猶ほ提督の有せし抱懷——提督移乗の工夫——提督人事不省に陥る——二度と出来ない離れ技

十二 悲劇の最後の一齣……

二九

巨大なる殘骸を見棄て去る——艦に殘りて殉する勇士——訣別のウワー——今後の問題——意外に重き提督の負傷——移艇後の提督——提督最後の命令——非常なる艇内の雜踏——我が艦隊の狀況——オストラビヤ最後の物語——ボロヂノの最後——敵水雷艇の夜襲——余が最後の擲筆——スワロフの最後

跋語の代りに(床上の夢語にて)

三〇

日本海々戦に於ける日露兩軍の勢力……

三一

目次終

嗚呼此一戦 (スワロフ號の紀念)

露國海軍中佐 ウラジミル、セメヨノフ著
前陸軍通譯 山口 虎雄 譯



死地に近き踰跟艦隊

倭船との
しき決別

風は強く鋼索を吹いて、森々の聲物凄く、幾層の密雲は低く頭上を
壓して忙がはしく飛んで行き、此處黄海の濁浪は、澎湃として我が艦
艇の舷に飛沫を揚げる。征途長く熱帯圏内に在りし身は、こゝに來り
て急に寒威の凜烈なるを覺ゆるまでに、細雨は霏々として降りしきり

死地に近き

隊

一

面を向けんやうもなく、あまつさへ濕氣は戎衣を徹して心地悪しと言ふばかりなきに、我が將校の一面は雨に遠き海の彼方へ徐々に没れんとする運送船の影を送しつゝ、果てしなく後艦橋に佇立して居た。橋上帆架の端々にも、信號の彩旗翻へるは、是れぞ萬里の鵬程に、艱難辛苦を俱にせし我が僚船が、今を最後に、残り多き訣別と、幸あれとの希望とを、吾人に寄せて居るのである。

海上生活者の至情

噫、如何なれば海上にては、小さき彩旗の配合によりて表明さるゝ斯かる一片の挨拶が、禮砲、齊唱、音樂の何れにも超して、情越油然坐に人心を感動せしむるの斯くも痛切なるぞ。されば、信號旗の撤下されざる其の内は、皆寂として語なく、全身の注意を集中して、遙かに之れを凝視するのみであつた。恰も是れ雨に濡れ風に吹かるゝ翻々たる一布片に非ずして、眞箇友情の言を面り耳にするが如くであつた。既にして信號旗は撤せられ、船は彼方へ旋轉し了るや、亦齊しく黙々

人

として散じ、自己の任務に就かんとすれど、深く綿々たる思ひに沈み歩み行く脚に力なきは、宛然是れ、最後の握手と無言の裡に交したるかのやうであつた。斯くて終に彼等と袂を別つたのである。

此時又も彩旗は本艦上高く中空に翻つた。是れ、艦隊は今や其の運送船を上海へ向け解放したれば、茲に自己の新しき且つ「最後」の航進序列に轉ずべしとの信號であつた。

堂々たる艦隊

堂々たる艦隊は直ちに組織された。前方にはスウェトラナ、アルマーズ、及びウラルの三隻より成る偵察隊、尖楔形の隊列を以て進航し、次いで本隊は、第一及び第二の戦艦隊、即ちスワローフ、アレクサンドル、ポロヂノ、アリオール、オスラーピヤ、スキソイ、ナツリリン、及びナビヒトモンの八隻を右翼に列ね、又第三戦艦隊及び巡洋艦隊の同じく八隻、即ちニコライ、セニヤウイン、アブライクシン、ウシヤコフ、オレグ、アウコロラ、ドンスコイ、及びモノマフを

死地に近き陸軍艦隊

左翼に列ねた。本隊の兩側には、先頭艦と同一線に、ゼムチユイグ、及びイズムールドの二艦を配置し、各二隻宛の水雷艇を附し、以て我艦隊左右兩側の斥候に充て、あつた。稍後れて、我艦隊が浦鹽斯徳に達するまで、「必要缺くべからざりし」アナデキル、イルツキシ、コンヤ及びカムチャツカ等の特務船の一縱隊、本隊兩縱隊の中間へ割込み氣味に續航して居る。給水及び曳航用のスウイリ及びルスの兩船、亦其内にあつた。第二驅逐隊の水雷驅逐艦五隻は、巡洋艦隊に附隨して、砲隊に際しては、同隊と協力して運送船隊を護衛するの任務を有して居た。而して最後には、アリヨール及びカストローの兩病院船が見して居た。

附註(1) 是れ何たる艦隊の編制であらう。予等は自己の根拠地に到着せんと俄々として居たのであるのに、我艦隊は滿洲軍の需要にさへ幸うじて就役しつゝある砲艦は各艦は自己に必要なる材料、軍用品等を出來得る限り搭載し、其等調子の爲めに根拠地に重荷を負担せしめざるを得ずべしとの命令を得て居たのである。

艦隊配置と

斯かる艦隊の配置は、若し敵艦隊が俄かに出現して來た場合にも、何等複雑なる運動を要せずして、即ち少しの故障もなくして、急速に戦闘序列に轉形するを得べき所以であつた。即ち偵察隊は敵と反對の側に轉回して、特務船隊を戰場より導き出し、我が巡洋艦隊と聯繫して動作し、以て敵巡洋艦の襲撃を防護すべき任務に就き、第一及び第二の戦艦隊は、其の速力を増大し、且つ一齊に左方に船首を回らして第三戦艦隊の先頭に出て、舊針路を執りつゝ進むこととすれば、其の結果我が三戦艦隊は一の單縱隊となり、茲に十二戦艦の集中砲壘線を組成することが出来ることになる。又ゼムチユイグ、イズムールドの兩艦は、其の性能に従ひて適宜の運動をなし、且つ其の快速力を利用して自己隸屬の驅逐艦と共に、主戦隊中の先頭艦、殿艦、又は兩翼艦の傍にありて、敵と反對側なる砲彈落下域外に位置し、我が背後を迂回せんとする敵の驅逐艦隊及び水雷艇隊の企圖を撃破すべきの任務を有

特殊規定の省略

不一致なる艦隊

して居つた。是れを戦團の準備として當初より作製されてあつたもので、艦隊乗組將校の一般に周知し居つた所であつた。尙ほ敵艦隊の出現する方向により臨機に序列を調整して之れに應ずべき特殊の規定罹災艦救助の順序、又は萬一の際に將旗を旗艦より他艦へ轉移すること或は指揮權の轉達等、其他諸般の事項に關しては、司令長官の特別命令に依り、其れ／＼細かに取りさめられてあつたが、此等の詳細は、海事に通曉せざる多くの讀者諸君にはたゞ煩瑣なるばかりで、餘り興味を興へらるものでもないから、今一切之れを省略することにす。斯くて此の日も無事靜穩に一日を過ぎ去つたが、夕刻、セニヤ、ウィンの機關に故障を生じた爲め、其の修理の終るまで、全艦隊は終夜微速力を以て進航した。スワロフの士官室では、將校達は憤慨して、例の「サモト、ブイ」(自ら沈没するの意)を連發して、聲高く罵倒して居つた。「サモト、ブイ」とは、厄介極まるネボグドン艦隊の諸艦に、

悲史と殉

夙に命ぜられた好緯名であつた。中には、激怒するに至る者さへもあつた。是れ無理からぬ事であるとは云へ、全然正當なる攻撃であるとはいへない點もないではない。何となれば精銳を以て許す我等の本艦隊の諸艦も、亦實は彼等と相距る五十歩百歩に過ぎないからである。實にや、此度我が波羅的艦隊萬里の遠征は、其の汽鐘や、機械や、其他總べての装置の一大悲哀史なると共に、又我が機關將校及び部員の殉職録とも謂ふべきものであつた。正に是れ、微小なる旋毛虫の皮を幾千となくつぎあはせて、漸くに作りあげし長きコートと、今又更に縫ひ直さんにも例へつべき難業であつたのである。

五月二十六日の夜は明けた。昨夜は、半歳の熱帯生活を出て、始めて本國の氣候に近き冷氣に遭遇した爲め、艦員總て半數交代の半夜を心地よく熟睡した。曉霧薄れゆきて、朝暾は既に現はれた。可なり強き颯々たる南西の風は絶えず吹いて居たが、海面には、尙ほ深氣深く

死地に近き踏浪艦隊

垂れこめて居つた。十中の八九、水雷攻撃あるべく期待する、日本沿岸の通過に、陽光鮮けき晝間を利用せんことは、最も須要なる留心である。故に我が提督は全艦隊に對し、廿七日正午には、對馬水道中、其の航路の中央點にあるべく命令した。斯かる打算によりて、我隊は尙ほ茲に約四時間の豫備時間を有したが爲め、之れに艦隊運動の「最後の教練」に使用された。

嗚呼是れ「最後」の教練、眼前に血戦を控へながら、尙ほ且つ行はざるべからざりし艦隊運動の教練、予は予の艦裡に奮めかしき眞理を想起するの已むを得ざるを覺えた。そもや「艦隊」なるものは、平時多年の實務航海——航海は字の如く航海でなければならぬ。豫備艦としての碇泊ではない——と訓練教習とによりてのみ、初めて建設されるべきものであつて、急速に不揃ひなる各種の艦船によりて編成されるべきものでは斷じて無い。殊に雌雄を争ふ戦場への半途に於て、初めて共同航

行の教練を始むるが如き、况んや敵前に臨んで猶ほ運動の教練を要するが如きは、いづくんぞ之れを稱して艦隊と云ふことが出来やう。實に偶然なる艦船の集合體といはんか、所謂島合の衆にあらずして何ぞやである。

戦闘序列への隊列變更などは、其の事柄が簡易な爲め、先づは相應な出来ばえてあつたが、其他の動作に至りては到底お話しにならぬ。特にカラだめてあつたのは、例の第三戦隊であつた。尤も、之れを以て直ちに其の提督及び各艦長等を咎めることは、或は無理かも知れぬが、我が枝隊の各艦は、マダガスカル附近の練習航行、又は安南沿岸假泊の際、多少にせよ教練され、又「絞れ！」と稱する事も、幾分か相互に會得して居つたのであつたが、第三戦隊の我隊と聯合せしは、漸く二週日前の事に係り、しかも、共同航進を成し遂げ、又は戦闘に参加する爲め、此の結合を完全ならしむべく教練習熟せしめんには、

終に何等の時日もなかつたのであつた。

聞くならく、東郷提督は、前後八年の其の間、將旗を撤す事なく終始艦隊を指揮し、且つ其の艦隊の枝隊長官、又は司令官として、對馬沖の會戦に参加せし五中將及び七少將、其他麾下の各艦長は、同じく是れ一の東郷提督を親愛崇敬する僚友か、然らざれば學生として彼れの教導の下に育成されしものみであつた。吾が艦隊の不一致なりしと露城の差のみではない。今ぞ吾等は自己の餘りに不用意なりし事を悔む且つ嘆じ得んも、此の時我等は唯決心あるのみであつた、今はたゞ前途に横はる血戦力闘に、自己手中のもののみを掲げて、之れに臨まざる可からざるの一途であつた。

提督の想定

提督の想定せる所に依れば、事實彼れの想定は殆ど全部實現せり。東郷は躬ら其の優秀なる十二戦艦の首腦となり、何れかの地點に一種めに待ち伏せて、與敵を此一戦に決せんと出動し來るに相違ない。さ

日本艦隊の精神的結合

すれば、我れロゼストウエスキーも亦彼れに對して、他の二三航路に分割するなく、自己統率の十二隻の全部を以て、之れに當らなければならぬと決心して居られた。されば龍虎にひとしき此等兩主力の仕合せこそ、實に此の戦闘の重心に屬するものなるは明かである。茲に少しく我れと日本艦隊との主力を比較するに、精神的結合の點に於いては前に言ふ如く全然劣つて居る上に、實質の上にも、車座下の十二隻中の最奮艦たる戦艦富士さへ、艦齡に於ては、我が十二艦中第六位たるシキソイに比し、尙且つ二歳の新艦である。敵の速力は、我れに比し殆ど一倍半の優秀である。殊に、日本軍の最も卓越せるは、吾人の未だ曾て夢想だも及ばなかつた其新砲彈であつた。各種演習の裡に、五月廿六日の日も目立たずに過ぎ去つた。

死地に近き敵艦隊

二 悲痛なる大演説

戦前の士氣

僚艦の模様は知らねども、我がスワロンの艦上にては、一般の士氣甚だ勇敢良好であつた。時に或る不安の威の往來するなきにあらざりしも、斯かる場合に處しては、如何なる勇士も、或は必らず然あるべきとてはあるまいか。しかも胸中些の俗念の煩苦なく、士官等は常にまさして繁々と兵員の側へ立寄り、又は自己の部隊を巡回し、事毎に説明解示し、中には自己附近の助手と意見をたしかはするへあつた。或者は急に思ひ出して、貴重なる紀念として、今の今書き上げし書信をば、金櫃に保管を托するもあつた。

旅立の用意

「恰度、斯う旅立の用意でもする様だぞ！」
と、今や側目もふらず、行李の内部をほくり返して居る従卒を指圖しつつ、砲術長ウラジミルスキーは手を呼び止めた。

「ア！君はもう準備が出来たかね？」

「僕？」

と彼は一寸愕いた見えをしたが、俄に失笑して、

「考へても見給へ、用意は疾くの昔！」

「さうだ、さうだ、いかにもさうだ！」

と、過ぐる支那の團匪の役に、太沾占領の砲、負傷した歴戦の勇者、水雷長ボグダノフ大尉は、突然予等の會話を混ぜつ返しつつ、……

「オイ！明日ぢやないか！今夜でもないのに……何卒帳場へ御出下さいませだ、……オイ、勘定の用意をして置けよ。」

斯かる諧謔も、何等の感興を惹起すに至らなかつた様であつた。

「如何です！貴下には識占でもありませんでしたか？ 貴下は以前戦争にも御参加の事ではあるし……。」

と、今しも此處へ近づける、片手を衣裏へ差込みたる、そして片手に

識占はありませぬか

は金櫃に渡すべき手紙を大びらに持ち居たる若き少尉は問を挟んだ。

ポグダーフは發怒氣味に、

「識占とは何事だい！僕は君の占女ぢやあるまいし……へん、若し明日自分の左右兩方に、日本軍艦の發射する砲門を數へる様に迫つたら、其時こそ、直に君にも何か感じて来るよ。だが、其時はもう占識も何もあつたものぢやない。」

尙ほ此處に數名の士官が集つて來た。彼等が頻りと繰りかへして争ふ所の研究問題は、對馬沖にて遭遇する日本海軍が、果して其の全部なるべきか、將た又其の一部なるべきかの議論であつた。樂天家連は斷定してはいはく、ラレク及びクバンの兩船は、本月廿二日、既に日本東海岸へ向つたれば、最早や彼の邊を騒がして居ることであら

對馬沖に會
戦すべき日
本海軍力の
想像

附註(2) 運命は我等の上に申せざりき。ラレク及びクバンの兩船は、此の間の何物とも會はず、遂に自己の出現に於ける何等の騒動も招かざり。

東海岸周航
の不可能

う。さすれば、東郷は其れに欺瞞されて、我等を監視すべく、必定北方へ行つたであらうと。反對黨は之れを反駁してはいはく、東郷は決して凡庸ではない。軍事上の知識は、決して我等に劣るものではない。日本東海岸を周航して北に迂回するに、唯一度の石炭積載のみで不足な事は、百も承知して居る。積むとしたら、さて何處？熱帯地方でなければいざ知らず、此處では天候に望を囑する事は先づ不可能である。さすれば公海にての積載も、當然期待は出来ぬ。假令何れかの港灣に潜匿するとしても、到る所の島嶼、到る所の岬角、電信あり、監視哨あるは無論である。東郷は隨時手に取る如く、詳細なる報告を得るであらう。報告を待ち、計書を定めて、東郷は始めて出動すべく、今忙たしく北行を急ぐの理由は少しも無い。若し假りに一步を譲りて、我等の石炭塔載が海上にて首尾よく運び、敵眼を逸れて、無事に宗谷か津輕かの海峡まで達し得たりとした所で、其の通路の狹隘なる、其

處ては到底通避せんにも詮なく、沈設水雷の柵も幾多通路に投下しあ
る浮流水雷も、又は公々白晝に於てさへ可能なる水雷艇の襲撃をも、
我等は二重三重に甘受せなければならぬではないか。且つ折悪しく濃
霧又は荒天にても打續かば、此海峡の内に足一步を踏み入るゝことす
ら、所詮叶ふまじく、艦隊さへも然なるに、況んや特務船隊の足手纏
ひを伴ひては、其の困難は如何ばかりであらう。萬に一、天祐により
て、纔に此の難關を通過し得たにもせよ、彼れは何時にても對馬より
出動し來りて、我艦隊を日本海の北方に遮断せんは易々たることでは
ないか。殊に我は既に海峡通過に際し、水雷攻撃、敷設水雷等にて備え
られて、著しく戦闘力を殺がれて居るに於てをや。東郷が全力を收め
て、靜かに對馬海峡の何れか伏在して居るのは最も明白であると。

「諸君！之を、先づ吾輩として一言せしめ給へ。」
と、常に争論が好きなき、そして好きこそ物の上手な航海長ゾートン非

彼は古參大尉である——は、演説口調に一聲高く叫んで、

「吾人の爲めには、朝鮮海峡の東水道こそ、確に最良の通路なれと
信ずるのである。試みに他の總ての水道に比較するに、先づ第一、
此處は海面廣闊で、且つ水深く、如何なる艦隊運動にも自由自在で
あるのみならず、又如何なる天候に於ても、航海上些の危険なく、
寧ろ、一朝風雨險惡の時に會せんか、是れ却つて吾人の爲めには益
々有利であることは、既に已に何人も明かに知る所であつて歴戦の
方々に在りては、いよく以て、此の點に關して何等御異議はある
まいと吾輩は確信する。惟ふに、東郷は我等に比して決して愚劣で
ない。這般の點については、彼れは我等と同様十分に承知して居る
ことであらう。兩脚器の用法と算術の四則をも、また彼等は解して
居ないとは想像されない以上は、斯かる明々の理路を以て、餘りに
彼等を見くびつてはならぬ。而して諸君、若し吾人が敢て東日本を

東郷は今何
れに在る

嗚呼此一戰
廻航するが如き方略に出て、彼れの艦隊と遭遇する以前に、水雷戦の難關を経ざる可らざるをも豫め承知して、尙ほ且つ強いて之れを決行すると假定したまへ。彼れは何等の勞する事なく、萬事の打算措置を畢へて、今や我等が大洋より、宗谷又は津輕の海峡へ進み寄らん其時ぞ、對馬——諸君注意し給へ——其の對馬の北端より出動し來るも、彼れは、遠航に憊れ水雷に傷ける吾人の艦隊をば、浦鹽斯德への途上に於て悠然として捕捉し得べきではないか。海峡の水雷防備は、疑ひもなく既に疾くの昔に配備されてある。青森室蘭の兩軍港、また兩側に儼然たり矣だ。是れ今日に在りては、之を知らざる者こそ恥辱とする位、諸君の周ねく知りたまへることではないか。東郷は水雷艇隊の一部を海峡に分遣し、躬、親らは主力——吾輩は全海軍と云はん——を把握して、今何處に在り得るや？否、更めて斯く問はん、何處に彼れは在らざる可らざるか？と。此の對馬水道

嗚呼此一戰

一八

萬一の機件
と冒險の絶

の北端附近を措きて、易すれど他に在るべきと、吾輩は斷言するを憚らない。是れ如何となれば、現下海上に飄搖すべき何等の必要も彼れにはないからである。然らば今彼れは必ず何れかの港灣に蟄伏して居なければならぬ。

「例へば馬山浦の如きか。」

と、航海士バリー少尉は遮つた。

「然り！馬山浦説にも同意なり！乞ふ吾輩をして説き終らしめよ。」

諸君！我が前途に當りて、日本艦隊主力の不在を望むが如きは、萬一を僥倖せんとするものであつて、全く是れ兒曹の見にと同じいものであると吾輩は思ふ。今や、吾人は實に其の冒險の絶頂點に登りつめて居るもので、明日ぞ、其の終局の解決を見るのである。即ち或は此の絶頂點を垂直に乗りさるか……。」

と、ゾートフは、活潑に其の手を上下に振り動かし、

臨海なる大演説

一九

と、彼は手を平に左右に動かし、ゆるやかに之を下方に放つて、又徐々に、

「然し、確に其れと併行して、日没點の方へと赴くのである！」

「何？ 何故？ 甚麼して、日没點へ！」

と、聴衆の士官は激しく抗言した。

「其れは斯うだ！ 若し一度に全滅せざるまでも！」

と、ゾートンは一聲高く叫んで、

「終局の運命は同じく一途であらう。戦ひ勝つて浦鹽斯德へ到達し首尾よく制海權を得るなどは思ひもよらぬ。諸君よ吾輩は一家の所信を斷言する吾輩を以て徒らに不祥の言を弄するものとなす勿れ。明日の戦、唯能ふべくんば逃走するのみである。其れはへ二三隻で、四隻もあらば、寧ろ過分の成功であらう。脱出して豫備の石炭全部

戦勝は思ひ
だも奇らぬたひ
のみである

を燃焼し、遂には満開に至らずして散る花の不幸を見るか、若くは龍城準備として砲門を陸上に運搬し、兵員には銃劍戦でも教へるか……。」

「À bas à bas ! Conspuez le prophète ! ノー！ー！ 豫言者をふんだくれ！」

と、一人が佛語でまぜかへせば、

「Hear Hear! Strongly said! ヌー！ー！ よくも言つた！」

と、他のものが英語で、彌次を入れた。

「塊地利の國會の様で見苦しい。宜しく彼れをして説き終らしめ給へ！」

と、ボグダノフの低聲が響き渡つた。

「斯くまでも列席各位の激昂を惹起したる、遠き未來の問題に對する決定は姑らく措いて、」

と、稍一同の鎮靜せし折を見計らひ、ゾートンは言を續けた。

「眼前の事につきてのみ數言を費やして、此の演壇を下らうと思ふ。吾輩は今茲に三個の可能事を豫見して居るのである。思ふに諸君も亦決して異論はあるまい。其の第一は、我等の位置が既に發覺して居るか、又は本日中に發見されるものとせば、茲に疑ひもなく、夜に入ると共に、敵水雷艇隊の猛烈なる攻撃は相次いで至り、更に明拂曉には、敵艦隊と砲火相見えざるべからず。是れ我が爲めに、最悪なるものである。第二案は、若し明日に至りて漸く發覺するとせば、我等は完全なる編成を以て、そして未だ何等損害なき勢力を以て、敵と十分に開戦するを得るのである。是れ前者に比して幾分優秀なる効果を見うべきものである。最後の第三案は、濃氣尙ほ一層濃厚となつて、天候一般に險惡とならんか、是れ實に無上の神佑である。水道の廣濶なる庇蔭を蒙るべきは即ちこゝで、寸抄の間斷なき敵の警戒も、遂に我等を逸せしむるか、假令又發見されたとして

最も恐るべき水雷の夜襲

只一片の空

も、時機既に過し、我等と浦鹽斯徳との海上は、最早や一の安全界たるに過ぎぬ。斯の如くんば、是れ最も上乘のものである。諸君！若し吾輩の此等三條件に對し、若し更らに高見を聽くを得ば、吾輩の幸福のみではない、諸君以て如何となす。さりながら、吾輩自身としては、此の最大難事に當るべき覺悟を定めて居るのである。諸君！不安なるべき今夜を豫想して、御同様、今の照暇の時間を利用し、充分安眠あらん事を勸告せざるを得なす。」

彼れの大演説は非常の成功であつた。

三 静寂なる戦前の一夜

運命は尙ほ有す

無線電信の感受

願へば此の時まで運命は猶ほ我等に恩恵を垂れた。我等は未だ敵眼に暴露せず居るのであつた。全艦隊の總ての電気通信は停止され居たけれども、其の代りに、我等は精密に日本艦隊の無線電信を感受することが出来た爲め、我艦の操電手は全力をつくして、其の方向及び出来得べくんば、其の内容をも偵知することに努めた。此の通信は五月廿六日の曉天、尙ほの暗き裡より、其の晝間に連続して、二局の間に行はるゝ問答であつた。是れ恐らくは、我等の前方近くにありし一局が、先づ何事か報告を發したるものであつて、其れに對し、稍遠き遙るか左方なる他の一局より應答したるものゝやうであつた。電報は總て暗號のものでなかつた。故に、我が通信手は、他國字母に對する不熟練なると、之れに加へて往々脱字ありしにも拘らず、我軍の

通信漸く繁

水雷攻撃の防備

手にありしイロハ表と對照するに、「昨夜、何もなし」……「火光十一、然し不規則」……「瞭然たる火」……「星の如き」……其他種々のものが判讀された。多分五島群島に於ける有力なる海岸局より、自己の目撃せし事實につき、何れへか遠方へ報告して居たものであらう。

此の日夕刻に至り尙ほ他の局所間の通信も聴き取れたが、夜に入りては、其の局所の數は七個にも達し、電報も既に暗號に變じて居た。然し其の通信の短少なると、同一字音の反復、及び其の通信開始後、必ず一定時間之を停止せるに徴しても、これは報告に非ずして、多分各哨艦の間に交はされし連呼、應答に過ぎなかつたであらう。要するに敵は未だ我等を發見し居らざりしは疑ひないのである。

日没と共に艦隊は出來得る大隊列を閉縮した。又今夜こそは水雷攻撃あるべきを豫期して、士官及び兵員の半數は各部署に着き、他の一半は着衣を脱せず。第一の緊急號音と共に、一齊に躍起すべく用意し

て成るべく自己の持場に近き個所にありて、少時果敢なき眠に就くのであつた。

萬機寂たる
甲板の上の光景

墨よりも暗き夜は到りぬ。朦朧は一層濃厚の度を加へ、稀なる星の光は之を透して、辛じてまたくが如く、鈍く輝いて居た。黑白も別かぬ闇の甲板には、萬機死して聲なく、極度の静謐は獨り此處を司宰して、唯、眠れる勇士の寢息、士官の靴音、微なる聲もて與へらるゝ其の命令の、時に此の寂莫を破るのみであつた。各砲側には、宛も凍結せしかと見紛ふばかりに、砲手は不動の姿勢もて、勇氣凜然、炯々たる眼光を烏羽玉の闇に放ちて、何處にか敵水雷艇の黒き片影もやと凝視し、又其の聴き耳を澄ましては、眼に見えぬ敵艦の機關の音、さ

遠まじき機
關室の光景

ては蒸氣の響もがなと、傾聴して居たのである。少時にても安らかなる勇士共の眠を覺まさざらんとて、予は細心なる注意をひろひ足にこめつゝ、艦橋と甲板とを一巡し、尙ほ機關室へと降りて見た。實に此處こそは、甲板上の静けさとうつて異り、生氣と活動と充ちわたれる小天地で、足踏み鳴らしてタラップを馳せ廻り盛んに號鐘を打ち鳴らし、各種の叫び、各種の命令、總て全幅の音聲もて傳達されて居た。然々此の場の光景を視て、静と動との極端の差こそはあれ、予はこゝにも亦、甲板の上と齊しく奮激、銳意、熱心の氣、各人の間に漲れるを看取したのである。

一機なる機
關の活動

予は此の妻まじき光景に打たれつゝありし瞬間、彼の長髪稍や屈み背の提督の形貌も、羅針儀の上に頂垂れし舵手のしかめ顔も、自己の持場に凍つきし頑丈なる砲手の姿勢も、今又此處に聲高に喚りあひ、足音烈しく駆け廻る機關室の人々も、色澤のどんよりとした鋼鐵の巨大なる傳導桿も、將た又シンダーに、威力逞しく息づかいして居るあの蒸氣も、其の間に何等の差別もなく、予には一様に見えたのであつた。

不圖、船の精霊についての舊き海上の傳説は、此時端なくも予の記憶に焰を揚げて來た。精霊！其れは一の鉦、一の釘一の鏢旋の末に至るまでも宿つて居て、一朝若し艦の命運いよ／＼窮まりたる其の時に至れば、彼れは鬱然として其の權威を揮ひ、乗員と共に全艦を把括し去り、人と云はず、器と云はず、一切を擧げて唯一不可分なる一箇不可思議の物と化し終るとかや、忽ち又此の精氣が、今や予の胸底深く乗り移りて、我が心中は、不可測なる其の威力もて打込まれし様な感じがした。其の刹那、此の物は其の名をスワロフと呼び、我等が無二の愛重するものなるを理會したのであつた、こは是れ實に心氣亢進の一瞬間であつたが、程なく絶てのものは夢散して、後には唯だ一種特異なる勇氣と、或る深き決斷の感覺とが、吾が胸臆に残るのみであつた。

直ぐ前に、予の永年の親友機關長ウニルナンデル機關少佐が居つた。

彼れは何事か非常に激昂して、其の助手を對手に、一々何か立證して盛んに憤懣を漏らして居た。予は彼れが何事に斯くも亢奮し居たのかを解せなかつたが、今にも血戦は開かれんづ此の際、善かれ、悪しかれ、何事にも、此上の變更は一切不可能の場合とて、進んで之れを了解しやうとも欲しなかつた。

「オイ、もう大抵にしようぢやないか。」

と、彼れの手を把りつゝ予は斯く云つた。

「行かう！而して茶でも飲むだ方が勝した。どうも咽喉が乾きさつてしまつた。」

彼れは其の同情深い赤色の眼で、予を視上たるのみで、何の答もせずと歩み出した。

我等は士官室へと昇つて行つた。まだ霧の内だ、平生ならば多人數が詰めかけて來る騒々しい此の部屋も、今夜は殆ど空虚に近く、唯交

代の濟んだばかりの人と、此の真近の分隊の二三將校が、警急號音の鳴り響かんと待ち詫びつゝ、又は自分の當直時間の來るまでを少時偷んで前後も知らず、長椅子の上に眠つて居るのみであつた。然し寂しそうな從卒のみは、道がに几帳面に勤めて居たと見えて、直ぐに我等に茶を汲んで呉れた。

うつとりとなるまでに再び周圍は靜謐となつた。「第一操安の態度があつてはならぬ。」「一發の善射は悪い二發に勝るぞ。」「餘分な彈丸は一發もない。」「浦鹽斯德までの途中、補給は何處からも出來ぬ事をよく記憶せよ」と、重々しい口調で言つて居るのが、微かに、たゞし手に取る如く、艦部分隊後方の閉鎖した扉の向ふから聞えた。多分ウオーミン少尉の聲であつたらう。

「救へてるな。」
と、今し從卒の持つて來た熱い茶を啜りつゝ、ウエルナンデンはまだ

怒りの解けぬ氣味に呟いた。

彼れは甚く何事にか痛心して、何となく自己心中の苦惱を洩らした
い様な氣味が見えた。

「君！一體何事が起つたのだ？」
と、予は彼れの爲めに噴火口を開いた。

「そりや君、みんなあの獨逸納めの厭な石炭からだ。」
と、彼れは聲を密め、且つ四邊を見まわして、

「あの、それ、君も知つてるだらう。我々の船で、幾度も炭輪の失
火があつた事を。」

「あゝ、知つてるとも、然し何時も具合よく鎮火したぢやないか。
だが、何かい、又か。」

「いや、いや、左様ぢやない。だが君、焼けたら消えたりした炭は
もうすつかり變質して了つて、消費高が却々多い。まあ、良い炭に

獨逸納めの
下等石炭

比べると、二三割の増加だね。」

「待ち給へ。君！」

實際予は驚いたのであつた。

「チヤ、君は、何か、不足を慮れるのか。然し、今迄餘分の方のみ消費つたのだから、まだ普通の豫備炭が充分あるぢやないか。」

「充分？ 見給へ、此の朝方には千噸足らずになつて了ふから……。」

「だが、浦鹽斯德まではもう六百海里だ！ 何うして、そんなに餘計に要るんだ？」

「ツエナレ！ ウイチ」の事を忘れたかね。去年八月十日、彼の衝突に條線が出来るまで焚いた時など、一晝夜に四百八十噸も要つたぢやないか。して見れア、どうも我々の方でも費ひ方が過ぎる。」

「何？ 炭の費ひ過ぎぢやない！ 君が神経を費ひ過ぎたのだ。」
と、予は尙ほも彼れを擲擲つて見ようと、

心細き石炭の積載量

「でも、炭船が全部焼けたんぢやあるぢやないね。」

「君は何も解らない！」

と、眞面目なウエルナンデルはいよ／＼立腹して、慌しく茶をグイと引つかけつ、軍帽を掴むだま、何處へか駈け出した。

士官室はいよ／＼森となつた。予は獨りこゝに居残り、安樂椅子の上心地よく腰かけて、つひうと／＼と座睡し初めた。室外には、今しも中夜とて、當直交代の足音が微かに聞えた。

眼が覺めたのは三時頃であつた。予は再び甲板を一巡して上の方へ出て見たが、四圍の光景は依然として夕刻より些の變化もなかつた。

然し、曉近き海上は、幾らか既に明るくなつて、後の下弦の月は高く高く天心にかゝり、銀色ぼかしの其の光線で、濃氣の生地の上に、烟突、帆樫、網索などをあり／＼と描き出して居た。風は更に勢を増して吹き出して、寒さ身に沁み、吾れ知らずカラーの中に頭を締めしめ

前橋橋に於ける深夜の長提燈

た。前艦橋に出て見ると、提督閣下は安樂椅子の上に眠つて居られ、柔かき半靴を穿きたる艦長は、開取り得ぬ程の軽き足音にて、一端より一端へと、艦橋を横つて歩いて居られた。

「君は甚廢して今頃やつて來たのだ？」
と、艦長は予に下問した。

「ハフ、一寸巡つて見やうかと思ひまして……。」

「睡つたかね？ 君」

予は提督の寝顔を顧みつゝ軽く點頭いた。戦々競々たりし徹宵の心配を脱して、今や漸く安心の境の近づいたかの如く、艦長は平然として語り出した。

もう首尾よく通過し得るに違ひな

「僕はたつた今も提督と話をした所であつたが、實際、今夜は平穩無事に経過したとしても、もう宜しいと思ふ。吾が艦隊は、敵に對して未だに露見されずに居る。彼等今尙は無意味の連呼應答を續けて語り出した。

て居るのみで、大ひらに門橋にさしかつた我等に對して、まだ一人も來て誰何しないのは、いかにもあめたいと人好しの日本艦隊ではないか。萬一今に至りて發見さるゝとしても、黎明まで剩す所僅に二時間計りぢやないか。時機既に逸せりだ。水雷艇が假令直ぐ配下にあるものとしても、之を集合するにさへ、暇があるまい。特には、斯かる天候の下に於て、何うして我等を探しあて得やうぞ。見給へ。我が艦隊の後尾さへ、模糊として視ることが出來ないではないか。眞逆ヒョククラ鼻ぶつつかる氣遣ひあるまいと思ふね。まあよかつた。先づ一安心といふものだ。首尾よく大賭博が中つて、二百萬ルーブルをせしめるかね。だが、唯一つ僕の氣にかゝるのは此の風だ！ 次第次第に強さを増して、何としても濃霧を吹き散らさなければ止らぬかの様に這んなに意地悪く吹いて居る。サア、其様なつちやア明日はいよゝ大變だ。其れこそ切り札も何もあつたも

のぢやない。造作もない。猶豫もない。最早や此のスワロフも覆滅あるのみだが、しかし、若しこれで、俄に、尙ほ一層霧が濃厚となつて來たら……」

と、彼は、さも／＼喜ばしうに元氣づいて、

「其時こそだ！敵は既に一晝夜の間、至らぬ隈なく探索する、全然徒勞に屬して何物も發見せず、たゞ奔命に疲れるばかりで、幸運は我が軍にのみ專らて、其處へ意外に、其の翌日も同斷と來たら、此方は見事に逸走だ！敵は航走、徘徊、連呼……と、死力を盡して焦慮つて見ても、時や遅し、我隊既に無し矣だ！我等の二度の御出君！無論浦鹽斯德からだよ——さて、盲滅法に捜しあぐむかね。だが其の時は、まゝさう話が別だよ。然し、まあ、敵はどの位イライラする事であらう？ヒョットしたら、餘りの忿怒に、我れと我身を嚼み盡すかも知れない。其れこそ御慰だ！」

艦長の樂天

艦長は、思はず喜びの聲を高めたが、さて提督の眠を覺ささない様に、手中にて口を蔽ひつゝ、予には、如何にも其れが羨望に堪へない位愉快に屈托なく笑つて居た。

艦長なる決

茲に一寸斷つて置きたいことがある。ウ、ウ、イグナチウゝス艦長は、決して輕卒な樂天的軍人ではなかつた。先づ第一に、我が艦隊今次の遠征を以て、絶望的冒險なりとし、其の成否は、一にニコラス神の御加護、又は天力の祐助の程度によるものと自信して居る側の一人であり、第二には、日本艦隊慣用の手段——全艦隊火砲の威力を旗艦に向け集中する——を氣にかけて居つた。されば初度の決戦にて、彼れ自身乃至は其の乗艦も、何れ逃れぬ全滅の運命と、疾くより斷定して居る様であつた。所詮回避し難しと信ずる此の自己の運命を決心してより、却て心地の清々しさを覺えたと思へ、彼れは最早や其の後唯一の間も、自己平時の爽快活潑なる心意氣を失はず、常に、戲言し、冷

評し、洒落て居た。又艦内生活の各種微細の事物果は水兵等内事の末に至るまで、熱心なる興味を以て世話をして居つた。然るに今や――予は眞實斯く信ず――敵に對する憎惡の念と、若し一朝日本軍が長蛇を逸した其の場合に、如何ばかり彼等が失望に陥らんか、其の状を想像して、衷心より愉快に笑つて居たのであつた。

四 戦機刻々迫り来る

願へば静寂なりし此の一夜、大風將に吹き起らんずる前の一時の静けさであつた。艦長の所謂「貳百萬留」は、遂に日本艦隊の手に落ちることゝなつた。

遂に日本艦隊に発見さる

五月廿七日の天明、曉霧猶ほ晴れやらぬ午前五時頃、敵の假裝巡洋艦信濃丸は、殆ど我病院船列中へ乗り入るまでに進み來り、其の隊形に依り、遂には我が本艦隊の所在をも偵知し得たのである。そして此際、我隊よりは遂に同艦を看取し得なかつたけれども、我艦隊の既に敵艦に暴露せし事は、彼れの電報通信状態の一變によりて、明かに認めることが出來たのである。云ふまでもなく、これより以後の敵の通信は、最早や哨艦の間に交はさるゝ單純なる連呼應答にあらざして、業に已に純然たる報告であつて、順次北へ北へと連續しつゝありしも

戦機刻々迫り来る

和泉艦現は

のであつた。
 日本艦隊の間に交換さるゝ箇々の電報は、各方面より頻々として櫛の齒をひくが如く感受さるゝに至つた。是に於て提督は命令を下して我が無防禦の後尾——特務艦隊——に對する敵の襲撃を防がん爲め、前衛の偵察艦隊を召還して、我が隊列後方の鎮鎗たらしめた。
 午前六時頃、ウラールは全速力にて我艦に追蹙し、信號機もて報告して曰はく、我艦隊の後方に當り、右側より左側へ航跡を横斷した艦船四隻ありたるも、濃霧中にて其の何物たりしかを認知する能はざりし、と。午前六時四十五分、右舷後方に當りて、何物かの艦影模糊として現はれ出た。此の船は大膽にも我が艦隊と極めて近接せる航路を辿りつゝありしが、やがて

附註 日本側の報告によれば、此の時東海提督は其の主力艦隊を把握して、釜山附近の海峽に全艦隊の所在に關しては、北方より情報を持ち居たりと。

巨砲は口を

快速巡洋艦の缺乏

此は敵艦和泉なることを識つた、
 約午前八時、濃氣尙ほ濃密なりしに拘らず、和泉との距離五十ケールなる事を測定し得たので、全艦隊多の勇士を奮躍せしむる警急號鐘は、高く艦内に響きわたり、我が船部砲塔は既に其の十二吋の巨砲口を、威赫的に揚仰せしめて居る。斯くて和泉は、此の危険を感知したるものの如く、倉皇として遁走し初めた。
 彼れを尙ほ一層遠く追ひ攘ふ爲めに、優秀なる巡洋艦を派遣せねばならぬのであつたが、斯かる使命を果たさうべきもの、我が巡洋艦隊中、僅々オレーグ及びアウロラの二艦あるのみで、之れを除きては、偵察艦中のスウェトラナ稍之れと比肩するを得んも、爾餘のドンスコイやモノマフやに至りては、全くの老朽であつた。最も相當の備砲は有して居たが、速力著しく遅緩であつた。又ウラールや、アルマーズ等は、快速は即ち快速なるも、其の代り、之れに備へられてあつた火

戦機漸々迫り来る

砲は、殆んど玩具ともいふべきものに過ぎなかつた。且つや、眼前分一分と通りつゝある勇猛なる勁敵との會戦も豫期せなければならず、實に一砲一弾も尙且つ千金の値を有するの秋であつた。

又若し我が三戦艦隊が、優秀なる日本の十二戦艦と、最後の大決戦を試みるに至らんとし、爾餘の日本艦隊全部は、直ちに我が巡洋艦隊を粉碎せんとて、猛然襲撃し來らんことは火を賭るよりも際かである。今や興廢を分つ此の大戦闘！其の爲めには先づ勢力の集中を必要とするは言を待たぬ。されば我が提督は、彼れ和泉の傍若無人なる振舞にも甘んじて、敢て一體を派して彼れを驅逐することを試みなかつたのである。

敵艦隊々出動し來る

勢力の集中

八時少し過、左舷前方濃霧の中より、我れと殆ど並航せる鎮遠、松島、嚴島、及び橋立の諸艦が顯はれた。其の前方には、秋津洲かと思はしき輕装小巡洋艦が進んで居たが、此の小艦は、我等より熱く之を

戦艦準備の隊列

認むる||即ち彼等よりも我艦隊を||や否や遽かに北方遠く逸走した。而して、殘餘の敵支隊は、徐々に我隊との間隔を増大しつゝ、次第に視界外に没し去つた。

十時に垂たる頃、同じく左舷前方に、千歳、笠置、新高、及び音羽等の快速巡洋艦隊を認めた。

今や國運を賭すべき最後の血戦の時機は、刻一刻と逼迫し來ることは愈明確となつた。

信號命令に依り、豫め作製されてあつた方略の如く、第一及び第二の戦艦隊は、共に速力を増大して、各艦一齊に左二點に回頭して、第三戦艦隊の前面に就かんと進動した。特務艦隊には、成る可く艦隊の右舷後部に續航すべく令せられ、又巡洋艦隊は、之れを其の左側より掩護することと定められた。而して此の特務艦隊の右側よりは、敵艦和泉の襲撃、又は之に類する他の危険を防がしめん爲めに、特にモノマ

戦艦隊々進り來る

不慮の發砲

フが分遣された。
 午前十一時廿分に至り、我艦と敵の快速巡洋艦隊との距離は、既に五十ケイブルに近づいて居た、此時アリヨールは何思ひけん——始めは何れからか分らなかつたが、同艦より直に信號機を以て報告して來たから、其れて漸く知ることが出來た——不慮の第一弾を、敵艦に打ち出した。無烟火藥のこととて、後續諸艦は前航艦中の何れより此の發砲の行はれしかを判知するに由なく、全艦隊は之を以てスワロフの號砲と速了して、茲に股々たる砲撃は開始された。殊に第三戰隊の如きは最も猛烈に發射したのであつた。敵の巡洋艦隊は、急に左方に轉針して、均しく我れに應射しつゝ迅速に我隊との距離を増大し初めた。
 此の時我がスワロフの橋上高く、一連の信號旗は掲揚せられた。曰はく、
 「徒らに砲彈を放棄する勿れ」

對馬水道の中央に入る

此日は露帝の親冠式紀念日

と。各艦の砲火は漸く中止された。同時に再び信號に依り、「總員交互食事に就け」と令せられた。
 正午、我艦は東水道の中央に進み、對馬の南端と併行點に在つたが、それより北東二十三度に針路を定め、艦首直ちに浦鹽斯德へ向出した。將校連は、交互に、且つ快速に、食事に就いた。今日は恒例に依り、我士官室に於いては、賓客として提督、艦長、及び幕僚の出席を請ひ得て、祝賀の午餐を共にすべき筈であつたが、此の危急の場合、無論其等の催しの出來得べくもあらず、提督及び艦長は、夜來寸時も艦橋より下降せず、幕僚連も亦、唯何事か息せむしく、將官食堂に馳せ付けるのみであつた。予は戰艦開始前巻煙草の豫備を填めて置かうと、自室に降つて行つたが、此の時偶然士官室に於て、參集の士官が心ばかりの祝賀會を開いて居つた處に際會したのである。食事は全部一度に運ばれしに拘らず、來る、一方より之を平げ盡して、樂しき祝賀の

會食を見ることは出来なかつたが、各自の前の大盃には、三鞭酒が注がれてあつた。恰度予の此の室に這入つたとき、此處に集まつて居つたものは悉く起立して、深き沈黙の裡に副長ア、ビ、マケドンスキー氏の乾盃辭を傾聴して居つた。其の辭に曰はく、

「神よ！ 我が兩陛下が神聖なる戴冠式を行はせられたる、いともたふとき大節に當る此の日に於いて、仰ぎ冀はくば、吾等に篤き祐助を垂れ、吾等をして名譽と共に吾等の祖國の爲めに盡すことを得せしめ給へ諸君！ 皇帝、皇后兩陛下の萬歳を奉賀し、又我が全陸西亞帝國の爲めに祝福せん！」

陸じくも亦勇ましきウラーの聲は、一齊に湧いて士官室を轟かし、其の餘韻は、此の折恰も上部より達した戰闘警號の音響と融合して、少時の間満室にたゞよつて居たのである。全員は何れも各自の部署へと驅けつけた。

日本巡洋艦隊再び現は

日本軍の輕装巡洋艦隊は、再び左側より我隊に接近し來りしが、今回は我艦隊の針路遮断を試みんとする態度々として、更らに驅逐艦隊を其の側に帯同して居た。

我が前面を横断して、浮流水雷を投下する。恰も過る八月十日の海戰に敵の爲したる如く日本艦隊の計畫ならんとの疑を抱きて、我が提督は第一艦隊をして右方正面に展開せしめ、以て我が精銳なる五隻の戦艦の威嚇砲撃により、敵を撃退せんと決心した。

斯かる目的の下に、第一艦隊は最初各艦右八點に逐次回頭し、次いで左方八點に一齊轉針すべき筈であつたが、此の艦隊運動の初半は巧に成功し得たれども、第二回運動に至り、信號誤解の爲めに全然不結果に終つた。即ち、アレキサンドルは先づ誤まつてスワロンに續いて單縦陣形を取つた。然るに既に一齊回頭にうつり居つたるボロヂノ、アリヨールの兩艦は、之れを見て自己の失錯せしものと速了し、艦々

見苦しき結果換の不

回轉を復舊してアレクサンドルの後に跟隨した。其の結果、横隊をなすべき第一戦隊は、却て單縦陣を形成して若干前方へ進出し、第二、第三戦隊と並行の縦隊をなすに至つたのである。

艦隊運動は斯くの如く不成効に終つたが、所期の目的だけは尙ほ達し得たのであつた。即ち敵の巡洋艦及び驅逐艦は、其の上を飛び越し二砲弾に怖氣づきし處へ、更に我隊の二列縦陣をなしての進動に痛く驚きしと見え、我が針路遮断の企圖を放擲して、速に左方遙に退却した。かくて此等巡洋艦は、必ずや我隊の二縦陣となりしことを報告せしなるべく、左ればこそ、當時我右舷艦首遙かの視界外に在りし彼れ東郷も、全力を擧げて先づ我が防備最も薄弱なる左翼縦列を撃破せんとて我が前面を横断して左翼へ進出せんと決心したのである。然るに日本巡洋艦隊の逸出するや否や、我が第一戦隊は直に速度を加へて更に第二戦隊の先頭に其の位置を占むべく、齊しく左方へ回首したの

日本主戦艦隊の出動

てあつた。

一時三十分、第一戦隊が第二及び第三戦隊の前首に進み、將に舊針路に轉針せんとし、「第二戦隊は第一艦隊に續航せよ」との信號は掲げられたとき、殆ど之れと同時に前方遙かの濃霧の中に、敵の主戦隊は微茫として顯出し始めた。敵は我隊の前路を遮断せんとするもの如く、右方より左方へ、南西に近き針路をとりて進航した。既にして我隊の左側へ進み來りしとき、旗艦三笠は急に南方へ回針した。三笠に次いで、敷島、富士、朝日、春日、及び日進の諸艦が續航した。此の時我がロゼストウンスキイ提督は、本艦司令部の既に司令塔内に移されありしにも拘らず、其の幕僚と共に、尙ほスワロンの上部前艦橋上に在つたのである。

東郷は其の十二隻の戦隊の全部を一縦陣として、躬親ら統率すべしとの提督及び幕僚の想定には、予は元と全然不同意であつた。見よ、

忘れ難な
敵の艦隊

嗚呼此一戦

五〇

過ぐる八月十日の海戦に於ても、彼れはそこにありし二隻の装甲巡洋艦を、其の六隻の自己の戦闘艦隊に編入せず、之れをして獨立的に運動せしめたてはないか。予は、上村艦隊が其の固有の資能により、必ず他に活動することならんと思慮にふけりつゝあつたが、夢寐にも忘れ難な旅順沖にての舊知——敵艦隊の六隻が——今歴然と眼前に描き出されしを見し時は、心躍りて、吾れ知らず或る一種の歡喜の情の湧き出づるを抑制し能はなかつた。予は覺えず叫んだ。

「アリアレ、閣下！八月十日と同様、全部六隻であります……。」

提督は向き直りもせず、否定的に頭を打振りつゝ、

「否！もつと多い！全部此處に居るよ！」

彼れは既に司令塔へと降りかかつた。

如何にも提督の言は事實であつた。初めの六隻の艦隊の跡に跟いて稍隊列を延長せる上村提督の巡洋艦隊、出雲、八雲、淺間、吾妻、常

予の不確定
なる地位

盤、着手の諸艦が懸なる障氣の裡より、徐々に進出し來つた。

「諸君！各自部署に！」

と、提督の後に續きつゝ、參謀長は忙し相に命令した。

讀者！予をしてこゝに予が勤務の地位を明かにするの一節を挿むを許せ。予が此の地位たる、極めて不確定のものであつて、實際餘り有り難いものではなかつた。表向には旗艦付航海長といふ嚴めしい職責を有して居つたけれども、つひぞ一度も事實に其の職務を執行せし事なし、後又提督よりして軍務部主管に任命されしも、曾て其の所管事務と離れ難き關聯を有する詳細なる情報、又は最も機密を要する報告文書等の管掌にたづさわりし事さへなかつた——麾下各司令官が任意に知り居れる此等各種の事項さへも、予に通知するを以て、時折は不便とせし様であつた。——茲に於いて、予は全く一の便乗船客たるに過ぎなかつた。而かも不希望の司令部付船客とも謂ふべきか。予は六個月

戦機刻々迫り來る

五一

に亘る旅順口在陣中、敵軍との幾多大戦小闘に参加して、遂に予をし
て「老練家」なる稱呼を受くるの特権を専らにせしめた。故に彼のニコ
ラエフスキ、海軍大學の軍學科に於いて、戰術及び戰略を修得したり
しとは云へ、下瀬火薬の臭氣をだに未だ嘗て嗅ぎたることなき我海軍
の所謂精華より成立せる幕僚中に、これを入れて置くもよも無益のこ
ともあるまじとの提督の發意にて、予は遂にスワロフ艦上に取られ
たものであつた。幕僚總會議を以て決する戰闘豫定表の編成されし際
の如き、予は番に其の席に招かるゝの光榮を有しなかつたのみならず、
其の所謂精華述により編まれし豫定表の何れの部分にも予の姓名は發
見するを得なかつたのである。予は戰闘中何を爲すべきか。何處にあ
るべきか。我が任務は如何なるものなりやとの予の質問に對して、艦
隊參謀長は、例の如く兩肩を一寸縮めて、

「そりや、何處でも君の好み次第に。然し、有體に云へば、司令塔

には今てさへ澤山の人で、身動きする隙もないのだからね、何處か
自身に巡視して、場所を選定して呉れ給へ。其れに仕事も……ア、
君は本隊の戰闘記録係だから……若し十二時砲塔中の何處かに行
かれたら……尤も、見える事は少し勘いかも知れぬが、一番安全
な場處だからね。」

此の最後の注意は、予に抄からず侮辱を感ぜしめた。予は即ち決然
參謀長に對して、砲塔内に隠れようなどは微塵も考へない、予の無
能は今さら致方なし、記録係をとの御委任は受け申す、但し、場所
は最も善く全局を観察し得べき處を勝手に選むべしと、鋭く答へてや
つた。

予は此の約諾を重んじ、其の委任を極力遂行せし事は、敢て自ら謙
遜するを要しなと思ふ。予は艦橋が破壊し盡されし時、初めて之れ
を離れ、又生きながら猛火の危難に遇ひ、身に重傷を負ひたる時に至

嗚呼此一戰
り、總かに上甲板を去つたのである。

五 砲火始めて相接はる

今に艦隊の
おまじ事

「マアい、とんだ戲事が出来るだらう。」
と、今や司令塔へ赴かんとせる提督及び其の幕僚の上司と分袖するに
臨み、予は斯く思つたことを眞率に告白する。

予は直ちに後艦橋へと赴いた。此處よりは、常に善く敵を展望し得
るのみならず、亦我艦隊をも見るを得るからである。予が自己の任務
として負はされたる「戦記係」即ち總てのものを視且つ之を記録すべ
き任務を遂行するには、最も便利なる場所と認められたからである。

此處には、右舷艦尾六吋砲塔長たるレイズキン大尉が居つた。今や
戦闘が左舷より開始さるゝ順序となり、従つて彼れの砲塔は猶暫時休
止の體を持するを以て、始らく彼れは觀戰の爲め此處へ駆けて來たの
である。

砲火始めて相接はる

予等は此處に佇立しつゝ、敵の運動を展望して、其の真意を解し兼ねた。何故に日本軍は、我軍の弱點たる特務船及び其の掩護隊——巡洋艦——が、隊の右舷後部に在るにも拘らず、我が前面を横斷して左側に出てんとはするぞ。或は、敵は先づ我れと反航行進して戦を開始し、然る後自己の速力の優秀なるを利用して、一舉我が特務船隊及び微弱なる我が後衛を衝かんが爲めに、我が後尾を迂回せんと計畫したのであるまいか。然し、此は今の如き場合の狀態に於いては、却て自らの直射砲火の下に立たざる可らざるに至るであらうなど、斷片的の評言を交はして居たのである。

「アレーアレー見給へ何だらう？ 彼等は如何すると云ふのだらう。」と、レーゾキンは叫び出した。彼れの此の叫びの裡には、言ひ知らぬ歡喜と疑惑とが仄見えて居た。如何にも、予自身も亦熱々展望し、果ては我れと吾が眼を疑ふ程に、双眼鏡を離さず眺めて居たが、奇怪に

も、日本艦隊は、不意に舊航路へと左方逐次回頭を初めたのである。艦隊の航路回轉に關する知識を些少にても有せらるゝものあらば、斯くの如き日本艦隊の敵前運動は、餘りに奇怪に、餘りに無謀なることは、直ちに明瞭に了解するてあらう。即ち此の艦隊運動に於て、日本の諸艦は、先續艦の轉回せし回轉軸なる或る一定の點を、逐次必ず經由せなければならず、而して此の點たる、海面上に恰も一定不動のものとして存し、敵たる我等の照射を非常に容易ならしむるものであるのみならず、十五海里の速力を以てしては、艦隊序列を轉整するに必ず十五分間を要し、且つ其の間は、既に轉回せし諸艦も、猶ほ回轉軸へ進みつゝある僚艦の爲めに、其の發射を妨げられねばならぬのである。

「ひう、こりや、無分別だ！」

と、レーゾキンはいよ／＼乗氣になり、

砲火始めて相接はる

「見給へ！僕等は今に敵艦隊を蹴散してやるから！」

「神の冥助、若し我れに在らば！」

と予は思つた。即ち、予は猶ほ未だレーゾキンの如くに安心することは出来なかつた。彼れは一途に東郷の此の舉を無分別だと断定して居たが、予には此の間の消息は極めて明瞭であつた。恐らくは東郷は何物か豫期以外の或るものを発見せし爲め、直に人の意表に出づる新たなる決断を執つたものであらう。其の運動たるや、勿論冒險的のものではある。されど又一面よりすれば、此の場合若し彼れにして前路の復航を必要なりと看取したならば、實際此の以外に出づべき策はなかつたのである。全艦隊を轉針するに、一齊回頭を用ひ得たるや無論であるとは雖も、さすれば戦陣中首脳となりて全艦隊を指導する先頭艦は、今までの殿艦盤手之に當る事となるのであるから、戦陣の初期に於いて、吾が意に反するが如き失敗を招かざらん様、自身親しく全艦

隊を統率せんが爲めてあつたであらう。

予が心臓は、旅順口に於ける六ヶ月中にも、未だ曾て経験せざりし程の鼓動を始めた。若し成功を得ば！神よ！冥助あれ！よし撃沈は叶はずとも、せめては敵の一艦にても戦列より離れしむるを得ば……最初の成功を！然り！必ず！何うあつても！

提督は我艦隊をして、此の至幸なる機會と至便なる位置とを利用してしめんとて、頻りに焦慮つたのであつた。

午後一時四十九分、日本艦隊中の三笠及び敷島十二隻中の兩艦が、新針路に回進し初め、我れとの距離三十二ケーブルを算するに至りしとき、我がスワロフ艦上より紫電一閃、耳を劈く響と共に、第一弾は切つて放たれ、之れに續いて、全艦隊の砲聲は、殷々として轟き波つた。

予は食るが如く双眼鏡を以て展望して居つた。敵艦の上を飛過する

日本艦隊を
開いて砲門を

嗚呼此一戦

六〇

もの、又は之に達せずして落下するもの、砲丸は多く敵艦真近に集中したのであつた。然し、八月十日の戦闘に於けるが如き、随分面白かつた程の命中は、遂に見る事を得なかつた。是れ我が砲弾は炸裂に際し殆ど烟を發せず、加之、其の弾管は、敵の舷側を貫通し、艦の内部に至りて、初めて炸裂する計算にて作製しあるものなれば、其の命中は敵艦上の何物かを穿ちし場合、初めて之を認めることが出来るのであるが、絶えて斯かる事はないのであつた。

約二分を経て、先の二隻に次ぎて、富士、朝日の兩艦が轉回し終りし時、日本艦隊は初めて其の砲門を開いて應戦したが、最初の數發の敵弾は多くは我上を飛び越したのであつた。日本艦隊の巨砲中には、斯かる短距離でも、筋斗うつてとんぼがへるものもあり、肉眼にてもよく之を觀望し得られしが、其状恰も市中の遊戯に棒を飛ばすが如くくるり／＼と回轉して居たのもあつた。然し、砲弾に聯想さるゝ恐ろ

猛烈なる敵
弾の爆發

砲火始めて相接はる

六一

しき唸りもあらず、恰も馬鹿者のつぶやきを聞く如き輕微なる響して、ずん／＼吾人の頭上を飛び過ぎて居た。

「ヤーコンモ」(4)「大皮靴」てすか？」

と、レーゾキンは笑ひながら糺ねた。

余は然りと頷いた。余は又、從來日本軍との戦闘の経験に於いて、未だ曾て知らざりし一の新しき驚きを加へた。そは、例の「大皮靴」が、取り止めもなく筋斗うつて行き當り放題、假令水中に落下しても、矢張り烈しく爆發して居た事、斯る事は從來絶えてなかつたのである。敵は絶えず觀測を怠ら

附註(4) 大皮靴とは、旅順口に於て日本軍の大口径の長砲に對する吾人の砲名なり。直徑一フット、長さ四フットにも及ぶ彈丸にして、是れ實に爆發薬を裝填せる大皮靴にあらずして何ぞ。

附註(5) 吾人が旅順の戦場より發せる報告には、何れも日本軍の砲丸が爆發力に微弱な結果なるを喜ぶ旨が頻りに全世界に告白せるが、日本軍は反つて之を輕視せず、最も有益なる敵の觀測とし居たるが如し。

なかつた。飛過砲の後には短程砲がやつて来る、一發は一發に次いで接近する、破裂したる彈片は、高き聲を揚げては、舷側に又艦上に鳴りひびく。前部煙突の向ふ側には、海水の巨柱奔騰して、煙燻濺々と起りたつ。前艦橋には、擔荷を持って右往左往。予は遂に委任の範圍を超越した。

「ツエレテリ公爵を！」

自己の砲塔へ趨りつゝありしレーゾキンは、下方より予が無言の質問に對して斯く叫んだ。

次に來りし砲彈は、中部六吋砲塔に近き舷側を撃ち、次いで予が後方下部に當る左舷艦部砲臺にも何物か墜下した。たゞ見る、司令部出口よりは一簇の黒煙噴出し、其の間より炎々たる紅蓮の火舌は現はれた。是れ甲板を貫通して艦長室に命中せし砲彈の、更に士官部を破

中艦長室に命

附註(0) ツエレテリ公爵は司令部附近にあり。

壞し、此處に到りて發火せしものであつた。

初戦の喪神
及び其の變化

余は此の海戦の初期に於いて、會つて砲彈雨注の下に立ちしことなき兵員が、最初の敵彈の命中によりて、殆んど喪神せしが如くなつたものを一再ならず認め得た。抑も感覺の喪失なるものは、極めて微細なる外部の刺戟により、容易に且つ迅速に恢復すると共に、又其の性質上、到底引き締め得難き怯弱とも、亦異常なる士氣の振興とも、變化すべきものであるのである。

消火水口及び蛇管の處にあつた人々は、殆ど喪神せしかの如く、唯濺々たる黒煙と炎々たる火焔とを傍觀するのみで、何等爲す所を知らざるの有様であつた。茲に予は艦橋より躍り下りし甲斐ありて、「茫然するな！」「水をもて！」等の如き簡單なる言句も、遂に彼等を覺醒せしめ、次で勇敢に火中に奮闘せしむるに至つた。

我艦最初の
發火と予が
最初の負傷

予は時計及び手記帳を取り出した。是れ我艦最初の發火を誌し置か

砲火始めて相接はる

んが爲めてある。然るに此の瞬間、何物か手が腰部を撃ち、又大なる柔しき、しかも強く、何物かに背部を打撲され、爲めに一度は空中に突き上げられ、そして甲板の上に落下した。

復び予が突立上りし時、予が手には依然として手記帳はあつた。時計も亦存して居つた。たゞ秒針の少し屈曲せると、硝子蓋の飛び去つたのみで、時計は異状なく動いて居つた。猶ほ充分人心つかぬ予は、眸をすえて此の硝子を索めかゝりしが、遂に瑕疵一つなき其を發見し、拾ひ上げて之を原の如く嵌め付けんとして、はつと、初めて吾れに返り、自己の空虚なる所爲をなしつゝあるに心付き、驚いて周圍に一瞥せしに、火災は最早や鎮まり、其の附近には、唯破損せし水管より漏れ迷れる水の、心なく其の上注ぎかゝりつゝある二三の戦死者の横はれる外、更に何人も居なかつ

附註(7) 餘り大ならざる破片にて瓦傷せしものにて、余は最初之を意にも留めざりし。

軸部デッキの傾

た。予は多分知覺を失して、若干時此處に倒れて居たのであらう。

既にして、此の打撃は、軸部デッキ、ケビンの方より來たものであつたことを知り得て、予は其の方を覗ひ見た。其處には、必ず司令部員ノウオシ、リッエン大尉、カザケ、ウイチ少尉、及び義勇兵マクシモフ、又は後艦樓付信號手の一團が居つた筈であるからである。

砲弾はデッキ、ケビンを貫通し、其の内壁に中りて爆烈したのである。信號手等||十人乃至十二人||は悉く折重りてこゝに斃れて居た。ケビンの内部には、唯果々と何物か堆積し居れるのみにて、將校用の望遠鏡の、さびしげに其の中に落ちたるが見えるのみであつた。

無慘！悉皆やられたか知らん？と予は考へた。然し、幸に是れは誤であつた。不思議にも、ノウオシ、リッエン、カザケ、ウイチの二人は、唯負傷せるのみにて、予が倒れて居つた間に、マクシモフに援けられて、綱索所に行し由にて、其れより一時間計りの後には、既に馳

砲火始めて相接はる

せ廻つて居たのである。

「如何ですな！ 御馴染の光景でしょう。」

八月十日に似て居りますか？」

と、そそつかいしレゾキンは、己が砲塔より抜け出して来た。

「全く同一だね。」

と、予は嚴肅なる口調で答へた。然し、是れは眞情ではなかつた。有體にいへば、實は「全く類似しない」のである。

見よ！ 八月十日の海戦には、數時間に亘る合戦中、ツエサレウイチの蒙りたる敵の巨砲は、僅々十九發に過ぎなかつた。されば予は事實此の度の戦闘にも、心私かに其の落下の時間と、破壊せし箇所と、其の程度とを明細に手記し置かんと豫期し居たるに、豈料らんや、落下の數さへ計量し難き此の場の状態に於いて、晏んぞ其の詳細を記録し能ふべき乎。斯かる猛射は、未だ嘗て之を見聞したる事なく、又想

像だに爲さざりし所であつて、餘りに猛烈なる敵の砲弾は、急激か又は驟雨の如く、一彈來つて又一彈、射撃されたといはんよりも、寧ろ間断なく撒布されたのであつた。

旅順艦隊勤務の六ヶ月中はあらゆる物に見馴れ、下瀬火薬にせよ、メリニットにせよ、相應に予の舊知であつた。然るに今此處に現はれしものに至りては、全然未見の新らしきものにして、其の舷側を撃ち甲板に落下するものを見るに、是れ砲弾に非ずして、即ち一の完全なる水雷であつた。彼等の飛過する途に當りて、微細なる物體と雖も萬一之に觸接せんか、忽ち猛烈に爆烈した。欄干、烟突の支索、船梁の突端等も、一切を粉碎する此の偉大なる爆發に對して、總べて是れ屈強の誘發であつた。而して、

附註(9) 日本海軍の戦艦に於ては、旅順開城後、第二艦隊の來航を待つ間に、彼等は各砲臺長各人に付五發砲の實彈照準射撃をなさしめ、其技を練り、又射撃したる火砲は全部新砲と取り換へて敵の來航に備へたりと。

舷側の鋼板、及び上甲板上の各種装具は炸裂して一塊となり、飛んで船上の人々を薙ぎ倒すのであつた。鐵製のタラップは腕曲して環状に變じ、破壊し難き火砲は砲架より離脱した。

斯かる惨害は、たとひ砲彈自體の命中にても到底爲し能はぬ所で、無論其の斷片の能くすべきものではなく、唯猛なる爆破の力、始めて能く之を爲すのである。實に日本人は、彼の米國人がヴェヌサイエムを創製せんと試みし理想を、現實に成功し得たものである。而して其の爆發に次いで異常に高熱の溫度と、何物をも溶解せざれば止まざるかと思はるゝ恐ろしき火焰とは起るのである。予は砲彈の爆發後、親しく此の眼にて、舷側の鋼板の燃え立てるを實見した。勿論鋼鐵の燃ゆべき筈はなければ、そは其上の塗料なるは明かであるけれども、尙釣床及皮靴の如き燃え難き材料の、しかも數束に積み重ねて横牆となし、且つ水を注ぎ置きたるものも、見る間に枯柴の堆積の様に燃え

鋼鐵も亦燃

上がるのであつた。双眼鏡は次第に何物をも展望し得ざることゝなつた。是れ熱焼したる空氣の振動による現象の爲め、毀れて了つたのである。

「否！八月十日とは雲泥の相違だ！」

予の疑惑は、此の光景によりて尙ほ一層強まつた。曾て予等が旅順に於いて實驗せし所によれば、下瀬火薬はメリニットの如く、其の爆發の際、濃き黒色又は帯緑の燻色の烟を發したのであつた。斯の種の砲彈も、偶には此の日の戦に見受けなこともなかつたが、其の殆ど總ては彼の恰もとろける様な火焰を吾人によつかけ、又あらゆるものを燒盡し、前代未聞の不可思議なる偉力もて萬物を破壊する——敵の新火薬は炸裂の際、黄褐色の餘り濃厚ならぬ、而かも窒息せしむる様な硝煙の雲と、縋いて白き綿毛の如く空中に游曳する刺激烈しき臭ひとを放散して居た。是は全く新奇のものであつた。

前代未聞の新火薬

砲火始めて相接はる

司令塔内の提督と艦長の

予は急に司令塔へと駆け去つた。何が故に？予は疑に毅然として、此の内に入るを語はなかつたが、今は唯何となく單に其の内を覗き込んで見様とするのであつた。必らずしも、賤しい卑しいあの卑怯者に、倣はんとするのは勿論ない。

前艦橋に駆け上ると、今しがた此處で信號兵曹コンダウロンが戦死した其の血溜りに滑つて、予は危く墜落せんとしたが、機に踏みとまつて、直ぐに司令塔の中に入

附註(9) 或る最も信用すべき戦艦の報告に依れば、敵艦は本海軍の戦艦に比し、其の速力、射撃力、装甲力、及び機動性に於て、我々の戦艦に劣る者なきを以て、我々の戦艦に對して、極めて危険なものである。我々の戦艦は、其の速力、射撃力、装甲力、及び機動性に於て、敵艦に劣る者なきを以て、我々の戦艦に對して、極めて危険なものである。我々の戦艦は、其の速力、射撃力、装甲力、及び機動性に於て、敵艦に劣る者なきを以て、我々の戦艦に對して、極めて危険なものである。

つて見た。此處には提督と艦長の兩人が稍屈み腰に、装甲部と屋蓋との間の採光孔より展望して居た。

「閣下！」

と、例の賑かな身振りをなしつつ、艦長は言つた。

「距離を變更して、少し戦線から遠のかなければなりませんね。……もう、大分彼等をやつつけましたから。それに熱氣が甚いです……。」

「待ち給へ！だが、味方も同様大分斃されただらう……。」

砲火始めて相接はる

保管の危険なるを見せしめんとす。我々の戦艦は、其の速力、射撃力、装甲力、及び機動性に於て、敵艦に劣る者なきを以て、我々の戦艦に對して、極めて危険なものである。我々の戦艦は、其の速力、射撃力、装甲力、及び機動性に於て、敵艦に劣る者なきを以て、我々の戦艦に對して、極めて危険なものである。我々の戦艦は、其の速力、射撃力、装甲力、及び機動性に於て、敵艦に劣る者なきを以て、我々の戦艦に對して、極めて危険なものである。

と提督は答へた。

艦輪の左右兩側には、將校風の服装した兩人が、俯して横はつて居た。シーシキン大尉は、其の手をついた手に對し、眼前に倒れ居れる此の兩勇士を指しつゝ、

「操舵兵曹長と、ヘルセニヨーフです。ヘルセニヨーフは一番に！」

と、予の耳邊にさゝやいた。

測程儀は頻繁に作動した。ウラジミルスキーは勵聲一番、命令を與ふれば、電流手は指針の把手を轉じて、各砲臺及び分隊に敵の諸艦との距離を傳達して居る。實に此處には——若し死傷者に意を注がずに

かりき。風波に依れば——同じく最も信望すべき敵は此の新火薬を得たりしとか、されば我隊の戦場は細等とのみ交戦せし各艦は、戦場及び船の如き洋面を各より攻撃を受

静寂なる司令塔内の動

居たならば——萬事恰も平時の教練に於けるが如く、一系亂れず、肅然として進行して居る様に見えた。

「大丈夫だ！」塔を出てつゝ、予は斯く思つた。然し不安の念は直に腦裡に閃いた。感ずべき彼等の静肅なる動作は、彼等が此の塔内に在りて、何等眼に觸るゝ事もないからではあるまいか。よもや彼等は、今我が艦上に何事が發生し、又今後如何に成り行くべきやとの心配も疑念も、真逆少しも起しては居まいと。

司令塔内には、予は唯數秒間立寄りしに過ぎなかつた。元と予が此處に來て見たのは、此處の情景の不明なるを感じたると、又意思と知識の集中處で、所謂吾が海軍の精華が集つて、艦隊の行動を操縦する中心と見做されし此の一團で、如何なる事の成案されつゝあるやを視察せんとの、止み難き希望との爲めてあつた。

一通り見廻つて、予は急ぎ立去つたが、此度は後艦橋へは歸らずに

砲火始めて相接はる

前艦橋に止つた。其處は全艦中、最もよく敵艦隊を展望し得るのである。

予が心中の

双眼鏡より眼を放たず、予は凝視した。予は予が萬一の望みの網の断れざらんことのみを念じて居た。予は未だ敢て人前には之を言明せざりしも、心中私かに祈つて居たことがあつた。せめて此の一戦にて、我軍に幸あれかし！最初の！全戦役中、天にも地にも唯一度！初度の成功を贏ち得たい！若し沈没せしめずば！假令撃破し得ぬ迄も！日本艦隊の序列より一隻にても落伍せしめ、其の爲め敵艦隊中に、東の間にては隊列の混乱を來たさしめんものと。

否！

正々堂々たる敵状

敵は既に冒險の回轉を了つた。其の十二隻の艦隊は、隊伍正々、極めて閉縮したる陳形を以て、我隊と並航し、順次前方へ進出しつゝ、其の間何等の故障をも認むるを得なかつた。予はツェイ式双眼鏡にて

此の時彼我の距離は二十ケール強なりし。其の艦橋上の釣床の防陣障、さては心憎きまでに落着たる人々の集團さへ、明かに認め得た。翻つて我艦を回顧すれば、是は亦何たる惨状であらう。艦橋上の一切の装置は炎々たる火焰、甲板上に燃焼せる材片の參差狼籍、又は果々たる死屍の堆積、噫、何等悲痛の破滅をや。信號及測程の兩所我が砲彈の落下を觀測せし哨所等、總べて掃蕩全滅されて居る。而して後方に續くアレクサンドル、ボロヂノの兩艦も、同じく既に猛火に包圍されて居るのであつた。

更らにいふ、八月十日の海戦とは全然似ても似つかぬ光景である。彼の處にては、兩敵は殆ど同勢力にて立向ひ、又同一程度の火砲を以て相闘ひ、其の結果互に相交殺した所謂互角の戦闘なるものであつた。然るに今や如何？こは是れ戦闘に非ずして、何等かの虐殺である、翫殺である。

處殺である

砲火始めて相接はる

六 噫壯烈吁慘烈

敵は威風堂々前面に進出し、我が進路の遮断を試みんと、迅速に右方へ回頭し初めた。而して我等も又針路を右方へ旋轉し、更に又之を殆ど垂直に轉じた。

時に午後二時五分であつた。

艦部十二時砲塔へ砲彈落下の報せを得て、予は之れを檢視すべく赴いた。此の際までは、相應の困難はあつたが、まだ船部より艦部までを通過することが出来た。後艦橋に辿りついて、くねり曲つた其の欄干を超えて下方を瞰視するに、砲塔の装甲屋蓋の一部は、左側砲の脇より破壊され、上方へ跳ねかへつて居る。然し、砲塔は尙ほ自由に回轉し、且つ猛烈に發射して居た。即ち敵彈の落下は、何等重大なる損傷を印しなかつた事は明かである。但し、後艦橋は既に可なり激しく

十二時砲塔へ落下

艦上交通の困難

破壊されて居た。信號塔——鋼鐵製ではあつたが、内部より木板を被覆し、木製の器具及び戸棚があつた——は火災に見舞はれて居り、其の前面は濃々たる黒煙の爲めに、何物をも識別し能はなかつた。

予は船部へ歸らんと決心した。然し此の時は最早や却々容易の事ではなかつた。艦の縦艦橋は半途より破壊されて居り、且つ無線電信塔は煙を擧げて熾んに燃えて居た。タラップは何時の間にやら飛散して居る。詮方なく、漸やく附近にありし何かの支柱と、其處に垂下せる綱索によりて、上甲板に下降した。艦尾樓へ出掛けて見ると、此處には、副長ア、ビ、マケドンスキー氏により指揮されつゝありし消防團が熱心に動作して居た。「大皮靴」は又も炸裂して、予は甲板に薙ぎ倒され、何物かの碎片紛々として落ち來り、殆んど予を埋めたのである。予は漸やく其の下より脱がれ出て、不思議にも自分が何等の負傷なく、單に打撲を受けしのみにて、萬死の危禍を免れ得たる天幸を感ず

噫壯烈吁慘烈

七七

副長の戦死

ることが出来た。ア、ビ、マケドンスキーは一脚を膝の上部より切断され、尚ほ彼れの夏服の前部よりも、右側よりも、血液の澆流し居たるを見れば、尚ほ夥しく負傷して居たのであらう。擔荷へ運び入れるまでの中に、彼は既に人事不省に陥つて居た。恐らくは綱帯處へ達するまで、纒に息の根をつなぎ止めたてあらう。茲に於て、消防團は無指揮者となつた。誰とて四邊に見えず、且つ此の場合、擧猛なる火焰との戦闘は、戦記々録に比して數層の重要事と信ぜしより、予は奮然自ら進んで一時彼等の首長たるの職を執つた。

艦員の減少

人員は順次益々減少した。諸方より、殊には、探光孔を通じてのみを破片の達し得る砲塔よりさへ、戦死者の代りとして援兵を要求して来た。將卒相次いで斃れしも、負傷者の收容にさへ、人手足らぬ此の際であれば、戦死者は、無論其の斃れたる場處に横はりしまゝ、長く放置されたのであつた。

唯一の豫備

凡そ軍艦にては、戦闘に際し、乗組の各員へ、夫々其の部署と任務とを任命するものにて、又豫備員なるものを置かれざるが故に、剩餘の人としては一人もあるべき筈がない。されば、此の場合、唯一の應急策として吾等の想起したのは、四十七蜜米突砲及び機關銃の砲手であつた。これより先き、彼等は徒に敵弾の的に殉死せしめざらんとして戦闘の初めより、装甲甲板下へ回避せしめてあつたのであるが、艦橋上に装置しありたる彼等の附屬の砲門は、敵弾の爲めに既に痕跡もなく掃蕩され、茲に彼等は全く閑職の身となつたので、直ぐに彼等と呼ばれて来たのであつたが、されど是れ實に大海の一滴、燒石に水であつた。人手は縦令や揃つたとしても、火神と戦ふ其の消防の機關は最早や一つもなかつたと言つてもよい。水管は新らしいのを取り換へ引き換へ使用するしも、直に爛れた布巾の如く化し去りて、遂には其の豫備品も滅盡したのである。嗚！焔は益々怒り狂ふ艦橋及び艦首部へ、

消防の天幸

今や如何にして給水し得べきか。艦首部には、十一隻の木製の端艇が錐形に並列しあり、幸に此等の中には悉く戦闘前より水を盛り置きたるが、砲弾の破片に打貫かれたる無数の小孔より滲流せし爲め、此の方面の火災は自然に消し止め得たるも、是れとて全水漏出の後には固より頼み難し。無論能ふ限りの手段は講じた。戦友の肩を攀ぢ登りては、タラップは已に存在せざりしより、小舟の弾孔を填塞せんと試みた。バケツにても水を運んだ。尙ほ故意に又は塵芥の爲めなりしかは知らず、排水溝の閉塞されありし爲め、舷外への水の排流は堰きとめられ、上甲板に溜滞せし水が、殆ど腰を没する程であつたのは、大に我等に勿怪の利益を興へた。先づ第一甲板自身の燃焼せざりしこと、第二には此の水により、我等は果々として上部より落下する木材の破片へ、之れを汲みては注ぎかけ、かくて纒に炎上を鎮め得たのである。

山海の珍味

健氣なる老
牧師なる老

幾何もなく、予の部下には僅に二三の人の残れるのみとなつたので、予は人を索んとて、先づ前甲板へと赴いた。右舷船部六吋砲塔の側なる前艦橋タラップの傍にて、旅艦付將校デムチンスキ少尉が、前甲板信號手の一團と共に在るを見た。此のとき、砲塔長ゴロウコン中尉は、己が瓶に用意し居れる冷へたる茶を出して、予等に饗應して呉れた。斯かる際に於ける斯かる御馳走は、山海の珍味にもまして、予は心身に無限の愉快を覺えた。

デムチンスキは予に報告して曰はく、本艦に落下せし第一砲は、恰も、最も適當なる場所と思量して、軍醫が先きに設置したる、上甲板砲臺中、兩中部六吋砲塔間の、艦の聖像の脇なる、其の假欄帶所へ命中し、多数の將士を殺傷した。此處に居つた軍醫は、宛も狙ひ撃ても喰つた様に、見事にやられたが、艦付の牧師修士祭司ナザリも亦重傷を負つたのであると。彼れは尙ほ感動すべき其の場の詳細を物

語つた。我が同情厚き此の老和尚は——昔に外貌に於てのみならず、其の精神より眞箇の修道士なりき——頸布を纏ひ、十字架と豫備の聖賜物とを持ちて、此の綑帶所の中に在りしが、大なる殺地の破碎されし如き弾片は、此の時彼れの身邊に蝟集して、大小數多の傷を負はせられたれば、居合せし軍醫及び衛生隊員は、彼れを擔架に載せ装甲甲板下の下方手術室へ送らんとて駈け付けしに、和尚は彼等を斥けて衝立上り、強き聲もて、「神の力と權威とにより……」と説き初めた。然し、喉元へせき上げ来る血汐に、しばし咽びかへりしが、あはたゞしく、「修羅の巷にて！罪障を赦免す」と叫び終り、此時までも手より放たず、握りしめたる十字架もて、周圍にありし人々を祝福しつ、靜かに神の御國に赴いたのであつた。

予は心動きて、彼れの亡き骸に一禮すべく行つて見た。艦の聖像は、一般の信仰最も篤く、艦の武運を祝福せしものにて、

其の聖龕の硝子さへも破損せず、完全に殘存し、其の前に垂れし燭臺には、數本の蠟燭の灯の、さも平和に輝いて居た。四邊には人の氣もなく、唯、曲れる机、挫けたる床几、碎碎せる瓶子の狼籍せると、參差散亂せる繻帶材料の間には、悲惨なる屍骸の其處此處に横はり、辛うじて其の裡に人體の斷片と推知し得らるゝものゝ散布せる何物かがうづ高く堆積し居れるのみとてある。

予は此の慘狀を熟視するに堪へなかつた。折柄タラップを傳ひて上部より、デムチンスキーは、司令部付スウェンベホン大尉を腋にかゝへて降つて來た。大尉は息づかひ苦し氣に飲料を求めた。予は此處に散亂せる陸戰隊用の小鍋に、バケツより水を汲んで彼れに與へた。然し、彼れの手は其の意に従はなかつたので、デムチンスキーと予とは左右より扶けて彼れの口にあてがへば、彼れはさも貪るが如くに之を飲ひて、

「なアに、ちよつとした事だよ！直に來ると參謀長に言つて呉れ給へ！」
氣息奄々として、眼付は怪しげに、

「一寸息休めする計りだから……。」
と、蒼く生色なき彼の唇は、力強く息を吸つた。咽喉と胸部とは何物か絶えず微鳴をあげて居る。上衣の右肩部の方より激しく裂けて其處から夥しく血が滴つて居た。デムチンスキーは、彼れに纏帶所へ至る迄の扶助として二人の保護者を與へ、而して予等は再び上部へ昇つた。

最も通曉せる機關官の戦死

殆ど之と同時に、予は深甚なる我隊の損失を耳にした。予は我艦隊の艦船機械士として乗組ましめありたる、機關少佐クリンカルの身の上である。是より先き、彼れは副艦長の致命傷を受けたりと聞き、自ら消火團の指揮を執らんとて、急ぎ馳せ上つたのであるが、其の途中

にて、無慘にも狂暴なる破片の斃す所となり、其の手は肘の邊より殆んど切斷されたのであつた。開戦の劈頭、最も適良なる艦船機關士を失ひたるは、是れ實に何たる損耗であらう。勿論我艦には、尙ほ殆んど此種の専門家とも云ふべき旗艦付造船技師ポルトウスキーを有して居たが、然し、彼れはスワロフ號建造の際の委員と云ふてもなかつたのであれば、クリンカル少佐の如く、艦の總ての構造、排水系の詳細に至るまで、一切の特點に通曉しては居なかつた。

上甲板に出て、予は艦首十二吋及び六吋砲塔の間を過ぎり、充分に日本艦隊の現状を展望し得た。

心憎く敵艦の安寧

日本艦隊は、依然として雄風凛々、一糸亂れず、一の火災あるなく、些の傾斜もなかつた。且つ又艦橋の破壊せる等も見えず、其の状況も國運の安危を培する大戦争に臨めるに非ずして、殆ど是れ射撃教練にあるかの様であつた。これに反して、既に小半時も間斷なく、殷々た

る砲撃を繼續し居たる我砲は如何？ 其の發射せるものは、寧ろ是れ砲
彈といふべきものではなかつた。噫、誰れか知らん、其の何物なるか
ぞ。

此の光景を目撃して、殆んど絶
望に近き威を抱き、予は双眼鏡を
ぶらりと手より放ち、足を返して
又も艦部へと向つた。

「最後の信號索も遂に焼け失せ
た」

とデムチンスキーは予に報じて、
「僕は部下を率ひて、何れへか
援助に赴かんと思ふ。」
と、力なく云つた。

信號機の全

附註(10) 日本海軍に於ける日本軍
の損害は、死者百十三人、最重傷者百三
十九人、重傷者二百四十三人、及び輕傷
者四百二十一人、内輪に見積られたるも
るが、此は内輪の數字は先づ實際の
の如きも、此等の數字は先づ實際の
に近く、最も實狀を語るものなり
ん。全死傷の殆ど半數は五百三十七
人中二百五十二人は戰死及び最重傷
者にして、而して其他の半數は之れに次ぐ
重傷者、而して輕傷者はその八バ
セント以上なり。兎に角一戦に
書は輕微なる方なり。又是れ命令
の全く炸裂せず、又は是れ命令
炸裂す

左舷艦尾の砲塔の擡滅

無論予は全然彼れに同意した。
最早索繩は盡きて、他に信號の手
段存せざるに、徒らに我信號手を
敵の猛射の下に暴露し置くに忍び
ざるを以てである。
時正に午後二時二十分。
果々たる艦林断片の狼籍たる間
隙を、予は艦部へと通過しつゝあ
る際、今し前甲板へと疾驅せるレ
ソツキンに出會した。

「ヤー、好い處に！」
と、彼れは人の氣をひきつける様に言つて、

「左舷艦尾砲塔は射撃が出来ぬことになりました。あの附近一帯は
砲撃不能です。」

嗚呼此一戦

るも不良なりしか、即ち大なる數個
の大塊に反し、日本軍の砲撃は、
の成分は比し殆ど七倍の強力にて、其
て、下の火薬は或は何等の物か尙一層強力
なるものなりしか、何れも一層強力
なるものは爆発の際、其の熱度ピロクシ
ンに比し一倍三分の二の高熱なり。
局首尾より爆発せし日本砲は、之
と同一程度に爆発せし我砲は、之
敵に比し、而も況んや我砲は、之
或は全く爆発せざりしに於てなり。

大火災で、一同は熱氣と火烟の爲めに窒息しそうです。」

「可し！ ぢや誰れか呼び集めよう。して、消して見様ぢやないか。」

「其は私が自身致しますから、貴官は提督へ報告して下さい。或は何か指圖されるかも知れません。」

「だが！ 提督が何を命令し得られよう！……或は針路を變へる様に……分りませんよ！ ぢや、戦列から脱するのかね！……まさかそんな事が出来るか知らん？」

「いや、まア！ 兎に角、貴官は報告して下さい。」

彼を安堵さす爲めに、予は直に報告すべく約し、或はこれが最後の別離であるかの様に思ひなされ、分袖て再び司令塔へと赴いた。

果然豫期に違はなかつた。提督は予が報告に對して、

「マア！ 火を鎮めるばかりさ！ どうも此處からは、何と救済の手段もないからね。」

野の出づる
官なき司令

と、唯肩を緊縮た計りてあつた。

今や塔内に横はれる我勇士は、先刻見た時より更らに増して、既に二人にあらず、早くも戦死者のみにて、五六人に及んで居た。舵手斃れて代りなく、舵桿の前には、ウラジミルスキーが立つて居た。彼の顔面にも、血液は流下して居た。然し、其の美髯は逞し氣に上部へ跳ね上つて、彼れが常に士官室にて、「火砲の將來」に就きて議論を下して居た折と同様に、さも得意氣な形貌をなして居た。

司令塔を出て、予はレゾッキンの方へ赴き、司令官の答を彼に傳へ、尙ほ序に火災消防に助力せんと豫想した。然し、途中にて、再び日本艦隊を展望して、遂に艦橋に停止したのであつた。

七 火の海と鐵の風

彼我艦隊の接近

新針路に入りてより、十五分間ばかりの内に、日本艦隊は再び影しく前方へ進出した。而して今や三笠は全艦隊を卒ひて、我が前面を横断せんと、徐々に右方へ回首しつゝあつた。予は我艦隊も亦齊しく直ちに同一方向へ轉針を開始する事と期待して居たが、提督は猶ほしばらく舊針路を保持した。茲に於て、予は此の艦隊運動により、彼れが敵艦との距離を出來得るだけ短縮せんと欲せるものなるを判知した。事實、測程儀及び展望臺の破壊せる今、我が砲火は殆ど密接せる直射の外、用をなさぬ有様であれば、此の際の此の運動は、我軍の爲めには極めて好都合であつた。されど、一面よりは、我針路を横断せんと進出する敵を、其の爲すが儘に放置するは、是れ自ら其の縦射の下に立たざる可らざる事となるを以て、同じく無算定の戦法といはねばな

らぬ。予は一瞬千秋の思ひをなしつつ、光景如何にと觀望し、且つ次いで起るべき結果を期待して居た。此の刹那、予の腦裡には、「好機」否々逸すべからざる好機！との思が、電の如く閃いた。敵艦三笠は順次我針路に接近して來た。早や我が右翼六吋砲臺は、發射の準備を整へた。此の一瞬間、我艦は非常なる速度を以て右へ右へと傾斜した。予は直視するに堪へず、氣鎮めのため、一息ついて四圍を顧みだ。

デムチンスキーは、猶ほ其の部下と共に其の場を去らず、何物かを運搬して居た。||こは甲板上に並列しありたる四十七蜜米突薬莖の火災の爲め爆發して、味方を傷けることなき様、之を取片付け居たるものであつた。||予は彼れの方へ降りて、彼れに此の場の模様を問はんと思ひ居たるとき、恰も予の後に續き、タラップ上に艦長の妻が突然現はれたれば、予は彼れと一語すら交へる暇がなかつた。艦長は

其の頭部血汐にまみれ、足歩蹠跚として、且つ痙攣するかの如き其の手にて、頼りなく欄干を掴んで居た。此の刹那、極真近の何處にてか敵の砲弾は炸裂した。不幸此の衝動の爲めに、彼れは身體の平衡を失し、タラップの上より眞逆様に墜落した。幸に我等は目撃し居たれば直に彼れを抱き上げるを得たのである。

「何、何でもない！一寸した事だ！頭がぐらくした計りだよ！」と、例の早口にて、彼は殆んど意に介せざるが如く、愉快氣に一同を安堵せしめ、直ぐに起上り、三步に一息、五歩に一憩、強いて覺束なくも向ふへ歩行み出した。然し此の前欄帯所迄は尙三個のタラップあればと、彼れの核拒せしに拘らず、我等は兎も角彼れを擔架に横臥せしめた。

(11) 艦尾砲臺が破壊した！と、何れよりか急報は傳はつた。殆どこれと時を同うして、我等の上にも、奇怪なる響きは空氣を劈いて嗚り渡つ

た。巨大なる鐵板の炸裂する鋭き唸りは聞えて、烈しく艦首部へ倒潰し、其處に列べありし端艇を破壊して了つた。予等の頭上へも、何物かの焼け爛れたる碎片は、急震の如く降り來り、晦冥咫尺も辨ぜぬ黒煙は、予等を取り圍んだ。其の際、我等は何事の起りかを判断し能はざりしも、後に至り、此は前部砲臺の破碎倒潰せるものなることが分明した。

是より先、重々の味方の損害に、茫然自失せる信號手等は、密集して予等を誘ひ、恰も今倒潰せる艦首部の下へ廻避せんとせしが、予等は辛うじて之を強制して居たのであつたが、彼等は此の爲めに死地に入らずに済んだのであつた。危機一髪、此の事ありてより、彼等も稍反省したのであつた。

附註(11) 我艦尾砲臺の被撃は一たび艦橋以上高く飛揚し、後艦尾甲板に落下したりと。而して其の落下により如何なる損害を惹起せしかは不明なり。

時に午後二時三十分。

黒烟稍散じたるを以て、予は艦尾砲臺の如何になりしかを視んが爲め、艦樓へ赴かんと欲した。然し、上甲板に於ける艦尾と艦首部間の總べての交通路は、既に杜絶し居たれば、一旦上部砲臺に出て、それより將官室を横ぎつて、艦樓への直通路を行かんとしたるに、此處幕僚詰所の容易ならぬ火災に襲はれ居るを見れば更に引返したるに、急ぎタラップを下り來りつゝありたる司令部員クリジャンヌスキー大尉と出會うた。

「ヤー何處へ？」

「艦揮室へー艦が動かなくなつて終つた。」

と、彼れは駆け足にて立去つた。

嗚、コレも亦遂にやらたて了つたかと思ひつゝ、予は上部へ走せ上つた。

艦が利かなくつた

前艦橋へ馳せ上りたる刹那、予は咄嗟方位を定むることが出来なかつた。右舷前方に近く、殆ど我れと逆行して、我艦隊は進航しつゝあつた。殊に著しく予が記憶に刻まれしはナワリンである。同艦は此の際後方に隔離し居らざる可からざる筈であるのに、今や全速力を以て、艦首に逆巻く白浪を蹴立たてつゝ、本隊を追蹶して居つた。思ふに、是れ、必ずや、我がスワロフは、是れよりさき、機關の運轉猶ほ自由なりし際、業に己に舵機の緊着により、殆ど十六點の角度に轉回し居たりしものであつた。

我が艦隊の隊列は甚だ不整で、且つ著しく延長して居た。殊に第三艦隊に至りては、更に甚だしきものがあつた。尙ほ同隊は次第に風下に偏倚し居たる爲め、濼々たる我艦の黒烟に遮蔽されて、予は其の先頭艦を認め得なかつた。而して敵艦隊も亦、此際同一方向に在たのである。

隊列の甚だしく混亂

太陽及び風位によりて観測するに、我艦隊は殆ど南東の方向に進航しつゝありて、敵は我隊よりして北東の方位に在つたのである。若し萬一、スワロンにして戦列を脱せざる可らざる場合に於ては、ペードウキイ及びブキストルイ兩水雷逐艦は、迅速に其の艦側に接近し、提督及び其の幕僚全部を他の正整せる艦艇に移乗せしめざる可らざるとなつて居たのであるが、然も今予は如何程四方を展望するも、驅逐艦の影だに見るを得なかつた。信號せんにも、あゝ、何によりてぞなすべきか。我艦に於ける萬般の信號の手段は、既に疾く廢滅に歸し居るものを！

吾等が我艦の火災の黒煙の爲め、殆ど敵を望み得ざりし其の間に、彼れは精照善測、以て其の全砲火を此の半死の戦艦に集中して、最後の止を刺さずんば息まじとして居る。一彈來りて又一彈、猛烈なる掃射を續けて餘す所がなかつた。其の状宛も火と鐵との旋風に圍まれたるに勞弊して居る。殆ど同一處に停止して、徐々に推進器を以て、回頭しつゝ、尙も自己の豫定航路に引返し、本隊に續航せんとせる我がスワロンは、其の壞廢せる舷門を健氣に敵に向けて、尙も幾に無難に殘存せる——實は既に幾何もなき——砲口より、狂亂的に發射したのであつた。

實にや、此の瞬間の悲壯凄慘なる戦況は、我敵軍中の目撃者によりて、次の如く詳記されて居るのである。

「火煙に圍繞されつゝ、戦列を脱せしスワロンは、己が艦隊の後を逐はんとして、猶ほ其の運動を續けたりしも、やがて我が砲火の爲めに其の前橋及び兩烟突を失ひ、全艦炎々たる火炎に圍まれて了つた。何人も之れを一見して艦船と認識し難き程、其の損害は激しかつたのである。而して斯かる悲惨なる境遇にあるに拘らず、彼れは猶ほ旗艦としての自己の責務を知るか、スワロンは其の殘存せる砲

嗚呼を以て抗戦するを中止しなかつた。」
 尚ほ上村提督麾下艦隊行動の記録中よりの抜萃によれば、
 「我が兩艦隊の砲火により、火災を起せるスワロフは終に戦列より
 脱出した。其の上部一體には無数の弾孔を穿通されて、全艦火烟に
 囲まれて居つた。橋は折れ、烟突は前後引續きて倒潰し、彼れは全
 く進航の能力を失つて居つた。然るに戦闘線外に在りて、猶彼が依
 然其の残存せる火砲を以て、勇敢なる抵抗を續け、以て、其の職責
 に殉せしは、敵ながら天晴なる行爲として、我が將士の齎しく感
 嘆せし所であつた。」
 予は復茲に自己の感想に歸らん。
 殷々たる我が火砲の轟き、相變らず命中し來る敵彈の爆音、一切を
 焼き盡さざれば已まざらんとする焰の狂ひ、斯かる恐ろしき騒ぎと怖
 さとの裡に在りて、勿論予は、吾艦が何れの方角風上か又は風下か

へ轉回しつゝありやなど、少しも腦中に思索する餘裕がなかつた。
 而して程なく之れを覺知し得たときは、萬死の危険が予に迫つたとき
 であつた。艦が針路を轉せんとせし時、風は艦尾より連吹し來りたれ
 ば、炎々として焚燒し居れる軸部より、熾んに噴出する火焰と黒烟と
 は、予が此の時佇立せる前艦橋の方へと、轟地に迷り來つた。予は待
 ち焦がる、驅逐艦をのみ凝望し居たる爲め、刻々に逼迫し來れる一大
 危険に氣付かず居たのであつたが、呼今や既に遲し、紅蓮の熱火と
 黒烟の渦きとに、面部と兩手とはほてりにほてり、眼は眩きて正視す
 るに證なく、呼吸は塞りて口を開かんに由なし。呼寸前既に燒海爛池
 ! 予は如何にして此の危険を免れ出づべきか。我が前面前甲板の方へ
 は、一の通路も存在せざれば、予は唯火焰に面して突進する一方を有
 するのみであつた。此の一瞬間、予は艦橋より艦首十二吋砲塔へ跳下
 せんかと考へた。然し、其の飛躍の場所方位を選定するには、又不可

能であつた。絶體絶命！忽然として、予は何時の間にやら此の焦熱地獄を脱出して居つた。思ふに、多分、先刻より予が懸橋上に佇立せるを目撃し居たる兵員中の何者か予を曳出し呉れたるに非ざりしか。予は如何にして垂像の側の此の馴染深き上部砲臺へは達せしぞ。此等は一として予の記憶に存せず、且つ想像をも爲し能はざる所である。冷水に口を潤ほし、且つ眼を洗淨して休息し、漸やく我れに復りしとき、予は周囲を一瞥して、此處は意外に静謐であつたことに気が付いた。艦の守護神の鎮坐します大なる聖龕は、何等の損害もなく、猶ほ神々しく存して居た。さきに假懸帶所を壊滅したる狂暴なる第一彈の外、更に一彈として、此の神聖にして平和なる一室へ飛び入るものはなかつたのであつた。

守護神室の
平靜

此處には若干の兵員が立つて居つた。予は其内に、デムチンスキー部下の信號兵と思はるゝものを認めたるにより、彼れの模様を糾ねた

戦敗兵員の
心理状態の

るに、彼れも亦負傷して懸帶所に行つたとのことであつた。此等の人々は、何れも黙々として侍立し、外見些の不穩の態はなかつた。然し唯時々予の上に注ぐ彼等の一瞥は、微々たる何等かの警戒と恐怖の念とを有し、或る希望を攪亂されはせずやとの危疑ある様に仄見えた。是れ予が尙ほ彼等に、何等かの必要なる、重大なる、又は救助に赴け等の命を發するものと信じ、又は之れを信ぜんとして期待して居たのであらう。

然れども、予は今彼等をして爲さしむべき何物を令し得んや。さればとて、豈に亦此の際、下部へ降りて装甲板の下に、自己の運命を待つべき彼等に勸奨すべき。彼等は尙ほ自己の戦闘に堪ゆるものなる事を篤く信じて居たのである。……實にや、此等の残存せる者こそ、最も優秀なるものであつたのである。

而して予も亦、此の尊き彼等の信念を破壊し、以て其の最後の希望

尊き信念の
しめよに逝か

の火花を消滅すべき我艦の悲惨なる真情を語り、又は交戦の不可能にして萬事休矣と話し聞かすことの、如何にも惘然なる事の様に感じたのであつた。否々、予は之れを爲し能はぬのである。否、反つて、予は彼等を欺瞞して、其の火花を煽り立てんと欲したのである。儘よ！彼等をして、次の瞬間には、或は我等の上に勝利と歡喜と名譽との來らんと、極めて幸福なる信念の下に、其の息を引かしめよ！

俄然、中部六吋砲塔の後方に當り激しき火炎は起つた。我等は其處へ駆け附けて、熾んに炎焼しつゝある諸器具の搬出にかゝり、又或は之を消防し、或は巨大なる彈孔を通じて舷外へ投棄した。各員はさも非常に重大なる事件に従事しつゝあるかの如く、齊しく沈黙して、熱心に勞役した。斯くて我等は兎も角も此處の装具を消火し得たのであつた。然し我等と幕僚室との間を隔てたる紅熱せる薄き銅壁の彼方には、純乎正銘の火災が暴威を逞うし其の激しき鳴響は、時に交戦の我

地隔薄
一故
一熱

勇士が撞と計りに打倒れ、又は更に起上りて、下方へ通ずるタラップへと歩行し、又は匍匐する等の騒しき音響の間に於てさへ、手に取る如く聽えたのである。されど誰一人として、此の方を見返るものもなかつた。彼方も大切、此方も大切、其の火の大小によりて、何等其間に甲乙あるべき筈がないが爲めである。

八 艦隊幹部潰滅

五分、十分、十五分と時は進み行きしも、一向時間の経過を知らざりしが、不圖電光の如く躍然たる刹那の感想は、予が腦裏に閃めき、且つヒシと計りに胸に應へた。塔、塔には……塔は如何!?と思ひ出し、予は矢も楯もたまらず上方へと暴進した。怪しむべし、此の際の如き身體の疲労や壓しつけられしが如き情のよびへは跡方もなく散逸して、予が思想は驚くべく明快に活動し居たのである。予は一陣の煙の左舷の穿孔へ吹捲られつゝあるを見て、右舷の風上なるを直覺し、其の方へと赴いた。容易ならざる苦難を嘗め、めげ離れたる船蓋を経て、上甲板へ上り見たるに、今しがたデムチンスキと共に佇立し居たる其の場所を、辛うじて認め得たのである。此處は既に述べしが如く、後方よりは火焔みなぎれる帆具庫の、積みたる薪の倒れし如

司令塔は如何に!

艦橋右翼部の全部破壊

く雪崩うつて崩潰し、前部には碎片の堆積狼籍して、艦橋へのタラップは一として残つて居なかつた。又艦橋の右翼部は全部破壊され、加之、艦橋直下の一舷より、其の反対舷への通路さへ填塞され居たので何れへ出るも全く不可能であつた。予は再び下降し、此度は更に左側へ登らざる可らざるに立ち至つた。此處も尙帆具庫燃焼し、既に崩潰し初め居たりしと雖、右側に於けるが如き亂雑狼籍までには至らず、猶ほ幾分清潔であつた。六吋砲塔は全く整然たるが如く、猛烈なる砲撃を續け、又艦橋のタラップは完全なりしも、燃え残れる釣床の類は堆積重疊して居た。先程より、ひるむ事なく予の後に跟ひ、同じく上部へ進出せし五六名の兵員は、予の命により、營々として此等釣床を搬出し、之を甲板上の溜り水にて消火し居たりしが、此の際、俄然何處にてか、近く耳も聳せんばかりに、鋭き砲弾炸裂の響は轟き、幾百の弾片飛散して、四邊を衝撃したのである。

艦隊幹部潰滅

砲塔の破壊

多分六時砲臺へ……と斯く思ひつゝ、予は眼を細くし、且つ成るべく悪瓦斯を多く吸入せざる様、呼吸を抑止しつゝありしが……果然！砲煙消散すれば、上部の炸裂せる砲身の唯一門、何物の支持するなきかの如く、砲塔より凸出するのみにて装甲扉よりは砲塔長ダンチチ大尉現はれ出てた。

「ヤー！ 僕の處も萬事休すだ！ 一門は砲噴をさらはれ、今一つは砲架を破壊されるし……」

予は彼れの方へ接近し、親しく其の内を覗き見しに、二名の砲手は變に身體を屈折して打たふれ、他の一人は、廣く睜りたる眼にて彼方を凝視せる儘、其兩手にては、裂け潰えたる己が、脇腹を押へて座つて居た。掌砲長はさも心配らしく、且つ忙し氣なる容態にて、燃えつゝある何物かの布片を打ち消して居た。

「ヤー、貴官は、何處に甚麼して居られましたか？」

「イヤ！ 大變ですわね！ 僕は司令塔へ行きたいと思つてゐるんですが……」

「何しに？ 彼處には誰も居ませんよ！」

「甚麼？ 誰も居ない？」

「真箇、たつた今、ボグダーフ君が通つてね、何でも彼處は全部破壊！ 續いて失火！ 全員漸く身をもつて他へ立退いたそうて、彼れも出たときは、もう懸橋は破壊して居たから、思ひ切つて下へ飛び降りたら、僥倖に丁度僕の處へ出て、マア、漸く助かつたと、彼れは話して居りました。」

「提督は何處だらう？」

此の折再び、極めて真近に、耳を劈くが如き爆聲轟きて、何物とも知らず、餘り激しからぬ、痛さも左程覺えない位、予の右足を後方より打撲したれば、予は遂に撞と計りに轉倒した。此の時、予の部下は

司令塔には誰も居ません

提督は何處だらう

一人として此處に残つて居るものはなかつたが、彼等も或は負傷せしか、將た又單に何れへか降り行きしか。

「擔架はないか。」

と、ダンチチの不安らしき叫びを耳にして、予は再び彼れの方へ向き直つた。

「擔架を何するんだ？ 君！」

「貴官を……御乗せ……血が流れて居ますから……。」

予は始めて氣がついた。成程、右足よりは血が甲板をつたつて、混々として流れて居る。然し予が足は、猶ほ強く確固と立ち得るのであつた。

維時午後三時。

「貴官は歩くことが出来ますか。御待ちなさい！ 今介添をあげますから。」

予の大負傷

と、ダンチチ君は心配して呉れる。

然し、予は、己に介添とは何事だと、腹立たしく、今は我身に何事の起りしかも辨知せず、活潑にタラップを傳へて降りかゝつた。

遂に、開戦の劈頭、一小碎片の予が腰部に命中したるときは、甚だしく疼痛を感じしに、今回の分は何等の感覺もなかつた。

其の後、予は病院に收容されたときも、擔架で運搬されたのであるから、或は由々しき大傷には非ずやと、始めて氣がついたのであつたが、戦闘中には、何等の呻吟悲鳴をも發しなかつたのであつた。

實に、總て吾人の感覺は、等しく外部よりの感觸を受納するにも、最も嚴格なる意義にて、時の境遇によりて差別を生ずるものであると共に、又先入主となるものにて、往々自己の最初の言辭に拘泥して、假令生理的には疼痛激甚なるも、精神的には左程痛みを感じず、又は恐怖に堪へざるべき際にありながら、全然恐怖を感じることが多い

戦争と感覺の心理

のである。

上下の兩砲臺をも過ぎて、予は本綑帶所のありし下甲板—裝甲板の下にありし—へと降りしが、我にもあらず、又不意に引返して、タラツプの方へと赴いた。

(12) 自分も負傷者となつて、始めて此處に来て見れば、これは又實に酸鼻すべき光景であつた。下甲板は負傷者を以て充滿され、彼等不幸の負傷者は、或は起立し、或は跪座し、其の横臥せるものは、或者は前より準備されたる藁蒲團の上に、或者は急に敷伸べたる帆布の上に、又は擔架にて運ばれたるまゝに、甚しきは唯單に板敷の上に敷物もなく倒れて居たものもあるが、戰場に於いては、亢奮し緊張せる心情に何等の感觸もなかつたものが、此處に於いては、既に彼等は悉く烈しき苦痛を覺えて居たのである。

附註(12) 多分此處に居たる彼等負傷者のみにても、日本全艦隊の其れに比して多からん。

酸鼻すべき負傷者の光景

彼等の苦しき嘆息の錯雜せる反響と、恰も半ば絞殺にあつた様な呻吟の惱みとは、何かの酸味に醗酵したやうな、厭な甘つたるき嘔吐を催すが如き、臭氣ある鬱陶しき空氣の中に漲つて居た。釣下りたる電燈の光も臘氣に、此の漂ひ濁る野團氣を通して、辛じて透射するのであつた。遙か彼方の前面には、處々に紅き斑點の附着せる白衣を着けたる、忙しげなる人影が動いて居た。而して此處に集りし一同は、何れも彼の方へと急ぎ、或は痛手に重き足を曳いた、此等不具となれる人々の總べては、彼等より何等かの救助を待つて居るのである。八方より蟬集せし此等一同の心裡に齊しく共通一貫せるものは唯一の救療あるのみであつて、此の苦惱に對する慰安、靈妙なる治療に向つてはよし即死の代償を拂ふとも……との彼等の願望なる事は明瞭であつた。予は他人を前方へ突き退けて進み行くを欲せざりければ、此處に在りて自己の順番を待つことなく、急速にタラツプを傳ひて下部砲臺へ

提督以下の
艦隊幹部の
負傷

と行つたが、此處にて端なく、參謀長と出遇した。彼れの頭部は、幾重となく糊帶を巻きつけて居た。三個の碎片が彼れの後頭部に命中したとか。種々質問の結果、下の如き状況を明かにすることが出来た。前に操舵機損傷し、スワロフが戦列より脱すると同時に、司令塔内にては、提督とウラジミルスキーとが頭部に負傷した。後者は直ちに糊帶所へ赴きし爲め、其の職務は他のものをして交代せしめ、茲に本艦の指揮は三席大尉ボグダーフ君が之に當る事となつた。此際提督は、機關を修正して本艦隊の後を追ふべく命じたれども、前艦橋への敵砲彈の命中は益々頻繁となり、其の破片は集團をなして司令塔の被蓋の下より飛び來り、其の内部にありし總ての器具を廢滅に歸し、羅針儀をも破壊したが、幸に電信機一臺と、他に傳話管の全存したのであつた。今や火は其の艦橋にも發した。彈片の飛來を防禦せんと装置しありし防彈障の釣床と、司令塔背後の小さな航海士

三席大尉の
艦長代理の

司令部の轉
徙

室とは、猛然と發火して、炎々たる火焰凄じく、熱氣堪へ難く、殊に濃厚なる黒烟は黑白も分かず四邊を蔽ひ、羅針儀の既に廢滅せし今は何れの方位へ針路を定めんも、全然不可能となつたのである。茲に於いて、司令部は觀測塔へ移轉するを必要とし、且つ各人は塔を出て何れか他の最も良く四圍を展望し得る處へ、徙らなければならぬこととなつた。此の際司令塔には、提督、參謀長、及び旗艦航海長。三人とも總べて負傷し居れり。其の他、不思議にも、今まで身に一創をもなきボグダーフ大尉、シーキン少尉と他に一人とが在つた。最初、司令塔より艦橋の左端へと、ボグダーフ大尉は出て行つた。火焰熾んに燃えあがれる釣床を突き除けつゝ、彼れは勇敢に前面へ突進せしが、やがて烟の裡に姿を没して、何處へか消え去つた。彼れに次いで出てたる參謀長は、艦橋の右側へと足を向けた。しかし此處は既に全然破壊して居て、トラップも存せず、行くべき路とてあらざりしも、唯だ

艦隊幹部潰滅

負傷せる提督の態度

一つ下方観測哨への通路残り居るを發見せしより、甲板上に横たはれる戦死者を辛うじて脇へ抱へ、直ちに装甲管の上部へ格子形の鎗蓋を立て掛けて、之によりて観測哨所へと下降した。提督は、頭部、背部及び右足等に、微少な破片は算入せず、負傷し居たるに拘らず、此の時までは猶ほ元氣旺盛であつた。哨所へ達してより、參謀長は更に綱帶所へ赴いたが、提督は輕傷の航海長フイリッボックスキー機關少佐を此處へ残し置き、若し新命令なき限り、舊針路により航進を繼續すべく命じつゝ、假令觀戰するのみにしても、何處が最も適當なるかを探さんとて出て行つた。

又もや提督の痛傷

上甲板は恰も災後の廢墟に勢驕たる有様であれば、提督は上部砲臺以往、艦備付の聖像と同一點に通過することが出来ず、彼れは此處より、左舷中部六吋砲臺へ通り抜けんと試みたが、是れ亦不成功に終り更らに轉じて右舷に赴いた、此の移動の際、提督は又もや一傷を蒙つた。今度のは非常に俊酷なる疼痛を感ぜしむる様子であつて、破片は左足の踵の近くに命中し、神経系を切斷したのであつた。脚の麻痺したる如く見えたるより、直様提督を砲塔内へ搬入して、其處にありたる何物かの箱の上へ座せしめたが、彼は直に、「何故砲臺は發射しないか」と尋し位、相變らず氣力は確固として居て、傍へ近接し來れるクリジャンノウスキーへ、掌砲長を捜ね、且砲卒を編成して、直に砲火を開くべく命じた。然し、砲塔は已に損傷して、又回轉の用をなさざることゝ明であつた。かくて、今しがたクリジャンノウスキーの舵室より歸り來りしにより、操舵機は纔かに修整されしも、該機へ通ずる三條の導線は、全部破碎せる事も亦明白となつた。然し、傳話管は全然何等の役に立たず、電氣指示器は破損し、又電話は通せず、爲に即ち所より操舵機への命令を傳達するには何等講ずべき手段も不可能であつた。因て已むを得ず哨所より、推進器により操縱する事となつた。

傳達機關の皆無

予は戰闘状況を年代記式に、時間順を以て連繫する口語體に記述した。無論予が接受せし情報は、決して斯かる機式にてはなく、隨時各種の人々により得たる零碎のものであつた。忽然身邊に砲彈の爆裂せしときの驚愕の嘆聲、勞務中に進む斷片的の注意の一言、又は樓々千萬言にも勝りたる身振りに伴ふ金言警句等、此等筆舌に盡し難き言辭の真相を傳へんと試みたるも、これは全然不可能なるを覺つた。然らば、其の神經の絶對至高に緊張せる此の瞬間の何等かの歡聲、又は自己の胸臆を十二分に委曲明快に吐露する千語萬句にも代るべき手様身振、此等を記述せんにも、其の紙上に描かれたるものは、亦以て何等の印象をも與へ難き所であらう。

實に、彼の折の時間は、唯是れ一瞬の刹那と見へた。

實に、彼の折の事は、話しするにも耐へない程であつた。

下部砲臺にては、火災といふ程の火災は今猶ほあらざりし。然し、

到底眞情を傳へ難し

日むを得ざる砲丸の投

火は上部より船口に離落せる煙突の下口、又は中甲板の孔口を傳うて間斷なく燃え立てる碎片はなだれ落ちて、此處にも彼處にも小火は起つた。石炭吹の團ひもて防衛しありし戰事用無線電信所の側にも、何時しか猛烈に燃え始めた。送彈用レール破損の爲め、車輛に積上げて此の處にありたる四十七蜜米突砲彈をば、墜る猛火は威嚇し來りたれば、遂に其一部分は舷外へ投棄するに至つた。然し各員の努力は兎も角も火勢の暴虐を制御する事に成功した。火災は無論音に自然の順路によりてのみ擴延せしに非ずして、艦上に連續集注したる敵砲彈も與つて之を補助したのである。人員の損傷は依然中止せず、予は又も左肩胛部に盲貫傷を受け、尙ほ二個の小破片は脇腹へ命中した。

九 艦隊の四分五裂

艦隊の轉
徒

旗艦スワロンが戦列を脱する場合に於けるペードウキ及びブキスト
ロキの兩驅逐艦の任務につきては、予の既に記せし所である。而して
此際の混亂を避けん爲めには、未だ將旗の轉掲行はれず、又は指揮權
委任の信號爲されざる間と雖も、落伍艦に續航せる二番艦に於いて、
必らず艦隊を嚮導せなければならぬのであつた。

愚なる明白
の疑問

スワロン等の傍に何れの驅逐艦も近接しあらざりしことを、他の艦
船の總てが一も之れを認むること能はざりしか、又は横なく、烟突な
く、艦上一切の装置の損滅燃焼せる此の敗殘の一艦より、何等かの信
號あるべしと期待するの無益なることが、未だ一般に周知されざりし
か。其の結果、事實上の指揮權は、自然既に故參順により、次位のも
のに繼承されしものと見做す能はざりしや。予は今此等當面の問題の

スワロフに
代るアレク
サンドル

解決をなさざるべし。然し兎も角、アレクサンドルは、換言すれば其
の艦長ブフォーストフ大佐は、豫定の命令及び自己の義務を的確に遂
行した。スワロフの戦列より脱せし後、何人よりも何等の新なる指令
を受けせざりしも、彼れは自ら先頭艦となりて全艦隊を嚮導しつゝ、
戦闘を繼續したのである。

アレクサンドルはスワロフの傍を南東に向ひて通過せる後、それよ
りやがて廿分ばかりも、逐次南方に偏針しつゝ進行した。是れ敵をし
て我が針路の遮断に慕進せしめざらんとてであつた。

此の際最初の成功に勵まされたる日本艦隊は、更に自己の理想全
力を擧げて先頭艦を攻撃する――を實行せんことに伋々として、遂に其
方に心を奪はれ居たりしか、アレクサンドルは、彼れの後尾より、更
らに新航路を北東に開き得し位、敵は甚しく前方へ馳せ抜けて居たの
であつた。

アレクサンドルは、敵の此の情勢を視て、好機乗ずべしとなし、更に事誼によりては、全力を擧げて其の後衛になだれ込まんと臍を堅め敵の縦射を冒しつゝ、急遽北方へ回頭した。

此の回轉の時刻に就ては、日本軍の報告には一は午後二時四十分、他は同二時五十分と兩様に記載されて居る。是れ我がオスラービヤの滅亡せしと同時にして、同艦は上村提督麾下の大装甲巡洋艦隊よりの集中砲彈の下に、スワロフよりも以前に戦列を脱したものである。予自身は、後者の時間最も事實に近からんかと思ふ。若し此の際敵艦隊にして、彼れが戦鬪の初めになしたるが如く、「逐次回頭」を行ひたらば、アレクサンドルの此の運動は、無論成功を收め得たであらうが、事態緊急なる此の場の事として、東郷も今回は一齋回頭と決心して、左十六點に回轉すべく部下各艦に令した。此の回轉は餘り成功とは行かなかつた様に見える。即ち第一艦隊三笠、敷島、富士、朝日、春日

オスラービヤ
滅亡

東郷麾下の
一齋回頭

及び日進は、之れを成規の通り遂行せしも、其の巡洋艦隊を率ひし上村提督は、恰も此の信號を辨別せざりしもの、如く、舊航路のまま我が艦隊とは既に反航に針路を保ち、味方戦艦隊の射撃を障害するまでに、其の側を近く馳せ過ぎて、而して後回轉に可なる廣濶なる箇所に至り、漸やく逐次回轉を行ひ、斯くて戦艦隊に追蹶し得て、其れと單縦陣に入つたのである。

日本艦隊の
一時混亂

斯くの如く、日本艦隊は一時混亂の状態に陥り、其の爲めには、日本軍は多大の代價を拂つたであらう。然し、此の際、既に沈淪に瀕せし我軍の情勢に在りては、遺憾ながら絶好の此の機会を捉へて、戦情を我れの利益にもりかへすことが出来なかつた。敵は自己の高速力を利して、音に取亂したる其の序列を修整したるのみならず、更にアレクサンドルの針路を遮断せんと、之れを南方に壓迫しつゝ突進するに至つた。

船狀をなす
る我々の倅

我等は右側砲門よりアレクサンドルの運動を凝視した。同艦は、此際我艦の殆ど正横面に在りて正面に進航し、爾餘の諸艦亦之に續いた。距離は漸次に短縮し、其潰滅せる舷側、破壊せる艦橋、猛烈に燃焼せる帆橋具や甲板上の室房やなど、我等の双眼鏡に歴然と映寫したのである。然し、尙ほ烟突と艦橋とは残存して居た。二番艦としては、矢張り熾んに燃焼しつつあるボロデーが進んだ、此の時日本艦隊は既に前面に進出し、前路を遮断せんと針路を回轉せしが、我艦隊は右方より之に接近した。|| スワロフよりは彼等を左方に見た。|| 敵は我艦へも、又は我が艦上を飛過しても、盛んに砲撃した。我が前部十二吋砲塔|| 此時迄残存せる唯一の || 雨敵と落下する敵弾に面もふらず、猛烈に此の交戦に参加して活動した。予は又も左足に負傷せしも、唯長靴の截裂せるに無念の一瞥を與へたるのみにて、嘆息を秘しては、此の場の結着如何にと氣を張り詰めた。

五裂の四分

予の實見せし所によれば、日本軍の全砲火はアレクサンドルに集中され居たるが如く、次第に火焰と濃烟とに全部圍繞され、艦の四邊は海水沸きかへるが如く、巨大なる水柱は無數に奔騰して居た。其の内彼我兩艦隊は益々接近して、距離は十ヶ一ブルを出でざるべく、一彈又一彈と、彈丸の行列かの如く連續して來り、前艦橋及び左翼六吋砲塔へ命中するの狀、手に取如く見え居たりしが、速かにアレクサンドルは右方に逆轉して遂に戦列を脱した。之れに續いて、ボロデー、アリヨール其他の諸艦も亦倉皇として四分五裂し、單縦陣形を保持することすら能はず、順次とも一齊ともつかず、回轉したのであつた。

「敵に背を見せるんだな！ 戦場を見棄てるんだな！ 咄！ 精力が足らなかつた？」

附註 (13) 此の回轉が、既定しありしものなりしか、將た又艦橋の損傷に因る偶發的のものなるかは遂に永久の秘密となり終れり。

と、断片的の嘆聲は、兵員の間に湧き起つた。

無論、斯かる單純なる兵員等は、始め味方の諸艦が、我がスワロフの方へ近づきつゝあるを見て、是れ我れを救援せん爲に來りつゝあるものと思ひ居たのであつた。されば、彼等が、今にして此の迷夢より覺醒するは、實に堪難き苦惱であつたのである。然し、此の間の經過の真相を知悉せるものゝ苦痛は、更らに――甚しきものがあつた。

惨酷なる記念！取り去ることの出来ない聯想！明瞭に、精密に、我が眼の前に現れて來る。そは、過ぐる八月十日の海戦、我が艦隊が、時の司令官ウフトムスキ―公爵の信號により、斯くも倉皇に、斯かる混亂せる状態にて、北西方へと脱出せし、思ひだすだに戰慄すべき一の情景を、今復練りかへすのであつた。

「精力足らざるか！」

是れ何たる恐ろしき命數的なる言句であらう。予は内心に於てさへ

惨酷なる記

精力に皆足らざる也

此の語を言ふことを敢てせざりしも、予が腦裡には此の聲絶えず響きつゝ、猛火の黒烟の中にも、壊裂せる舷側の面にも、又顔容蒼白意氣銷沈せる我が艦員の面貌にも、火の如き文字もて、あり／＼と誌されありし如く見えただのである。予が隣りにはボグダノフ君が立つて居つた。我等二人は相顧みて而して無言の裡互に其の胸中を了解せし様と思はれた。彼は何等か予に語りかけんと欲するものゝ如く見えしが、何故か忽ち思ひ止まり、旋て予の方を振り向きつ、彼れは態と平靜なる口調を以て語り出した。

「マア！僕等の船も、左へ可なり傾斜してますね！」

「ハア、八度位も傾きましたかな。」

と、予も平然と之れに和し、尙ほ時計と筆記帳とを取り出して、「午後三時廿五分、左側へ激しき傾斜。上部砲台に於て大火災。」と書きつけたのである。

敵は自ら絶
望を言ふ能
はざるか

嗚呼此一戦

一三六

我等兩人の間に、否自分自らをも欺きて、我等は何事を隠匿せんとはせしぞ？ 何故にボグダーフは、高聲に談り出す事を決断し得なかつたであらう！ 之れと同じく、予も亦自己の備忘録に「敗北」てふ不愉快なる言句を記入するを敢てしなかつたであらう？ 是れ或は吾人の胸臆には、尙ほ此際に至りても何等かの偶發的事變により、全然此の場の光景を顛倒せしむる如き、萬に一を保し難き奇蹟もあれかしと臆る希望の潜みつゝありしによるにはあらざるか？……とも考へた。予猶ほ未だ自ら之れを解せず。

最早や運動
のみに
あらず

アレクサンドルの回轉後日本艦隊も同じく一齊に十六點に回頭せしが、此度の運動は見事に奏功した。尤も我が運既に盡きたる此の際のことであれば、是れ最早や戦闘に非ずして、唯單なる艦隊運動に過ぎなかつたのである。

反航行進しつゝ、日本艦隊は我艦の前首真近く通過したれば、スワ

ロフよりは、恰も彼等の縦陣に向つて、丁字形に進行するが如き觀があつた。此の際スワロフは、只單に兩舷器によりて操縦するのみにて何物の用ふべきものなければ、無論意の如く進むべくもあらず、又哨所内の羅針儀にては、何れの方面に出る事も能はざりければ、我等は殆ど同一點に在りて、宛も迷見の如く、たゞ右に、左にと旋轉するのみであつた。

最後の砲塔
破壊

側近く通過したる敵艦隊は、勿論此の沈没するを欲せざる頑固なる戦艦に向つて、砲火を集中するの機会を逸しなかつた。遂に我が最後の砲塔——艦首部十二叫砲塔——は破壊された様であつた。

日本軍の報告に依れば、之と同時に、我艦側へ水雷艇を放ち、接近して攻撃せしむ、遂に奏功せざりしと記してある。然し予は此等水雷艇を見なかつた。

水雷艇を
來る

敵の一弾は、又我左舷下部砲臺の艦首より第四位に在る七十五密米

艦隊の四分五裂

一三七

残存兵員の
畏怖

突砲に命中し、該砲を奪去したる上。装甲板を穿貫した。艦は著しく左舷へ傾斜せし結果、破壊せし砲門より澎湃として寄せ来る海水は、元の入口へ溯流せんとせず、却つて此の弾孔を経て下甲板へ流下し此處に容易ならぬ危険を惹起したのである。ボグダノフは第一番に之に着目し、我等は茲に袋囊を以て、手當り次第に、滔々たる潮水の侵入し来る破孔を防禦すべく、胸牆に似たるものを堆積し初めた。

予は敢て茲に「我等」と云ふ。如何となれば、此の際砲臺に残存せる少數の艦員は、上司の如何なる命令にも之に應ずべき氣力なく、此等群集は、宛然與神したるかの如く、到る所の隅々に密着畏伏し居たれば、之を伴ひ来るには、殆ど暴力を用ひん計りにて、漸く拉し得たのであつた。輕易の些事に至るまでも、己れ先づ手を下して、之を示さざる可からざる状態であつた。此際何れよりか此の場へ來れる旗艦水雷長、ンオンチエフ大尉、及びデムチンスキーとは、共に我等の間

突然起るウ
の祝聲

に投じたるも、後者は双手の首部を纏帶し居たる爲め、唯種々の助言を與へて加勢するに過ぎなかつた。

午後三時四十分、砲臺の内に、續いて全艦に盛大なる祝賀のウラーの聲は傳播した。最初何處より、何人が之を發唱せしか、誰に、又何物が、彼に夢想されしかは、全く不明なりしも、人々の間には、何處にてか日本軍艦の沈没するを見し様に取沙汰され、他のものは、しかも其の軍艦は、一隻に非ずして二隻なりしとさへ確言した。兎も角も此の歡聲は、さきにアレキサンドルの慘狀及び艦隊の潰敗を觀望し、彌が上に萎縮沮喪したる味方の士氣を振起して、意外にも兵士をして銳氣満々たるものとならしめたのである。されば、今の今まで、彼方此方の隅々に盤伏し、如何なる命令、要請、甚しきは上官の願望にさへ、風馬牛相及ばず、盲となり聾となり居たりし此等兵員も、自ら進んで士官等の方へ走せ來りては、「何處へ參りますか？」「何を致しますか？」

一瞬の空元
氣

と尋ね求め、「歩け!!」モット、愉快らしく歩け!!「怖がるナ!」「是れは六吋弾!!」「大皮靴は行つちやつたい!!」などと、諧謔的なる叫聲さへ其の裡より聞え出した。

十 萬事休す矣

出羽艦隊の
來襲

主力艦隊の遠く彼方へ離れ去りし後には出羽提督の輕裝巡洋艦のみ來りて我等を射撃せしが、前者に比較すれば、此は殆ど無感覺ともいふべきであつた。勿論、此も艦隊の我等に非常の損害を與へた。併し前者の戰慄すべき猛烈なりしを回想すれば、斯く言はるべきである。

此の甚しからざるにあらず、彼れの甚しきである。
頭部へ受けし第二創を纏帶せし後、下甲板に殘留せし艦長ウ、ウ、ナグナイユース氏は、此の瞬間を傍觀するに堪へず、軍醫の制止も聞かばこそ、

「オイ、者共己に續け!! 火災へ! 火災へ!! 何としても火だけは制止せねばならぬッ!」

と、叫びつゝ、タラップを傳ひて砲臺へと轟進した。此際下甲板に在

萬事休す矣

りし各種非戦闘員——衛生部員——と、既に繙帯を終りたる輕傷者等は、何れも彼の後へと群り進んだ。

肉片をも止
めぬ艦長の
惨死

狂暴なる砲弾は繪蓋に命中した。程経て砲烟飛散せし時は、早や、タラップも、艦長も、又は彼を圍繞せし幾多勇士も、……一つとして影をも留めなかつた。我等は爆發の印象より我に蘇りて、直ちに救助に馳せつけたれど、救助すべき人としては更になく、唯吾等の眼前に、何物かの堆積累々として横はり居りしが、其下より、尙ほ此の世の名残あらんかと思えし一人を辛くも曳出した。

鐵製の經帷
子の經帷

堆積をかきわくるに非常なる困難を勞し、八方手を盡して漸やく索め得たる肩章や又は長靴やを、彼れ此れと詮議せしも、遂に艦長を發見し得なかつた。稍離れたる片側に、鐵製タラップの環狀に彎曲せるが横はりしが、何人の死屍ぞ、恰も之に纏卷されしが如きものがあつた。其の着せる夏服により、其の士官なるだけは明かなりしも、頭部

士氣の旺盛

の大半奪ひ去られ居たれば、誰れとも識別することが出来なかつた。漸やくにして、其の重に亞麻色の顯帯及び其他の特徴により、其のダッチ大尉なることを決定し得た。次いで、纏ひつけるタラップを引伸し、幾たびも力を極めて死屍を脱せしめんと試みしも、終に不成功に終り、彼れは鐵製の經帷子を纏ひたるまゝ、長く甲板上に横はり残つたのである。

斯かる血腥き一場の挿話——他に幾百とある中の——も、聊かも我艦將士の士氣を冷却せしめず、依然として其の旺盛を保つて居た。尙ほ此後人手不足の爲め、屢々火災を發生せしめ居たる下部砲臺へも、群集は現れ出て、勞役力作、却々の活氣を帯びて居た。艦付士官中よりも、ボグダノフの外に、年壯氣鋭の偉丈夫、水雷部員ウキル・ボン大尉も來り投じた。夏服の鉛を脱して、彼れは四角八面に奮闘し、眞魁に諸員の先頭となりて驀進し、「ヤツつける！」「ひけをとるな！」との

彼れの常用語たる叫聲は、濼々たる焔煙裡に高く響きて、根限り努力せる諸員の勢を倍加して居る様に見えた。

予が觀察の記事は、前に進む程、追々より短少に、より多く断片的である。

左の腹部と手とに負傷せるゾートフは、見るから歩行に堪へざるが如くにして、一寸の間予が方に來り、ニコライ、イワノイウイチニコライ、イワノイウチ、ボグダーフは、我艦の三席大尉なりが艦の指揮を執つたと物語りて、又急ぎ何れへか立去つた。下甲板より、少尉ツェンテリイ公爵は仰むいて、

「如何な模様です？」
と尋ねた。

此方にも
彼方にも

「無論、此方へ命中れば、彼方にも、ひしと飛び込むと云ふ風で、交互に應酬してゐるのだが、如何様に結末がつくか未だ一向不明。」と

敵水雷艇の
襲來

答へて置いた。之れを聞きながら稍安堵したる如く、彼れはタラップを傳うて装甲甲板の下へと急いだ。二度目の重傷を負ひたるカザケイウイチ之に續いて軍樂長デッシン老人を、擔架の上に運搬して予の傍を過ぎた。何處よりか偶然予が従卒マツロソフが現はれ來りて、殆ど強力に訴へても予を綱帶所へ伴ひ行かんとする。予は、何を措きても、先づ初めに艦室より巻煙草を持ち來れと命じて、辛くも之を避けた。彼れは活潑に、「ハアイ」と叫んで駆け去つた。噫！妾ぞ知らん、これ彼との永別なりしならんとは。此後復たび我等は相逢はなかつた。

「各員砲へ就け!!! 水雷艇が接近するぞ!!! 各、砲へ就け!!!」
との叫喚は、突然として甲板上に響き渡つた。

「各砲へ就け!」と。言、何を容易なる。

下部砲臺に於ける全部十二門の七十五蜜米突砲中、損傷せざるは唯右舷の一門あるのみである。されど、其れさへ此の度は發射するに至

らなかつた。

敵水雷艇の數隻は、警戒最も嚴に、我が艦部より近接した。日本側の報告にては、午後四時二十分なりしとせり。艦部分隊士官室の後部には、尙ほ七十五密米突砲の一門、無難に残り居りたれば、將校悉く戦死の後、分隊の指揮を執り居たる義勇兵マクシモフは、水雷艇に向つて頻繁なる砲火を開いた。彼等も、此の奇怪なる、殆んど潰滅したる破艦の尙ほも齒を露出して飛びかゝらんず狀を見てより好ま機を待たんと引返したのであつた。

此の一齣は、適予をして、如何なる兵力もて、我等は敵の水雷攻撃を處置せざる可からざるか、即ち換言すれば如何なる程度にまで、孤立無援の吾人は、自ら其の力を待む可きかの概念を、十分に解明せしめたのであつた。

下部砲臺には、極めて雑多なる各種専門の兵員約五十名計りも居た

水雷攻撃に
力對する防禦に

りしが、之れを點檢して其内に二人の掌砲長を得、之れをして砲と云ふ砲は凡て之を索めしめたるに、唯一門の完全無缺なるを發見したる外、他に尙ほ一門、其の破損の箇所をば、他の全く戦列より除去したる十門中より、其の相當部分を蒐集交換して、修覆したる上にて用ふるべしと判定せしものありしと、外艦部分隊のマクシモフの處に、今大に功を成したる一門あるのみである。

下部砲臺の點檢を終りて、予は艦首分隊へ行かんと、上部砲臺へ上つた。|| 此際各砲塔中、既に一として活動せるものあらざりき。|| 此處に至りて予を吃驚せしめしは、日本砲彈の効力の、極めて明瞭に其特性を顯はしたる光景であつた。既に燃焼すべきものは、總べて燃え盡したることなれば、火災は最早や發生せざりしも、七十五密米突砲の全部四門は、砲架と共に奪ひ去られて居た。予は精密に、砲身と砲架との何れにも、敵彈の直接打撃、又は其破片の大塊に依る痕跡あら

敵彈爆發力
明瞭なる

ざるかを率めた。されど、さるものは一もあるなく、斯かる恐ろしき破壊は、砲弾の打撃力に因りたるものには非らずして、實に其の爆烈の力に因りて生じたるものなることは明瞭であつた。然らば何物の爆烈？ 勿論分隊には、水雷もビロクシーンも保管しあるにあらざれば、言ふまでもなく、是れ即ち敵艦自らが、水雷にも均しき猛烈なる爆發をなしたるものである。

讀者諸君の中には、或は予が多分此の潰滅せる艦内を往復して、其損害を視察し、或は之れを評價しつゝある予の遊歩的行動を奇怪に思はるゝものもあらう。然り、これは奇妙であつた。若し欲し給はば、予は更に告げん。

「餘り酷烈で、もう恐ろしくも何ともない」とは、これ此際、全艦員の間に漲りし非尋常の心理状態であつた。萬事休せりとは、既に何人にも瞭然分り切つた事實であつた。今は早や、過去もなく、未來も

非尋常の心理状態

なく、残るは唯一の現在の瞬間のみであつて、苦惱に満たる堪へがたき沈思に陥らざらん爲めには、何等かの動作に依りて、此の瞬間を充塞せんとすの、耐へ難き希望のみであつた。

更に下部砲臺へ降りたる予は、艦部分隊を視察せんと行きつゝある途中にて、偶然クルセリに出會うた。

海軍少尉補ウエルネル、フオン、クルセリは、クールランドの産にして、スワロフ號士官室一同の氣に入り者である。彼れは殆ど延焼時代から、各商船に乘組みて航海し居たる由にて、殆ど全歐洲の國語を操り得ると共に、又等しく何れの語にも拙劣なる方である。曾て士官室にて、此事に就き冷評したる事ありし時、彼れは極めて眞面目に、「然し僕は總ての内、矢張り獨逸語が一番好い様です」と答へたことがあつた。年にも似ず、世の酸いも甘いも噛み分けたる彼れは、未だ嘗て一度として胸懷の平衡を失したることなく、如何なる事情も彼れ

風輕なる一少尉補

萬事休す矣

の人柄の善良、懐かしい様な愉快なる微笑を迎ゆるを妨げることは出来なかつた。

「されば、今も例の通り、彼れは遠方より予に頭を下げ、樂し氣に、

「どうです、あなた。甚麽様な事を爲てお居てです、」

と問うたから、予は

「仕事の清算をしてる處だよ。」

と答へた。

「なあゝる程、全くそうですな！然し、まア御覽なさい。私は、ほん少しも、怪我なんか致しませんでした。あなたは何、やられました様ですな！」

「やられたよ！」

「何處へ貴官は御行てです？」

「艦部分隊を視察しに。而して皆喫んで盡つたから、自室に行つて、

煙草を取つて來やうと思つて。」

「自室へ？」

と、クルセリは皮肉な笑ひを見せて、

「私は今彼處から來たんですが、……兎も角行きませう。私も送つて参りますよ。」

事實、彼れは何れの通路が自由なるかを知り居たれば、予の爲めには有益なる案内者であつた。士官室まで迎り付きたる予は、茫然自失躊躇して其處に停止した。予の船室と、其隣に連接した兩室とは、跡もなく壊れて其の代りとして、其處に穿通したる巨大なる彈孔の残るのみである。クルセリは己の戯言が當つたのを喜んで、愉快氣に高笑して居る。予は腹立たし氣げに忽ち手を打振つて、元と來し方へと立去つた。クルセリは砲臺の處にて予に追付き、予に葉巻を振舞つて呉た。

尙ほも火災
との奮闘

下部砲臺に於ける總ての燃出して居たものは、既に鎮滅された。此の成効に勇み立ちたる我等は、更に上部に、此れと等しい鏡俵を試みんと決心した。二人の船艙係は、何處よりか全然新しさ、未だ仕上げの済まぬ蛇管を取出して來た。其一端を針鐵にて防火用水管へ結びつけ、他の一端へは、同一方法にて防火用パイプを取り付けた。

「Sや、こりや偉者だ！」

と、ボグタノフは彼等を喜稱した。

蛇管の装置も出來、濡れたる袋にて火除けをなし、先づ聖堂の船口を経て入り込み、此處に燃焼して居た綑帶所用器具に水を注ぎかけ、遂に上部砲臺へと全く昇り終つた。兵員は調子に乗つて銳意勞作したれば、さしも猖獗なりし聖堂の側の火災は屏息された。其れに代りて中部六吋砲塔の後方に、一火燭が暴威を逞しうして居るの發見した。全員は直に其處へ出動した。然し、此處は他に比して、より多く掩蔽

城内砲臺の
炸裂

されあるの故を以て、四十七密米突砲藥莖を此處へ片附けてあつたが、折も折、適我等が其の箱を圍繞せる火焰を消防せんと集まつた其の瞬間、彼等は容赦なく炸裂し始めた。數名の死傷者はバタ／＼と一時に倒れて、周囲は非常な混亂となつた。

「なアに、こりや、なんでもない事だ！直に終になるよ。」

と、クルセリは脱服しやうと試みた。然し爆發は次第／＼に頻繁となつて、新しき蛇管は相繼いで粉碎された。此の時、何處か近くにて、鋭く爆裂する鐵板の軋る音、其他雑多の音を雜へた打撃が鳴り渡つた。是れ既に六吋彈に非ずして、再び例の「大皮靴」であつた。後に生氣に返りし人々は、又も大なる恐慌に捕へられた。誰れの命も、如何なる吩咐も聞かばこそ、遂に彼等は下方へと駆け出した。

好都合に始められし我等の作業の、斯くて不成効に終りしを傷心しつゝ、下部砲臺へ降り居たる時、何物か――必ず何等かの破片なりし

なり——予が横腹へ中りて、予はひよろくと倒れんとした。

「又やられましたか？」

と、口より葉巻を取り、恰も我身に振りかゝつた事かの様に、頭を傾けてクルセリは尋ねた。

予も亦彼れを視た。而して「あゝ若し全艦隊が、斯かる持堪ある人で充實して居たならば……」と、予は熱々思つた。

十一 棄てられたる殘骸

又もや例の
大皮箱

却説、我が艦隊は、其の急激なる回頭と共に、當初より間斷なく我が針路遮断に倣々たりし日本艦隊をして、我が前面に進出せしめざらん様、漸次針路を右方へ傾けつゝ、スワロンより離れ去つた。其の結果、兩敵は異徑同心の孤線——我れは内側に沿ひ、敵は外側を——を畫きつゝ進むこととなつた。凡そ午後四時、運命は、恰も之れを最後に一たび我等に幸せんとするかの如くであつた。

破壊せる烟突より噴出する黒煙と、砲彈又は火災より湧き起る濃煙の、此の際なほも海上に深くたなびける濃霧と相混じて、海面を蔽ふ濃厚なる煙霧の裡に、日本主力艦隊は我艦隊と分離し、遂には之を境界より逸した。

予が引用する日本側の報告は、此の挿話に關し、至極簡單且つ曖昧棄てられたる殘骸

運命は一たすび幸せん

に記述して居る。然し、東郷は、我が艦隊が何としても一縷の血路を開き、北方へ突破せんと奮闘するものと認め、之れを搜索せんと北上したが、上村は此の意見に同意せず、自己麾下の巡洋艦を率ゐて、南及び南西の方位へと赴いたことだけは明瞭である。「日本海大海戦」てふ書冊に、特に「上村提督の剛勇」なる標題を設け、一節殆んど熱烈なる讚辭稱詞もて満たされ居るにても此の間の消息は解し得られる。實にや、若し此の上村の「剛勇」なかりしならば、或は五月廿七日の戦闘も、あれさてにて終結し、我艦隊も亦離散せる各艦を集合し、或は之を修整するの餘裕を有せしやも知る可からずであつた。上村は東郷と分れ、先づ南方へ向ひ、次に南西の方位に進行しつゝありし時、西方遙かに波上を渡る股々たる砲聲を聞き、急據其の方へ直航し見れば、こはそも片岡提督——此時まで随分不首尾なりし——が、我巡洋艦及び運送船の一隊を襲撃して居るのであつた。上村艦隊も、直に火

上村提督の殊功

蓋を切つて此の交戦に参加しつゝありし内、やがて此處に我が主力艦の來るに達着した。我が艦隊は、直徑殆ど五哩にも及ばん圓形陣をなし、曩きにアレクサンドルが不意に轉回せし處、而して又其の附近には、援けなき孤艦スワロフが漂ひつゝある地點へと、今し引返し來つたのであつた。

時に午後五時頃なりき。

我等はクルセルと共に下部砲臺内に在りて、葉巻を喫しつゝ、職務に縁なき四方山の事ども談じ合ひ居たりしが、此際まで、廣き海上に心細くも孰然たりし我がスワロフは、曩きに四分五裂、殆ど隊列を成さずして北方へ進航しつゝありし我が艦隊の、此時復び來つて我れを中間に狭むのであつた。

或艦隊は我右舷より通過し、他のものは左舷よりした。先頭艦には全隊を率ゐてボロヂノ——艦長はセレブリヤンニコフ大佐——が進む

棄てられたる砲艦

片岡艦隊との接觸

だ。大破せるアレクサンドルは、激しく傾斜して、殆んど下部砲臺の砲門の邊までも水中に沈下し、航歩奄々、列外に在りて後れ勝ちに續行した。然し猶ほ無難に残つた砲噴を動かしては、敢て抗戦を罷めなかつた。予は同艦を目撃せざりしも、其の衝角より十二吋砲塔に至る艦首部の全體は、恰も剝ぎ去られた様であつたと人々は談つて居た。主力艦隊の方へ閉縮したる巡洋艦隊、及び運送船隊の後部稍左舷に偏りて、片岡提督麾下の攻撃枝隊——片岡提督の外、尙出羽、瓜生、及び小東郷の各提督ありたり——が、追尾した。上村は同隊の右即ち東方に續行して北上した。

機關部不能となる

「大皮砲」は依然暴威を振つて掃射するのである。機關部よりは、既に若干時前に、「通風機は空気を送らず、濃煙を運ぶ爲めに、人々は窒息する、斃れる、て、はや直ぐに一人として勞作し能はざるべし」と報じて來た。電氣は暗くなる。發動機よりは蒸気の不足を訴へて來た。

又もや起る警報一番。

「水雷艇が接近するぞ!!」

提督艦の救

人々は我艦唯一の火砲——他の一門は終に修整する能はざりき——へと駆けつけた。が、此は偶然にも我がブライヌイであつた。彼れは我が附近を通過して、何事か役に立つ事もがなとの自己の發意にて、態々此の不具となれる戦艦の側へと接近し來つたのである。

參謀長は舷端に在りしが、クルジヤノウスキーに對ひ、手旗もて同艇に、提督を收容されたしと信號すべく命じた。

予はブライヌイの運動を注視し居たりしが、其際何處よりか、忽然提督の從卒ピヨトル、ブチコフは現れ來り、予が許に駆せ付けて、

「中佐殿！水雷艇が参りましたが、提督は轉乘する事を厭がられま

す。何卒、砲塔へ御出て下さる。」

と懇請した。茲に一言辯明し置かざる可からざるは、提督は糊帶所に

負傷後の提

「到らず、且つ負傷當時にも、傍人の種々なる間に對して『此は何でもない』と、殆ど腹立し氣に返答し居たる程なれば、誰として其れ程彼の重傷を負へるを知る人はなかつた。彼れを砲塔へ運び、箱上に座せしめし後、彼れは長く其の位置に残り居たりしが、時々頭を擡げては、戦況に關し何吳と質問をなせしも、此の後は頭を伏して沈黙に陥り、たゞ静座せるのみであつた。然し、スワロフがありし此際の状態にては、彼れ若し健在なりとも他になすべき策はなかつたのである。彼れの舉動は、萬事極めて自然であつた。彼れは爲すべきは爲し、其の爲し能はざるに陥りて、爲すことなかつたのである。此等の質問はたゞ、彼れのエネルギーの發熱である、又簡單なる知覺の閃きてあるとより、思はれなかつた。今や水雷艇接近に關する報告に對して、彼れは覺醒して、『幕僚集合』と明確に命令したが、次いで直に海面して此以上何ものも聽くを欲せざるやに見えた。

嗚呼此一戦

漸予の負傷は加ふ

クルセリの援助によりて、予は下部砲臺の取捨てられたる砲郭を経て、右舷中部六吋砲臺前方の通路へ抜け出たが、疊さに受けたる負傷の爲めに予は既に何者かの援助を要するに至つたのである。破片にて大臑骨より膝に達するまで、傷は長さ十三センチメートルより深さ二十五—三十七ミリメートルに達して居た。然し幸に骨には軽く觸れて居るのみであつた。裂傷を負ひたる右足は、徒らに絡み合つて意に順はなかつた。

棄てられたる殘骸

甲 砲臺の下部にありし者の中にては、
乙 フイリツボウスキー及びレオンチ
丙 エフの兩人集合し得たり。前者は下
丁 甲板より全く別世界の如く離脱し、
戊 且つ噴所の裝甲管によりて新鮮なる
己 空氣の流通せる戦闘場所に在り。
庚 最も此處に於てランプ消へたれば、
辛 彼は續々と點せしも、後者は出口
壬 近くに暗闇の側にありたり。下甲板
癸 は全く暗闇にして、電氣は消滅
甲 居たり。幕僚を捜せしむる如き深
乙 者等は、唯彼等兩人を呼び出した
丙 のみにて、他のものよりは此の喚
丁 呼に對し、何等の應答もなかりき。
戊 深き暗闇は、恰も死の沈黙に
己 司率され居たり。多分此の裝甲板の
庚 下に蔽はれ、通風機は空氣に非ずし

加ふるに、左足には、母指の骨を
 微塵に截られ居たれば、予は唯腫
 にて歩み得るのみであつた。靴足
 袋の微なる觸も、非常に烈しき疼
 痛の因をなした。加之、長靴の内
 は、雷に滴る血液にてのみならず
 甲板上に、鏢にも及ぶまで深く溜
 れる汚き潮水は、其の小孔より入
 りて、心地悪くも充滿して居た。

舷端には兵曹と數人の水兵とが、装具庫より潰倒せる燃え残りを片
 付けつゝ、勞作して居るのを見た。右舷前方に當り、三四十ケイブル
 を出てざるべき地點に、全然停止せるカムチャツカを見た。上村巡洋
 艦隊は、我艦に對すると同一筆法にて、同艦を狂射して居つた。然し

て深き煙を送りし此艦にありし人々は
 瓦礫の爲めに徐々に散らばり、遂には
 人事不省に陥りしならん。各種機械
 は運轉せず、電氣は蒸氣不足の爲に
 滅び居りしが、此間に下部より山
 へ来る人もあらず。即ちメフロフ家
 の家族たりし總員九百の乗組中、此
 の際生存せしは、唯下部の砲臺及び
 上なる舷端に在りし僅少の人員に過
 ぎざりしと云ひ得べし。

カムチャツカ
の最後

獨艇なきを
如何にせん

こは本艦に比すれば、固より問題が輕微である。

ブライヌイは我が舷門より遠からぬ處を進行して居た。其の艇長コ
 ロメイツエフ中佐は、メカンオンもて、

「提督閣下の移乗になるには、ボートが其の艇にありますか。本艇
 にはないのですから!!」

と叫んだ。參謀長とクリジヤノウスキーとは、何事か之れに答へて居
 た。予は砲塔内を覗き込んで見たが、其の装甲扉は損傷して、押しても
 曳きても動かかなかつた。肥滿せる人には、恐らく之を通過することは
 出来なかつたであらう。提督は外容さも瘦衰したるが如く、首に纏ひ
 たる血染のタオルに、頭を低く垂れて靜座して居た。

「閣下!」

と予は叫んで、

「水雷艇が参りました。轉乘なさらねばなりません。」

棄てられたる殘骸

と促がした。

「フイリッポウスキを喚んで來給へ！」

と、提督は態度を變ずることもなく、不明瞭に答へられた。

船は提督の有せし指圖

此の言によりて見れば、提督は他艦に轉乘したる上、艦隊を卒んと期せられて居つたのであらう。さればこそ、職務上責任あり、且つ安全なる艦隊運動を指導すべき艦隊航海長を求められたのであらう。

「直に連れて参りませう。はや人を遣はしましたのですから！」

提督は唯否定的に頭を打振るのみである。

提督を連れ出す前に、先づ轉乘の方法を心配せなければならぬのであるから、予は強ひて促すことを敢てしなかつた。

工提督移乗の

尙ほ他に二三の水兵とを合せて、上部砲臺より若干の半燒の釣床と、何かの綱とを索め、此の材料によりて筏の様なものを作り、之れに提督を乗せて水上に吊下げ、そして水雷艇へ移す積てあつた。如何にも

冒險的の事ではあるが、此際此の外に如何とも詮なかつたのである。筏は出來たし、丁度幸にフイリッポウスキも來たので、予等同人は砲塔へ駆け付けた。

「閣下！御起ち下さい！(15) フイリッポウスキも此處に居ます！」

提督は黙々として我等を注視し、首を振りつゝ、
「同意したのは其れぢやない。そうぢやない。いや……。」

と、情勢は愈々陰惡だ。

「何を君等は眺めて居るんだ？」

と、忽然クルセリは叫んだ。

「彼れを連れ出し給へ！彼れは全く負傷者ぢやないか？」

一同は恰も此の叫聲と此督勵を待ち居たるかの如く各人一齊に申

棄てられたる獨散

附註(15) 二時間餘に亘り、狭隘なる黒煙滾々たる戦場所にあたりし爲め彼れは幸うじて己の足にて身體を支持せり。又彼の顔面は、煤煙と流瀉せし血液の凝結せしとの爲めに、細なる碎片にて、恰も散弾を打込まれたる如く、頭部に数多の傷を負へり。

提督人事不省に陥る

合せて急ぎ始めた。氣早き數人は、砲塔へ匍ひ込んで、提督を左右より抱へ起した。彼れは辛うじて左足にて步行し得るのみである。さも苦惱らしく呻吟し居たりしが、遂に人事不省に陥つた。併し、これ反つて上首尾であつた。

「引き摺れ！」

「オイ、どしく引摺れ！」

「引いた方が楽だ！」

「エー何だ。」

「横に、横向にセッ！」

「待て！裂けるぞ！」

「何が裂けるんだ！」

「上衣が裂ける！」

「引張つて行け！」

などと、忙し氣な聲は周囲に鳴り渡つた。

一方ならぬ努力を以て、曲りたる上に固着せる砲塔扉の狹隘を通じ軍服を引裂きなどして、漸く提督を艦部通路へ運び出し、既に後へ結び付け様として居た。其際、コロメイツェンは、人一代に、其れも神祐ならねば二度と出來ない離れ技をやつた。斯る事は、海員には當然明なる事ではあれど、陸上の讀者には、無論此の冒險な舉止の逐一は想像にも及ばない事であらう。先づ彼れは、此の潰滅せる戦艦の(16)風上の舷側に、其の壊れたる一層高き砲郭と、壁裂して凸出せる砲身、及び敵砲の爲に粉碎されたる水雷防禦網等の間に衝立つた。驅逐艦は狂瀾怒濤に揺られつゝ、時に或は其甲板を、九俣の山にも比すべき我艦の通路と同じ高さに持ち上げられ、或は急轉直下奈落の底に墜下され、又は澎湃たる波濤の爲めに

二度と出來ない離れ技

附註(16) 風下へは、火災より發する全火船と全艦船とを吹き付けたれば此の方より接近するに難なかりし。

適か彼方へ掠め去られ、時には艦側に停まりて急激に轉旋し、一瞬は一瞬と、此の不動の巨物に己が脆弱なる舷側を碎破せんずる危険を冒して居た。提督は人々の手上に抱へられて、砲塔と上部砲臺の舷門との間の狭き通路を経て、艦部より艀部の舷端へ急ぎ運搬され、此處より人の肩によりては舷側に把まり、潰滅せる砲郭の上に少時とどまりしが、驅逐艇が艦側に近付きて波上に揚りたる好機を狙ひて、艇上へ投げ入れる如く移乗せしめた。

「ウラー！提督は水雷艇上へ！！ウラー！！」
と朝を打振りつゝ、クルセリは絶叫した。
ウラーの聲は四隣に鳴り響いた。

十二 悲劇の最期の一齣

巨大なる残骸を見棄て去る

如何にして予は、己が損傷せる足にて水雷艇へ乗移つたか、全然記憶もない。が、唯驅逐艇上、兩煙突の間の熱き鑛蓋の上に横臥しつゝ、眼を離さずスワロフを視て居た事のみは、明かに記憶に存して居る。此れぞ、永久予が記憶より決して忘れられぬ瞬間であつたのである。ブライヌイは、此際スワロフの舷側にありて、管に艇體を粉碎するの危険に陥り居たるのみではなかつた。スワロフ及びカムチャツカは共に、齊しく日本艦隊の猛烈なる砲撃を受けつゝあり、其破片の爲め、艇上には既に死傷さへ發生したのである。寸断なく飛來する砲彈の一发、若し來りて落下せんか、忽ち之れを海底の藻屑となし能ふのであつた。

「早く離れ給へ！」

悲劇の最後の一齣

海に残りて殉する勇士

と、クルセリは舷端から叫んだ。

「愚圖くするな！ 離れ！ 提督を見殺しにするな！」

と、舷へ吊下りては、拳にてコロメイッホフを威嚇しつゝ、ホグダンフは喚いた。

「離れんかい！、エー畜生！！ 離れないかい！」

と、今し右舷前部六吋砲塔後方の砲郭から抜け出たウキルボンが後を次いだ。

「離れ！ 離れ！！」

と、或は舷端へ上り、或は下部砲臺の砲門より覗ける兵員等は朝を振りては彼等の後に繰返した。艇が舷側より離れたる好機を見計らひ、コロメイッホフは、後進を命じた。

訣別のウツ

訣別のウツは、スワロフから煙々と齧らされた。予は茲にスワロフからと言つた。然し、此の濼々たる煙に圍繞されたる燃残りの巨物

を見て、之れを今しがたまで、威風堂々たる戦闘艦の成れの果と知るものが果してあるであらうか。

大橋は中半より折断され、前橋及び兩煙突は跡方もなく掃蕩され最上艦橋及び歩廊は恰も切断されたるかの如く、其後には、形もなきまでに廢壞せる鐵の堆塊の、狼籍としてうづ高く、甲板上に累積して居た。左舷は傾いて、低く水面に低下し、舷は水線下部の赤き腹部まで高く露はれ、舷孔よりは猶ほ熾に猛火を噴き出して居た。

悲劇の最後の一幕

附註 (17) 後にてコロメイッホフの被破すべきをみて、(外部よりは明瞭に之を認め居たり) 彼はボグダノフ、ウキルボン及びクルセリに對し、彼等も全くと殘存せる乗組員を纏めて轉乘せざるかを質したり。(無論、命中等一發の水雷にて、沈没せん事困難ならざりし) 然し、斯かる決心をなさんか、先づ細かなる搜索して、生存者(健康者及び負傷者とも)の全部轉乘すべく、一所に集合すべく注意せざる可らず。……假令一人にても、之れを棄て去りて、殆んど自ら手を下して殺すが如く、之れを見しに放任し得べきや……されど、些の時間を以ては相當の時間を要す……

今後の問題

時に午後五時三十分。
既に述べしが如く、スワロフ艦上に於ては最後の瞬間に至るまで誰一人提督が受けられたる重傷に就いて、明確なる想像を有するものがなかつた。されば、ブライスイ艇上にて、先づ第一に起つた問題は向後艦隊を指揮する爲には何れの艦艇に、提督を移すべきや疑問であつたが、看護長ビヨトル、クヂーノフが初めて彼を看護すべく進み行つた時に、形勢は一決したのであつた。クヂーノフは、提督の傷状は、今や生死の境、間一髪の處である。頭蓋骨の碎片は内部に陥入し居れば、有らゆる衝動は、彼

意外に重き提督の負傷

間もなく飛來する砲弾は、直ぐに艦をば、其上に在る幾多の勇士と共に海底の深淵とせんとし、其に此際は一瞬尙千萬金の價あるのであつた。總てを殺すべきか、主要なる一部を活かすべきかの場合に於て、斷然後者に決心したれば、斯くてホグダフ、オキルイボフ、及びクルセリ等の名は、長らく青史に輝く所の人となれり。彼等はブライスイ艇長より若しく後輩なりしも、いとも權威に、いとも敢爲に、「離れい!!」と絶叫し、彼れも亦彼等の首に背く能はざりしなり。

を死に導くものであると斷言した。而して斯かる強風怒濤の威を逞くする荒天にては、彼れを何れかの艦艇に轉乗せしむるは、到底不可能である。加之、自己の脚にて自己を支立する事は、彼れは到底能はぬのである。且一般の状態は、體力の沮喪、意識の遺失、時に譫語し、時に簡單なる知覺の閃きを見るのみにて、全く何等の活動にも不能であることを明かにしたのである。

ブライスイにて、予は最初投下せし其鐵蓋より艦橋上へと轉じた。然るに此處に於いて、予が兩足は全く上體を支持し得ないこととなり横臥するより詮ないのであつた。然し横臥しては、予は司令部に在りし人々を不勢妨げるのであつたが、艇長は予に好意的に、綑帶所か又は何れへなりと立退くべく勧めたのである。

此際我等は、漸やく艦隊に追附かんとして居た。而して參謀長は、何等かの信號を掲揚する前に、一應提督の意向を伺はざる可らずとな

移乗後の提督

し、予に此のことを委託したれば、予は非常なる苦痛を忍び、辛うじて、衛生隊員の扶掖により、艦部へ到達し、タラップを降りて、艦長室を覗き見た。看護長は、今將に繃帯を終らんとして居る。提督は半ば眼を閉ぢ、微動だもせず、釣床に寝て居られた。然し、知覚は猶ほあつた。

彼れを呼び起して、予は彼れに、艦隊の指揮を繼續するに耐ゆる力ありや、又何れの艦艇に轉乗するべく命ずるかを問うた。提督は苦し氣に、やをら面を予が方に向け、若干時間恰も何物かを想起せんと力むが如くなりしが、

「否！何處？君自身で見てるだらう。指揮はネボカドフに——」

と、不明瞭に彼れは言はれた。而して又、忽然たるエネルギーの發

附註(18) 提督は、頭部、背脊(肩甲骨の間)及び兩足に負傷し、何れも重傷及び挫傷は算入せず。

提督最後の命令

作と共に附け加へた。

「艦隊は浦鹽斯德へ向へ針路北東二十三度——」

又更に不省に陥つた。

此答を參謀長に申送つて何人を介してか記憶せざるも、多分レオンチユフなりしならん予自身は士官室に止まらんと思つた。然し、此處には全く身を措く所もなかつた。艇内の場所と云ふ場所は、上甲板さへも人を以て充滿されて居た。スワロフへ立寄る前、本艇はオスラビヤの沈没した個所にて既に二百人以上も收容して居たのである。

此等の中には、海水に漂遊して半ば潮水を飲み居たる半死者もあつたが、其等の如きは、苦しき嘔吐、又は胸部の疼痛の爲めに、痙攣を發した如き蒼白の顔容を呈して、最も重き負傷者よりも、尙ほ險惡なる徴候を露はして居た。予は上甲板へ抜け出て、士官室へ通ずるタラップの傍にあつた、何かの箱に足を投げて腰かけた。艇の橋上には信

非常なる艇内の騒音

號旗が翻つたのみならず、附近に航行して居たベズウブレイチユイ及びベドナイの兩艇には、信號機で何等かの命令が傳へられた。尙ほ此時、我等は既に艦隊に追附いて、其運送船隊と俱に進行して居たが、同隊は前部及右側から巡洋艦で掩護されて居た。左方約三十ケイブルの處には、我が主力艦隊が進行して居た。ホロヂノは先頭艦として全艦隊を率ゐ、之れに次いでアリヨールが進んで居たが、アレクサンドルは見えなかつた。同艦は午後五時半頃沈没したのであつた。海上遙かに將に至らんとする暮靄の中に、之れと並航しつゝある日本艦隊の影が、朦朧と見えて居た。艦砲發射の紫電は、間断なく彼等の線上に閃いて居て、頑強なる戦闘

我が艦隊の状況

附註 (19) ベズウブレイチユイには、ニコライの側に赴き、信號機によりて、前指揮者より新指揮者即ちネボガトフ提督への命令を傳達すべく命ぜられたり。尙ほスワロフ號より残存せる人員を收容すべく、ベイドウイを差遣したるも、彼はスワロフを發見せざりしとぞ。その何故なるを知らず。

オスラビヤ最期の物語

は尙も中止されなかつた。

予は我が隣にオスラビヤ號乗組の一人の將校を見付けて、實際甚麼様な破孔が、艦を破滅させる基因——致命傷——となつたかを尋ねた。彼れは妙に手を打振り、さも慚愧に堪へざるかの如き音調にて、断々に語り出した。

『何が、如何して、と想ひ出すも悲惨です。味方に何一つの僥倖もなく、唯不運な事計りて、はい、恐らく是れは誰一人異論はありません。實際敵はうまく射撃しますね！でも、まア、之が照準したのでせうか。技巧でしょう？ いや、僥倖でせう！ 運でせう！ 魔の様な仕合せ！ 三彈が引續いて殆ど同じ所に命中するなんて！ いしてすか。皆同じ所にです！ 皆艦首部砲臺下の吃水線へです。孔口ぢやない。もー、門ですよ！ しかも三頭立の馬車でも通りませうよ！ 一寸、傾斜しかけたら、既水の下です。決河の勢、まるで大瀧です。

艦隊の最後の一瞬

無論隔壁が支持なかつたのです！どんなものでも支持ますものか？」と、彼れはヒステリーの的に叫んだ。而して忽ち両手に顔を掩ひて、撞と計りに甲板上に倒れた。

午後七時頃、我主力艦隊の針路に敵の水雷艇隊出現したれば、巡洋艦隊は之に向つて猛烈なる砲火を開いた。彼等は急速遠ざかつた。航路に水雷を投下せざりしやと、予は疑懼の念を懐いた。

ボロヂノの最期

「ボロヂノを見給へ！、ボロヂノ！」と、俄然擾がしき叫が周囲に響き渡つた。予は出来得るだけ素早く手を以て起さ上がった。然しボロヂノの今までありし處には、唯白き濤の高く捲さかへるを見るのみであつた。

敵水雷艇の夜襲

午後七時十分なりき。敵の艦隊は急に右方へ回頭して、東方へ去つたが、其交代には、水雷艇の集團が進動して來た。彼等は北、東、南の三方より、我等を半

圓形に包圍して、我等の艦部より攻撃する準備に着手した。我が巡洋艦は我等は其後に順次に左方に折れ、遂に殆ど真直に西方へ、夕陽の方へ羅針儀は予の身近に在ざりし進航した。午後七時四十分にして、予は猶ほ我が戦艦隊を見た。同隊は、周囲に付き纏へる水雷艇に應射しつゝ、不規律なる陣形にて、我等の後方より進行して居た。

予が最後の手記

此れぞ予が最後の手記なりき。予が症状は益々悪しくなつた。出血多量なると及び長く纏帶せず、汚物に塗れし傷口の癒癒し始めしとの爲め、非常なる衰弱、悪寒、頭痛を覺えたれば、予は介抱を得べく、下部へ下降した。

スワロフの最期

スワロフ號の末路は如何？ 茲に日本人が彼れの最後の瞬間を記載せるによれば、敵は我が巡洋